

I. 前 言

三重県教育委員会では、国及び県にかかる各種公共事業に関して、各開発部局の事業を照会し、事業予定地内の文化財の確認と、その保護に努めている。

こうした中で、三重県農林水産部農村整備課（当時）から、県営圃場整備事業堀坂川沿岸地区の照会を受け、三重県教育委員会文化課（当時）が、事業予定地内の遺跡分布調査を実施した。その結果、事業地には数箇所遺跡の包蔵が推測された。文化課では、詳細な遺跡の実態を把握するために、昭和62年1月30日～2月3日に範囲確認調査を実施した。その結果、松阪市美濃田町字出口において遺構・遺物が確認された。この取扱いについては、その保護

に努めるよう県農林水産部・松阪農林事務所（当時）と、県教育委員会文化課で協議が重ねられ、設計変更等による保存が図られた。しかし、どうしても現状保存が困難な1,800㎡については発掘調査を実施し記録保存することになった。

調査は、次年度の稲作開始までに完工する必要がある工事工程との整合から年度上半期に行うこととなった。しかし、調査区周辺は減反転作による麦の作付けがあり、これへの影響を最小限に止める必要が生じた。そこで調査区を東西に分割し、まず西側半分を発掘し、その排土を東側に置き、その後、その逆を行うという工程で実施した。

II. 位置と環境

「美濃田の大仏」で知られる松阪市美濃田町は松阪市の北西側郊外に位置する。西方には紀伊山地の東端を形成する標高700m級の山地が連なり、そこから伊勢平野に向かって大規模な扇状地が複合的に発達している。宮ノ沖遺跡（11）は、その扇状地の先端部ちかく、美濃田集落の南端に位置し、標高は20m、現況は山林・畑・水田である。

さて、大仏であるが、松阪市指定文化財「銅造阿弥陀如来坐像」で像高は3mを測り、この地域では最大級の仏像である。敏太（みぬだ）神社（8）の本地仏として、その別当寺である真楽寺（7）の塔頭長楽寺に江戸時代に安置されたものである。その敏太神社は延喜式に記載のある神社で真楽寺と共に美濃田集落内に鎮座する。1.5km南方には「国分寺」と伝えられ白鳳期に遡る伊勢寺廃寺（19）があり、さらに宮ノ沖遺跡近辺を古代の官道が通過していたと推測される^①など、律令制下においてはかなり開けた地域であったようである。それを裏付けるかのように、広大な面積を占める伊勢寺遺跡（15）、前沖遺跡（16）、曲遺跡（18）等、周辺で行われた発掘調査において、この時期の集落跡や三彩陶器等が出土している^②。ただし、これらの遺跡は律令制下において飯高郡に属し、一志郡の南端に位置する美濃田

集落とは郡を違える。一志郡側に目を向けると、白鳳寺院が集中し、発掘調査により律令期の遺構・遺物が多数検出されている^③雲出川水系とは様相が異なり、僅かに小野遺跡（2）で発掘調査が行われ、律令期の遺物が出土している^④のみで集落の解明には至っていない。ただし、式内社である阿射加神社（5）が鎮座しており、郡端とはいえ飯高郡から引続きこの時期の集落が広がっていたことは容易に推測できる。

一時代遡って古墳時代では、一志郡に集中する前方後方墳の内、最大の向山古墳（1）は当遺跡から遠望でき、南方1.5kmの深長古墳（17）は推定径50mの円墳で首長級とされる^⑤。また、西方の山地裾部分には群集墳が分布し、中勢から南勢にかけての群集墳密集地帯の一部となっている。八重田古墳群（21）、垣内田古墳群（12）、天神山古墳群（14）、平林古墳群（20）等が発掘調査され、4世紀後半～7世紀前半までの円墳を中心とした群集墳である^⑥ことが判明している。これらの他にも山腹に分布する瑞巖寺古墳群（13）、美濃田集落内では敏太神社境内を中心に分布する美濃田古墳群（9）等が知られている。

一時代降って中世では、阿射賀御厨、勾御厨等の伊勢神宮領が成立し、宮ノ沖遺跡東方には醍醐寺の

荘園「曾祢荘」が推定されている^⑦。遺跡としては、宮ノ沖遺跡に隣接する別当垣外遺跡（10）には中世の遺物が散布し^⑧、発掘調査においても既述した律令期の遺跡の多くで中世の遺構・遺物を検出している。遺跡の性格に言及できたものは少ないなかで、上ノ庄宮ノ腰遺跡（6）では曾祢荘の荘官クラスの屋敷が検出されている^⑨。

南北朝から戦国期にかけては北畠氏の勢力下にあったようで、北畠満雅が阿坂城において北朝軍を迎え撃ったとされている。水源を絶たれた際に白米を水に見せかけて馬を洗ったという伝説から白米城とも呼ばれ^⑩、国史跡に指定されている。この阿坂城跡（4）の山麓に北畠氏の菩提寺である浄眼寺（3）がある。阿坂城と対になり北畠氏の一拠点として機能していたようで、北畠氏関係の文化財を多く所蔵している。このように中世後半では北畠氏に關係の深い地域と言える。

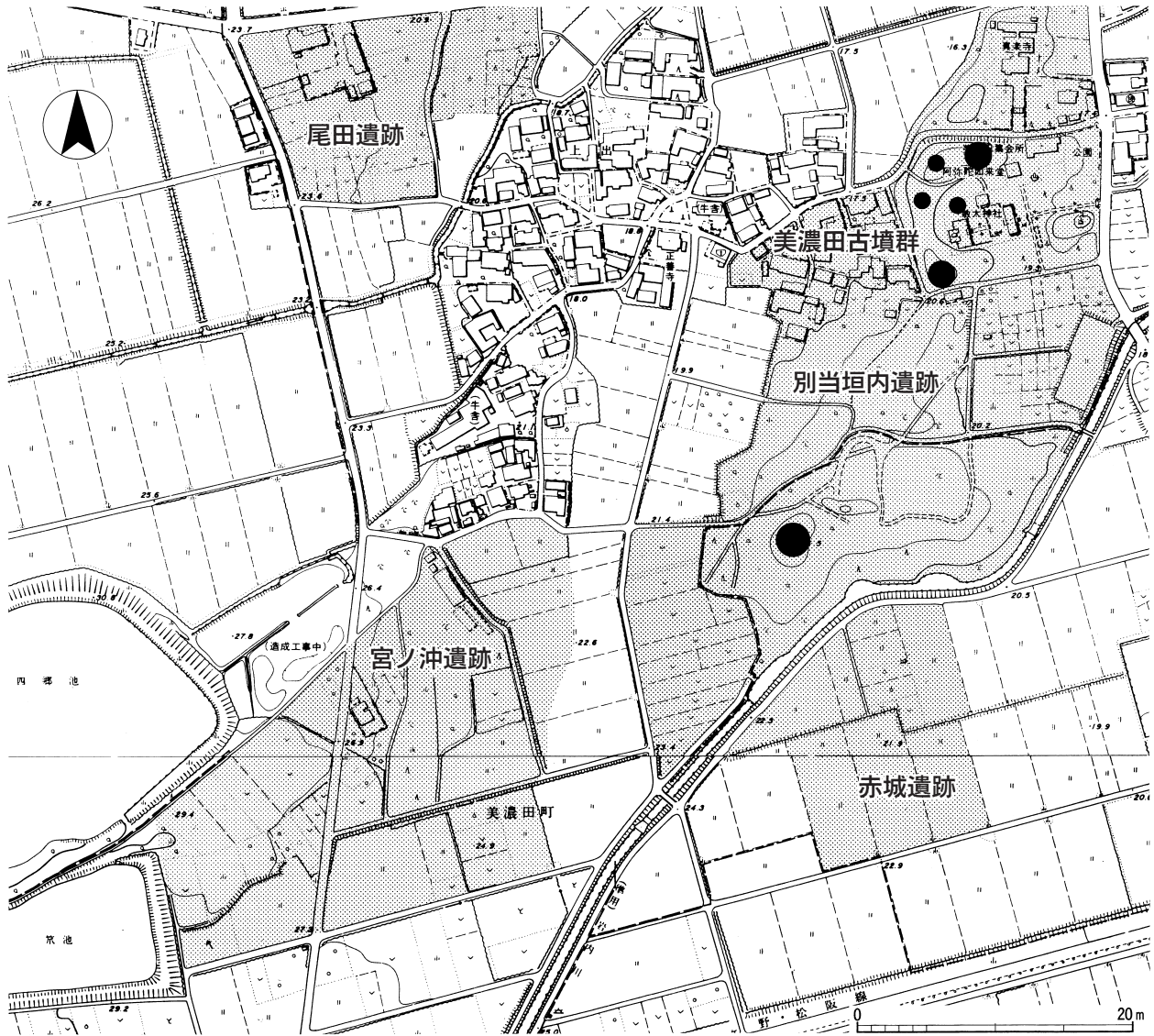
なお、丘陵端に所在する横尾中世墓群（22）では発掘調査の結果、土坑、配石区画墓等さまざまな形態の墓が検出されている。中世を通して埋葬され、墓域としての意識は近世にまで及んでいたようである。その近世には宮ノ沖遺跡周辺は紀州藩に属し、そのためか既述した大仏も紀州粉河の鋳物師によるものである。敏太神社の境内に一堂を設けられ、静かに安置されている。

〔註〕

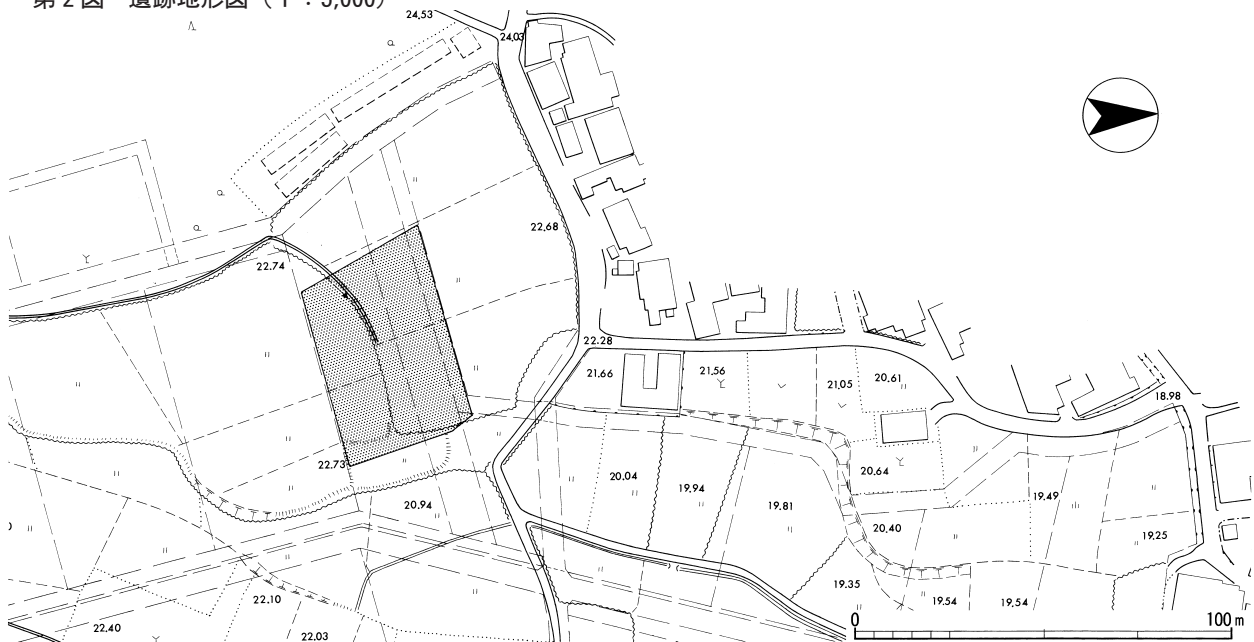
- ① 上田正明編『探訪古代の道 第一巻』法蔵館 1988年1月15日
- ② 三重県埋蔵文化財センター『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』1990.3 ほか多数
- ③ 一志町・嬉野町遺跡調査会『「一之郡」の考古学』1989 ほか多数
- ④ 三重県教育委員会『昭和50年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1976.3
- ⑤ 三重県教育委員会『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』1989.3



第1図 遺跡位置図（1：50,000）〔国土地理院「大河内」「松阪」「大仰」「松阪港」1：25,000より作成〕



第2図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第3図 調査区位置図 (1 : 2,000)

- ⑥ 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告第2分冊2』1990.3 ほか多数
- ⑦ 三重県埋蔵文化財センター『宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅰ』1997.3
- ⑧ 松阪市史編さん委員会『松阪市史 第二巻 資料篇 考古』1978.10.31

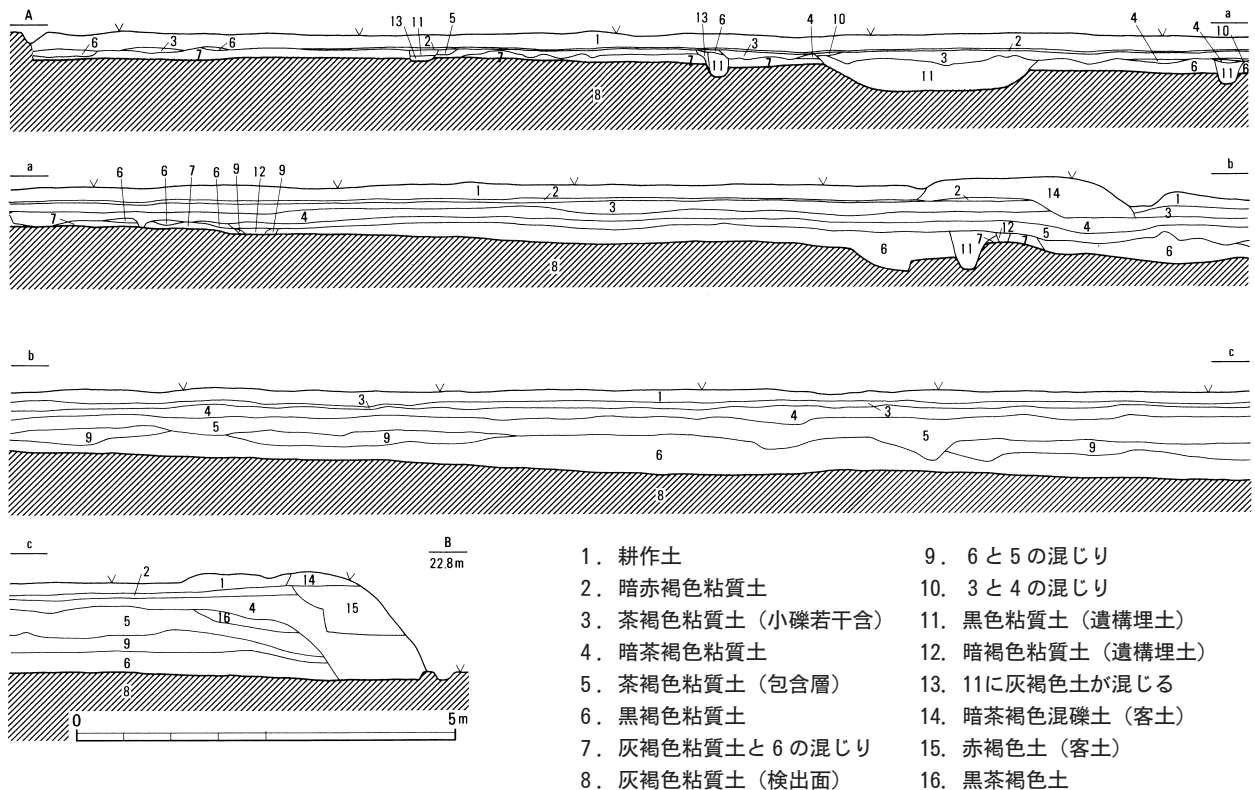
- ⑨ 三重県埋蔵文化財センター『宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅱ』1999.3
- ⑩ 下中那彦『三重県の地名 日本歴史地名大系第24巻』平凡社 1983年5月20日
- ⑪ 三重県埋蔵文化財センター『横尾墳墓群（中・近世墓）発掘調査報告』2009年3月

Ⅲ. 層 序

宮ノ沖遺跡は、前述のように扇状地先端部に位置するため、全体的には西から東へ向けて緩やかに傾斜している。しかし、調査区付近は水田開発を受けているため、水田一筆毎に西側は削平され、東側は盛土、水田境では低い段差を形成している。

基本層序は、耕作土（1）、水田耕作に伴う鉄分の沈殿層（2）、水田の床土（3）、暗茶褐色粘質土（4）、茶褐色粘質土（5）、いわゆる黒ボク土（6）の後、灰褐色粘質土（8）に至る。遺物包含層は茶褐色粘質土（5）のため黒ボク土上面で遺構検出を行うべきところであるが、遺構埋土が黒ボク土と酷似しており識別が困難のため、1層下の灰褐色粘質土（8）で検出を行った。

最も削平が激しい調査区西端では、厚さ20cmの耕作土の下に若干の黒ボク土が残存するものの直ぐに検出面となり、地表から検出面までは僅かに30cm程度である。一方、調査区東方では遺物包含層は厚さ20cm、黒ボク土は厚さ40cmに達し、東半では両者の間に1層加わる。調査区北東端では地表から検出面までは1.2mに達し、包含層下から検出面までは最大50cmの間隔が生じている。このため灰褐色粘質土（8）上面での遺構検出は不正確とする懸念が生じる。しかし、遺物の包含や遺構密度は希薄となり、遺跡東端の様相を示し、土層観察においても遺構が浮いた形跡も無かったことから、このまま灰褐色粘質土（8）上面での遺構検出を行うこととした。



第4図 調査区土層断面図（1：100）

IV. 遺 構

奈良時代から中世までの遺構を検出した。奈良時代は竪穴住居と掘立柱建物、平安時代は掘立柱建物を中心とする集落跡で、当遺跡の盛行する時期である。

既述したように、検出面が東に向かって傾斜しており、遺構密度も希薄となる。遺構埋土は、奈良から平安時代のもは黒褐色の有機質土であるが、中世のものは灰色味の強い暗褐色土である。

1. 奈良時代の遺構

竪穴住居 2 棟、掘立柱建物 2 棟、湧水源から発生する大溝、墓状遺構、多数の土坑を検出し、当遺跡が盛行する時期のひとつである。

(1) 竪穴住居

SH3 (第 8 図) 調査区北端部で南隅のみを検出した。大半は調査区外のため全体の形態は不明である。深さは検出面から 30cm ほどであるが、西壁の傾斜が緩く竪穴住居と推測するに疑問もある。埋土は広く焼土に覆われているが、壁や床面は焼けていない。床面に接する焼土塊は少なく、上屋が焼けて落下したという状況ではなく、この焼土が何を示すのかは不明である。土師器・須恵器の各器種が出土しているが、残存度が 1/2 を超えるものはない。

SH16 (第 6・7 図) 調査区中央部で検出した一辺約 2.5m の方形を呈する小型の竪穴住居である。深さは検出面から 20cm 程度の残存であるが、北辺中央にカマドを設けている。カマドは、馬蹄状に黄褐色粘土が残存し、粘土の高さは竪穴住居壁際が 20cm、壁から離れるほどに高さを減じ、南端では 10cm 程度である。断面観察によると、床面上に厚さ 5 cm 未満の白色細礫が薄く分布し、人為的に床に敷かれた可能性がある。この上に高さ 20cm 程度の石を支柱石として立て、この支柱石を固定するためか、黒色土混じりの暗褐色土を配する。暗褐色土は厚さ 5 cm 程度でカマドの竪穴住居壁側半分程度に配されている。その暗褐色土の上に既述した黄褐色粘土が馬蹄状に設置されている。カマド内部は炭混じりの焼土が 5 cm ほど堆積し、土師器甕片が散乱していた。接合の

結果、ほぼ完形となったものが長胴甕 47 (第 16 図) である。おそらくカマドに設置されていたものであろう。この他にも 41・48 がカマド内から出土しているが、残存度の低いものである。なお、土師器甕 42 (第 16 図) はカマドの西側に接するようにして体部完形で出土したが、これもカマドに関する備品の可能性がある。

なお、前述した白色細礫は竪穴住居壁から 10cm ほど手前で突然途絶える。このことから周溝は検出できなかったものの、本来は浅い周溝が存在した可能性が大きいものと考えられる。カマドの設置作業は、これらの敷土や周溝の設定が完了後、改めて行われたようである。

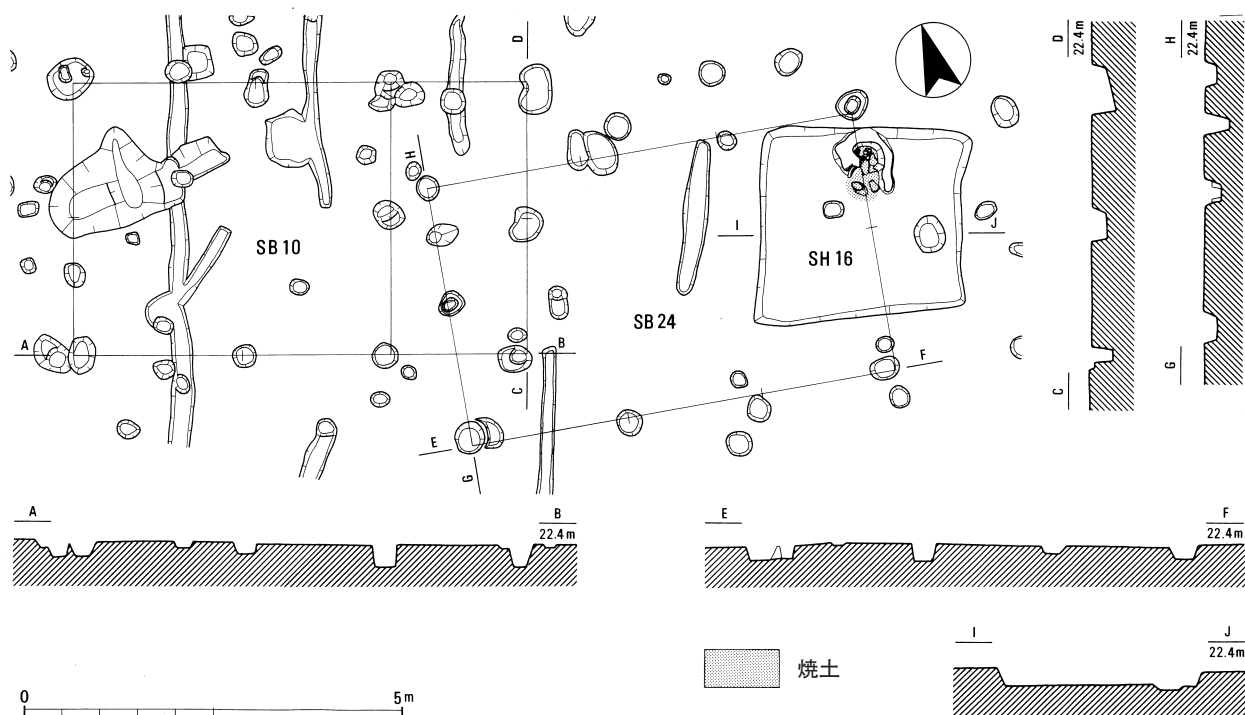
(2) 掘立柱建物

SB6 (第 9 図) 調査区北端で検出した。調査区外に延びる可能性もあるが、2 間×2 間の東西棟としておく。柱掘形は円形にちかいものもあるが、本来は一辺 45cm 前後の方形であったものと考えられる。柱痕跡を検出できたものがあり、それによると直径 25cm 前後の柱であったようである。柱間は桁行・梁行ともに等間で、柱間は狭く、高い強度を示している。中央に楕円形の浅い柱穴があり、束柱の可能性もあるが、柱筋の通りが悪く断定できない。したがって、倉庫として利用されていた可能性を示すまでに止める。柱穴から奈良時代の土師器杯・甕片が出土し、竪穴状の土坑 SK31 と重複するが、それより後出のものである。

SB14 (第 9 図) 調査区西部で検出した 3 間×2 間の東西棟と考えられる。柱掘形は、不整形なものも多いが、本来は一辺 50cm 前後の方形を呈するものと考えられる。掘形に重複のあるものもあり、同一規模・同一方向で建替えられている可能性もある。当遺跡のものとしては大型の柱掘形をもつが、桁行の柱間は狭く、高い強度を示す。ただし、北側桁行は等間であるが南側は極端な不等間となっている。柱痕跡を検出できたものも多く、直径 20cm 程度の柱であったようである。また、柱穴底部に柱の沈下痕跡を示すものもある。



第 5 図 調査区平面図 (1 : 300)



第6図 SH16、SB10・24実測図（1：100）

律令期の土師器甕片が出土しているが、この時期とする決め手に欠ける。平安時代のものとは大きく方向を違えること、柱掘形の規模に対し柱間が狭い形態がSB6に類似することからこの時期とした。

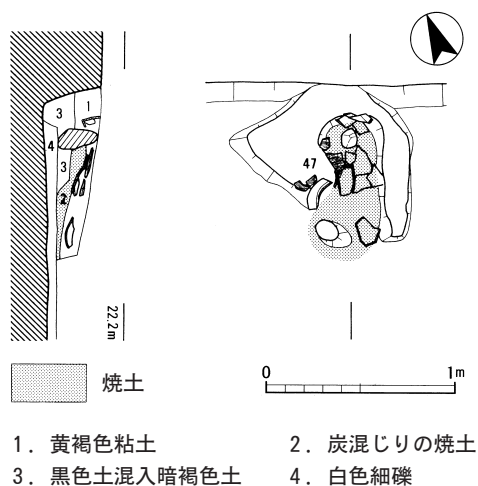
（3）土坑

SK2 調査区北西部で検出した直径1mの不整形円形を呈する土坑である。検出面からの深さは壁近くで5cm程度、中央へ向かって徐々に深さを増し、中央部では15cmを測る挿鉢状の形態である。土師器杯片等が出土したが、埋納と思われるものはない。

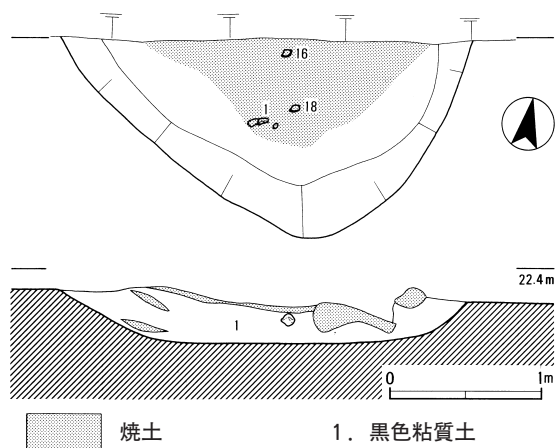
SK18 長径140cm、短径80cmの長円形を呈する土坑である。深さは、壁周囲20cm程が検出面から10cm、中央部はさらに10cm下がる。土坑の性格は不明であるが、近隣のSK21等と一連のものかもしれない。土師器の各器種が出土しているが、残存度の高いものはない。

SK19 調査区南部で検出した直径3mの不整形円形を呈する大型の土坑であるが、深さは検出面から15cm足らずである。南西部はSK21と接し、これと一体の可能性も残る。平安時代に降る土師器片も少量含むが、重複するSD36からの混入と考えている。

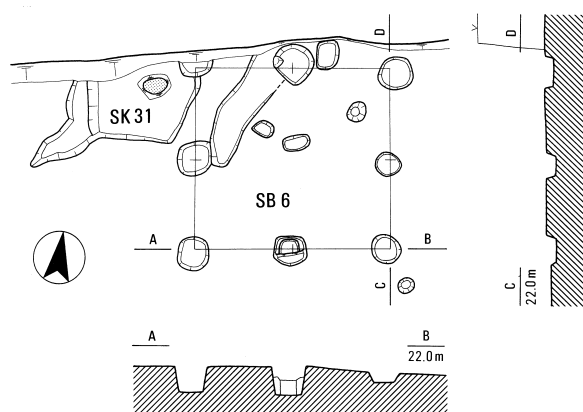
SK21 調査区南端で検出した直径4mの円形土坑である。深さは検出面から15cm程度であるが、土



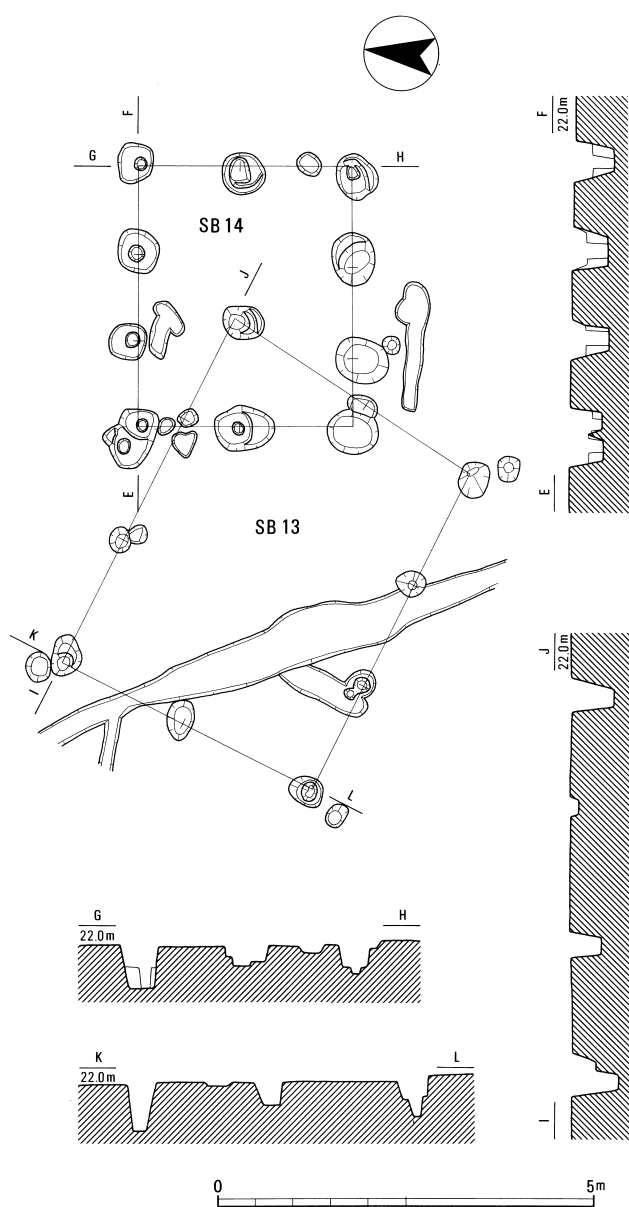
第7図 SH16カマド実測図（1：40）



第8図 SH3実測図（1：50）



焼土



第9図 SB 6・13・14、SK31実測図（1：100）

坑内には直径1 m程度の落ち込みが多数あり、多くの土坑が重複しているようである。土坑内からは奈良時代の土師器杯・皿・甕等が多数出土した。杯類には格子状の線刻があるものが多く含まれ、祭祀等に利用されたものが集中的にこの地点に投棄された可能性がある。

この地点では、包含層からも多量の土師器杯皿類の遺物の出土があり、焼土塊も含んでいた。遺構として検出面よりかなり上層から切り込んでいるものと考えられるが、包含層内で検出を試みたものの遺構として捉えることができず、包含層として処理した次第である。

SK 31（第9図） 調査区北端で検出した。調査区端での検出のため全体の形態は不明であるが、不整形な形を呈するものと考えられる。土坑中央付近に直径20cm程度の焼土の広がりを確認した。当初、堅穴住居を想定したが、不整形な形態のため土坑としておく。遺物の出土が無く、時期決定の根拠に欠けるが、SB 6に切られるため、これに先行するものである。

SK 32 調査区北部、SD 8北側で検出した長径3 m、短径2 mの楕円形の土坑である。深さは検出面から25cmであるが、南半は円形に一段深く35cmである。土師器や製塩土器の小片が出土しており、根拠に乏しいものの、この時期とした。

SK 37 調査区南部で検出した。長辺1.6m、短辺1.2mの長方形の土坑である。深さは検出面から10cm程度で土師器杯・皿類の小片が出土するに止まる。SK 38と接するが、切り合い関係からSK 38より後出のものである。

SK 38 調査区南部で検出した。長径4 m、短径1.2mの溝状の土坑である。深さは検出面から15cm程度で、土師器杯・皿、須恵器蓋等の小片が出土するのみである。SK 37と接するが、切り合い関係からSK 37より先行するものである。

SK 39 調査区南端で検出した。長径1.2m、短径1 mの楕円形の土坑である。深さは検出面から20cm程度で、土師器皿、須恵器小片等が出土するに止まる。

SK 43 調査区南部、SK 37の北西側で検出した。長辺80cm、短辺20cm、検出面からの深さ5 cm程度の

小土坑である。燻しを施さない平瓦片や土師器甕小片が出土したのみである。

(4) 溝

SD 8 (第10図) 調査区中央部を東西に延びる溝であるが、西半と東半では大きく様相が異なる。

西側は幅2m、検出面からの深さ80cmを測る大溝で、壁は垂直ちかく立つ。西端の底に直径60cmほどの楕円形の土坑がある。底からさらに30cmほど落ち込み、土師器杯(133・134)が出土したが残存度が低く、埋納されたものとは思えない。現状ではこの土坑から湧水があり、緩やかに東へ向けて流れ出る。埋土は5層に分かれ、最下層は厚さ20cmの粘質土であるが、その上層は若干の砂質分を含む粘質で、弱い流水があったことを示す。その上が粘質土、さらに砂質土を含む粘質土、最上層が粘質土となり、弱い流水と澱みを繰り返し、自然に埋没していったようである。なお、西端近くでSD28が注ぎ込む。

20mほど東進した地点で、急に幅60cmに狭まる。幅を減じた後も、深さは変化せず調査区外へ続いていく。ただし、検出面が傾斜しているため、検出面からの実測深は40cmを測ることになる。埋土は黒褐色粘質土で分層はできなかった。

以上の状況から、清水が湧き出るSD8は、井戸として利用できるものである。しかし、その形状は水を貯める施設のようにもみえ、これを利用した湧水の祭祀等が行われた可能性もある。しかし、祭祀を連想させる遺物としては、記号を付けた土師器が2点(135・136)出土したに止まる。他には意味不明の線刻を施した土師器の高杯(143)、墨書を施した土師器が2点出土しているが祭祀に関連付けることができない。また、溝が狭まる地点に堰等の施設も検出できなかった。

SD28 調査区北西端で検出した。調査区外から若干蛇行しながら南下する。幅20cm程度であるが、深さは検出面から15cmを測る比較的深いものである。南下した先がSD8と接するが、接続部分の幅が、40cmほど広がり、深さも30cmほど増すことから、SD8に合流していたことが分かる。律令期の土師器小片が出土したのみで時期決定の決め手に欠けるが、上述した形状からSD8へ流れ込んでいたものと考えられ、この時期とした。

(5) 墓

SX40 (写真図版11) 調査区南東部で検出した小規模な土坑である。直径60cm前後の楕円形を呈し、深さは検出面から40cmちかくを測る深いもので壁は垂直にちかい。土坑内西寄りの検出面ちかくで須恵器蓋が正立状態で検出され、蓋の付近では焼土の広がりも確認された。このことから、蓋に須恵器が用いられた木製容器が埋納され、木製容器のみが腐滅したものと推測した。しかし、断面観察を行ったが、容器の痕跡は検出できなかった。なお、焼土は1mmほどの厚さがあるのみで、土坑内には混入しておらず、土器片の出土もなかった。また、埋土には薄い白色粘土層が断片的に混入していたが、これの意味するところは不明である。

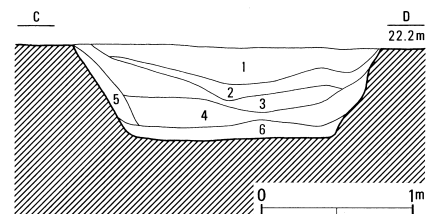
上述のように墓とする根拠は不十分であるが、一応ここで報告する。

2. 平安時代の遺構

掘立柱建物14棟、柱列1条、井戸2基等を検出した。掘立柱建物と井戸で構成される集落跡の様相を呈し、最も盛行する時期である。

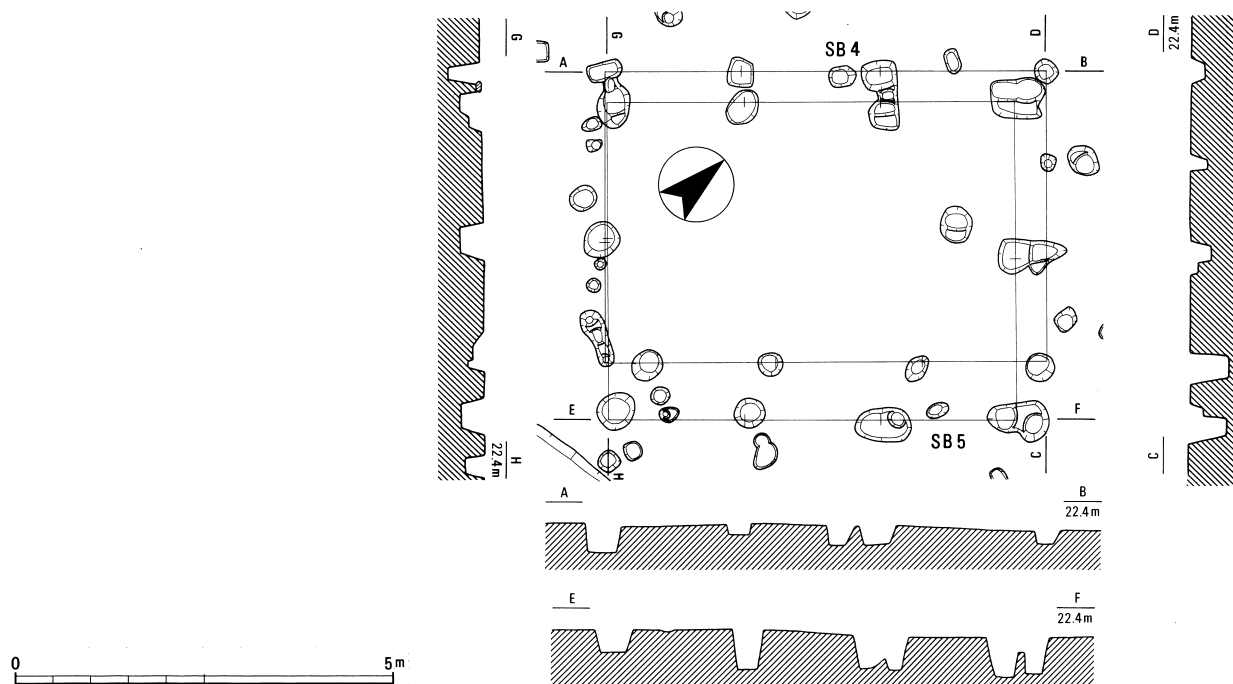
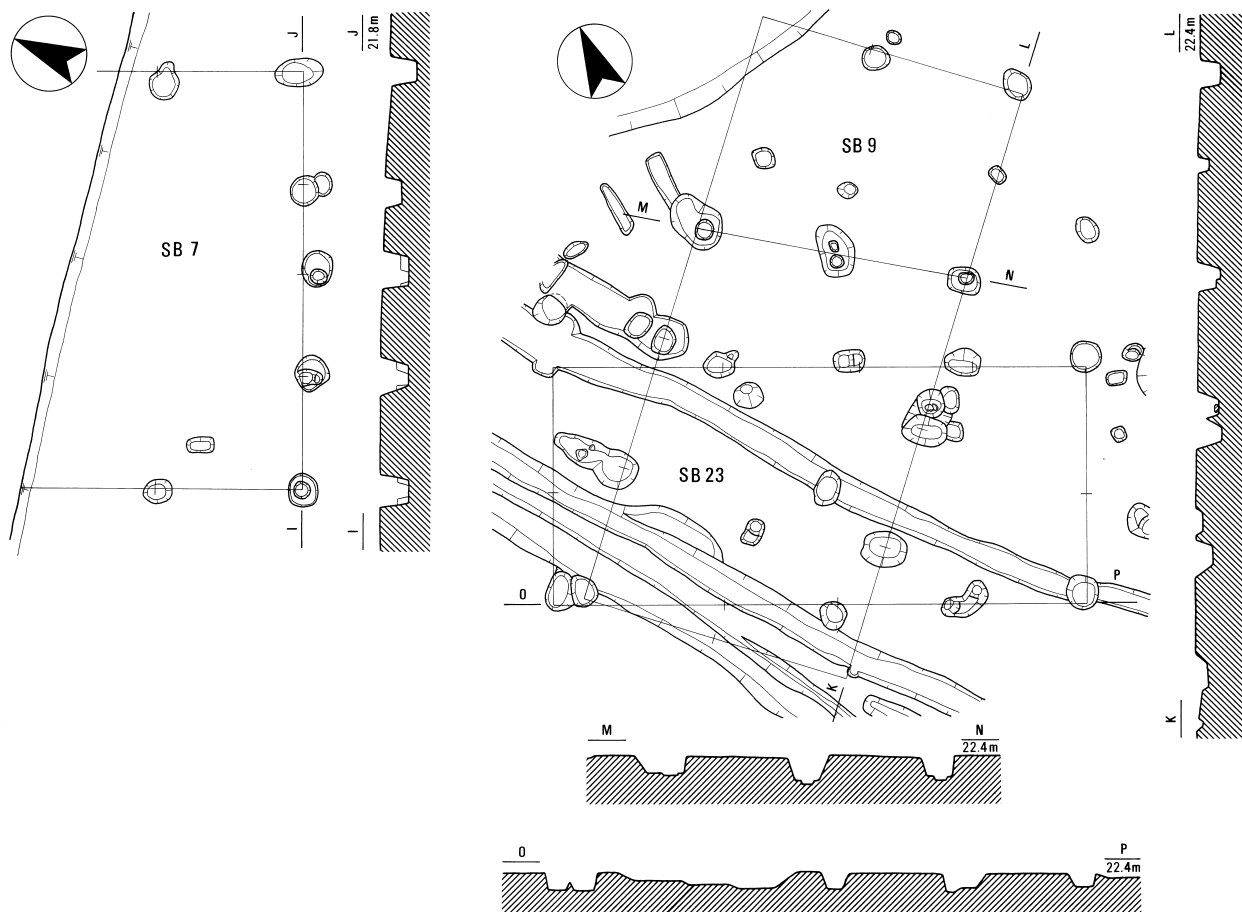
(1) 掘立柱建物

SB4 (第11図) 調査区北西部で検出した3間×2間の南北棟と考えられ、SB9、SB15と棟方向を揃える。同様な規模のSB5と重複し、建替えの関係にあるものと思われる、SB5に先行する建物である。桁行柱間は東西で異なり、掘形も一辺30cmの方形のものから円形、長方形、長円形と様々で統



1. 暗褐色粘質土
2. 暗褐色粘質土に黄色砂質土多く混入
3. 黒褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土に黄色砂質土混入
5. 黄灰色粘質土
6. 黒褐色粘質土

第10図 SD8断面土層図 (1:50)



第11図 SB 4・5・7・9・23実測図 (1:100)

一を欠く。北側梁行柱筋に直径20cmの小規模な柱穴があるが、この建物に属するものかどうかは不明である。掘形が他のものと比べ非常に小規模であるため、ここでは当建物とは無関係とした。

東側側柱筋の北端の柱穴から黒色土器の碗（180）が出土している。底部完存で、完形ではないものの他のものより残存度が極めて高く、故意に埋められた可能性もある。

S B 5（第11図） 調査区北西部で検出した3間×2間の南北棟と考えられ、S B 4を建替えたものと思われる。柱掘形は一辺40～50cmの方形または円形を呈するものが多く、不揃いではあるものの桁行柱間は1.8mの等間に整えられている。南西角の柱穴に沿う位置で小石を検出した。自然石を含まない土壌での検出のため何らかの意味を推測したいが、柱根に添えられていた可能性があるものの確証を欠く。

S B 7（第11図） 調査区北端で検出した。北端が調査区外のため全体の形態は不明であるが、4間×2間の東西棟と推測した。桁行の柱間は両端が1.5mであるが、他は不等間である。掘形は一辺40～50cmの方形または円形で、当遺跡では比較的大型のものである。柱筋から外れるものもあるが、直径20cmの柱痕跡を3基の柱穴から検出している。

律令期の土師器小片が出土したのみで、この時期とする根拠に乏しいが、奈良時代のものとは方向や形態が明らかに異なるため、一応、平安時代として扱う。

S B 9（第11図） 調査区西部で検出した3間×2間の掘立柱建物である。南北棟で、北側には庇が付くものと思われるが、他の遺構との重複等により検出できなかった柱穴も多く、不明確な部分も多い。

桁行柱間は不等間で、しかも東西で桁行長が異なり歪んだ平面形を呈するが、柱掘形は一辺40～50cmの方形または不整形を呈する。当遺跡としては大型のもので、直径20～25cmの柱の沈下痕跡を検出できたものもある。

柱掘形からは、奈良時代と考えられる土師器片も多数出土しているが、棟方向をS B 4・5、S B 15と揃えることから一連の遺構と考えた。

S B 10（第6図） 調査区中央部で検出した桁行3間×梁行2間の東西棟の掘立柱建物である。柱掘

形は形の乱れたものもあるが、直径40cm前後の円形または楕円形を呈する。深さは検出面から30cm程度を測るが、桁行の一部には10cm前後の浅いものもある。東側1間分には間仕切がある。

平安時代と思われる土師器小片が出土しており、近接するS B 12、S B 23と棟方向を揃えるため、この時期とした。

S B 11（第12図） 調査区中央部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は、一辺30～40cmの方形にちかい円形を呈し、柱間は桁行・梁行ともに不等間である。

S B 12とは棟方向を違えるものの同様な規模であり、建替えの関係にある可能性がある。南東角の柱穴が重複し、その切り合いからS B 12に先行するものと考えられるが、確証はない。

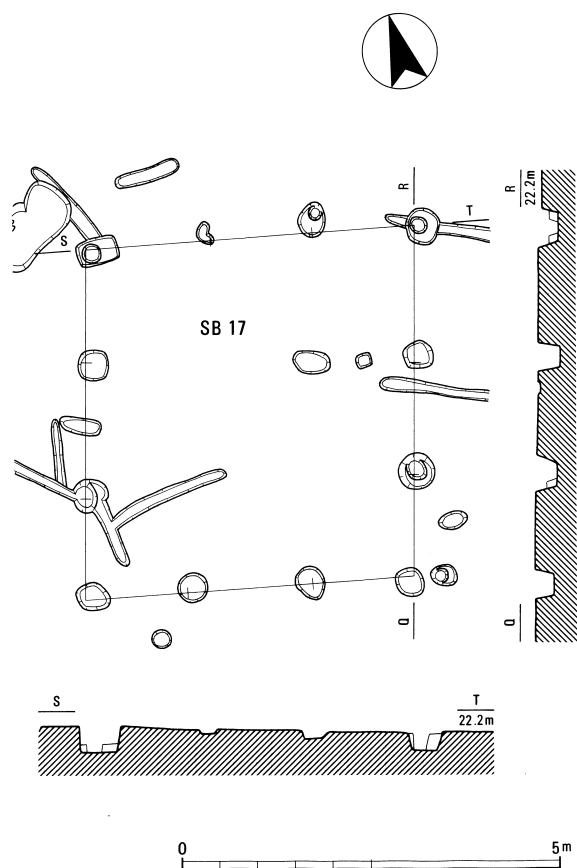
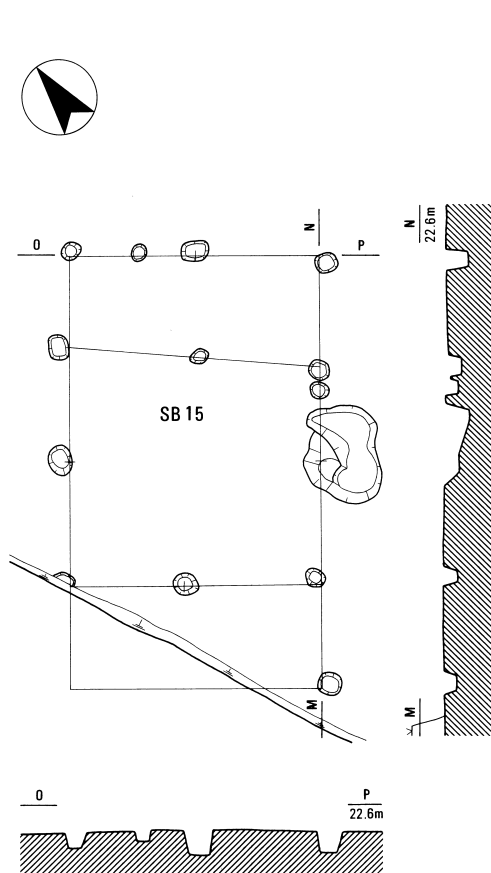
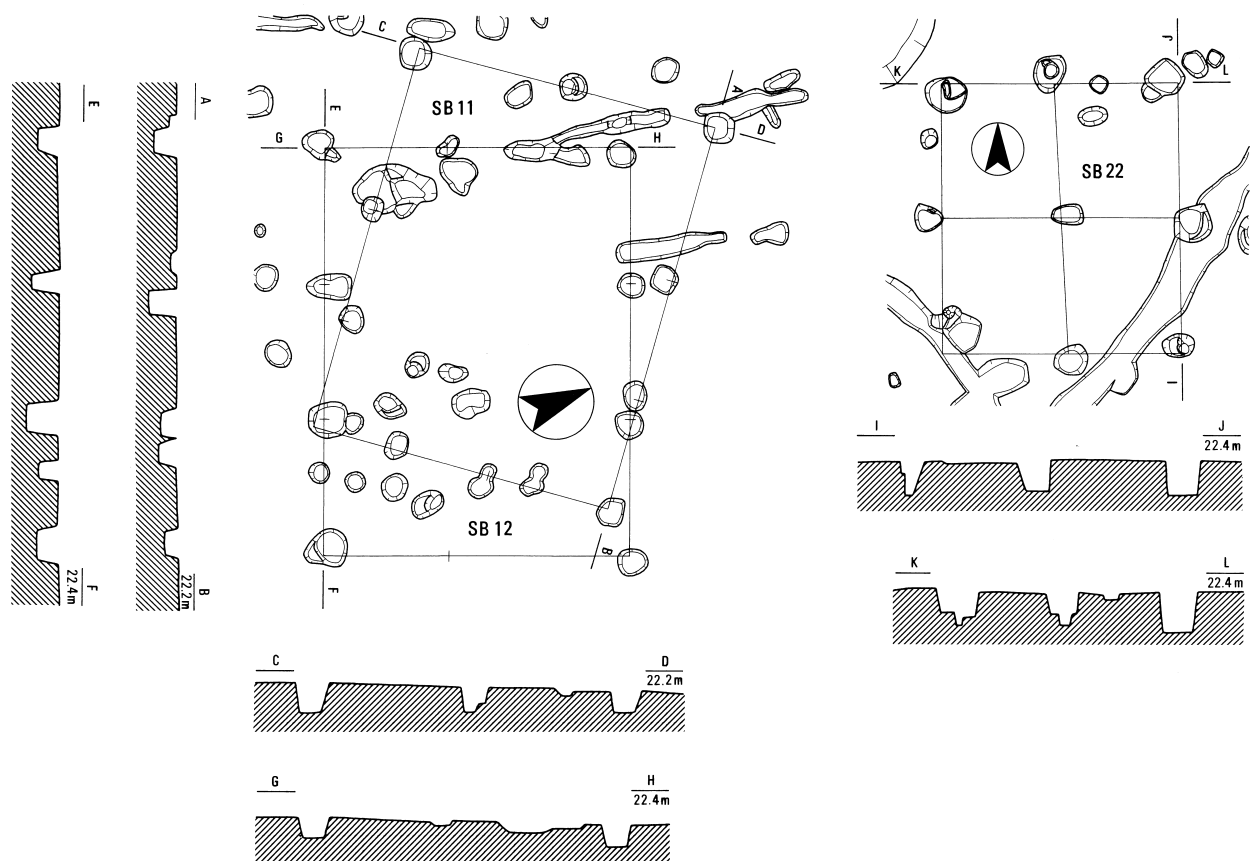
S B 12（第12図） 調査区中央部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は、一辺35～45cmの方形にちかい円形を呈し、桁行柱間は1.8mの等間である。梁行柱間は不等間であるが、東側の妻柱は検出できず、西側のものも小型の不整形なもので浅く、妻柱とするに疑問の残るものである。西側梁行の柱筋には他にも柱穴があり、3間とする可能性も考えられなくはなく、梁行についてはひとつの可能性を示すに止める。

前述したようにS B 11とは建替えの関係にあるものと推測され、S B 11を若干規模を大きくして建替えられたものと推測する。平安時代の土師器片や黒色土器片が出土しており、近接するS B 10、S B 23と棟方向を揃える。

S B 13（第9図） 調査区西部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は、直径30～40cmの円形または不整形円形を呈する小型のものであるが、検出面から60cm以上掘り込まれている。ただし、北側桁行に極端に浅く小型のものがあり、柱穴とするに疑問も残す。柱間は桁行・梁行とも不等間で桁行長が南北で異なる歪んだ形態である。

平安時代末期に降る土師器皿（189・190）が出土しているが、やや離れるもののS B 12と棟方向を揃える。

S B 15（第12図） 調査区南西部で検出した。調査区外へ続く可能性もあるが、4間×2間の南北棟



第12図 SB11・12・15・17・22実測図 (1 : 100)

とした。柱掘形は、直径30cm前後の円形または方形を呈する不揃いなもので、柱間も不等間である。北側と南側の1間分に間仕切が認められる。しかし、南側の束柱掘形は側柱掘形と同様な規模であり、また、南東角の柱が柱筋からやや外れるため、これを別建物の柱穴とすれば、3間×2間の南北棟とする見方もできる。いずれにしても当遺跡のものとしては小型の部類であり、雑舎的な建物であったものと推測する。

S B 4・5、S B 9と棟方向を揃えており、S B 9東側桁行の延長上にS B 15の妻柱が位置する。このため、出土遺物は皆無であるが、この時期とした。

S B 17 (第12図) 調査区南部で検出した3間×3間の掘立柱建物である。棟方向は不明であるが一応、東西棟としておく。柱掘形は、一辺40cm前後の方形または円形を呈するが、長方形のものや不整円形のものもあり不揃いである。柱間も桁行・梁行ともに不等間で歪んだ平面形を呈する。したがって、建物とするに疑問とする選択肢もあるが、遺構密度の薄い地点で柱列状に検出できたものであり、掘立柱建物として相違ないものと考えている。柱痕跡を検出できたものもあり、直径20cm程度の柱であったようである。

律令期の土師器小片が出土しているものの時期決定の根拠に乏しい。やや離れるもののS B 12と棟方向が概ね直交するため、この時期とした。

S B 22 (第12図) 調査区北西端で検出した2間×2間の総柱の南北棟と考えられる。柱掘形は、一辺45cm前後の方形または不整円形を呈する不揃いなものである。柱掘形の底部が部分的に沈下しているものがあり、柱の重圧による沈下と推測される。このことにより、柱の直径は20cm程度のものであったことが分かる。梁行の柱間は北側と南側で異なり、南西角の柱穴は検出されていない。S D 28により欠損したものと考えるが、S D 28は20cm程度の深さしかなく、溝底に痕跡が求められてもよいものと思われる。近隣に同様な規模の柱穴状遺構があるが、これを柱穴とすると柱通りが悪く、相当歪んだ建物とせざるを得ない。現状においても柱通りが悪い状態ではあるものの、南西角の柱穴はS D 28により消滅したものとしておきたい。

出土遺物が皆無で、他に類似する棟方向をもつ建物もなく、時期決定の根拠を持たない。しかし、柱掘形の埋土の状態から中世以降に降ることはないと考えられる。奈良時代とする可能性も残るが、柱掘形の規模に対する柱間が狭い当遺跡の奈良時代の建物の特徴に合致しないため、平安時代のものとして扱う。

S B 23 (第11図) 調査区西部で検出した桁行4間の東西棟である。妻柱は検出できず、梁行の柱間は不明であるが、一応2間としておく。桁行柱間は不等間で、柱掘形は、直径40cm前後の円形または不整楕円形を呈する不揃いなものである。柱穴も他のものより比較的浅く、建物として疑問も多い。しかし、S B 10、S B 12、S B 13と棟方向を揃えており、一応、可能性として建物としておく。

S B 24 (第6図) 調査区中央部で検出した桁行3間×梁行2間の東西棟である。柱掘形は直径35cm程度の円形を呈する小型のもので、深さも検出面から20cm程度の浅いものである。柱通りも悪く、建物とするに疑問も残るものである。

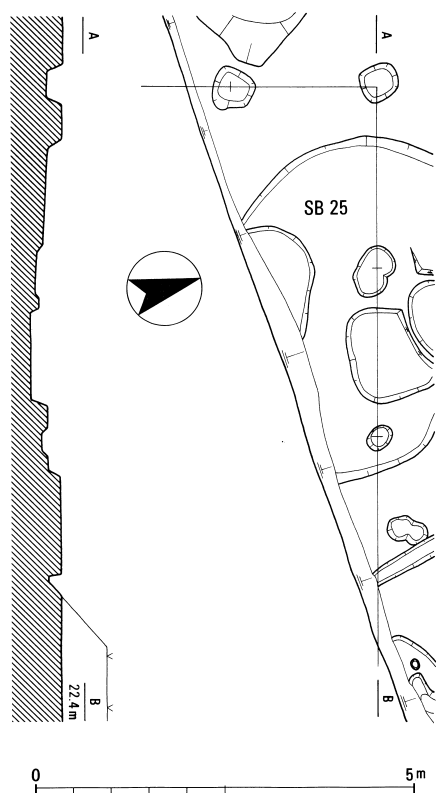
律令期の土師器片が出土するものの時期決定の根拠が乏しい。棟方向はやや異なるもののS B 10、S B 12、S B 23等と建物の形状や大まかな棟方向が揃うため、この時期とした。

S B 25 (第13図) 調査区南端で検出した。調査区端での検出のため、全体の形態は不明であるが、桁行3間以上×梁行2間以上の東西棟と推測する。S K 21との重複のため不明確な部分もあるが、一辺50cm前後の方形を呈する柱掘形をもち、柱間も長く、今回検出した掘立柱建物のなかで最も大規模なものである。

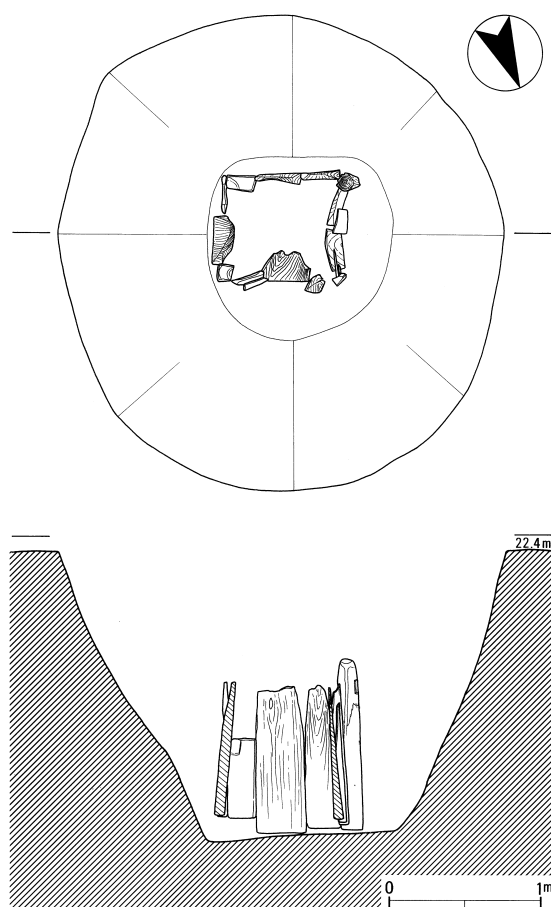
出土遺物が皆無であるが、S B 12、S B 23等と概ね棟方向を揃えるため、一応、この時期とする。

(2) 柱列

S A 41 調査区南東端で直径20~30cmの小型の柱穴状遺構が南北方向に帯状に群集する。この方向は、平安時代の建物群の方向と大きく矛盾するものではなく、集落の境を限る柵列のようなものを可能性として想定した。柱穴の分布状況から柵列は整然としたものではなく簡易なもので、何度も建替えや部分改修が行われた結果と推測する。奈良時代の遺物が出土するものも多いが、前述した状況や、平安時代



第13図 SB25実測図（1：100）



第14図 SE1実測図（1：50）

に降る遺物が出土したものもあることから、この時期とした。特に、ほぼ完形の土師器杯（186）が出土したものもある。

（3）井戸

SE1（第14図） 調査区北西端で検出した。掘形は直径3mの円形を呈する。埋土は黒褐色の有機質土、検出面から45cmで湧水点に達する。検出面から1.7mほどで直径20cm程度の小石の混入が多くなり、検出面から1.8mで小石と砂質土の混在する良く締まった土層に達し、ここを底と判断した。掘形の壁面は、比較的緩やかな傾斜をもち、底部では一辺1mの不整形の平面形を呈することになる。この上面に木製の井戸枠が残存していた。枠板は、縦方向に直接底に差し込まれ、一辺80cmの方形を形成している。幅30cm程度の板を一辺に2枚配置するが、一枚の幅は不統一である。四隅には角材を配置するが、西隅は丸太、南隅は幅20cm、厚さ10cmの長方形の材で、これも不統一である。丸太にはホゾ穴状の窪みもあり、有り合わせの材で組上げた様子うかがえる。これら四隅の材は立板の固定に機能していたものと推測されるが、横棧の存在を示すものは検出できなかった。また、底部が礫層のためか、井戸底に石敷等を施した様子も認められなかった。

SE20 調査区南端で検出した直径1.8mの円形を呈する。埋土は黒褐色土で分層は不可能であった。礫を含まない埋土であるが、長径30cmの石が数個、混入していた。しかし、遺構との関係は認められない。検出面から1.5mほど掘り下げたが、湧水が激しく崩落の危険があるため完掘を断念した。SE1の深さとの比較により、底近くまで掘削できたものと考えているが、井戸枠等の施設は検出できなかった。SE1と比較すると掘形が一回り小さく、壁も垂直にちかいため、元来、井戸枠等の施設は無く素掘りの井戸であったようである。土師器や黒色土器等が出土したが、いずれも小片で、埋納されたものは検出できなかった。

（4）土坑

SK42 調査区北端で検出した長径80cm、短径40cmの不整形な小型の土坑であるが、検出面からの深さは40cmを測る深いものである。1/2残存の土師器皿（175）が出土しているが、埋納されたものと

は思えない。

（５）溝

S D 36 調査区南部で検出した。幅20cmであるが検出面からの深さは15～20cmを測る深いものである。調査区外から蛇行して北上し、S B 24等の建物群へ向かう様子を示しながら途絶える。したがって、これらの建物群の排水に関係する溝かもしれない。

奈良時代の遺物を多く含むが、重複するS K 19等からの混入と考えられる。

3. 中世の遺構

検出したものは全て溝である。下記に示すものの他に東西、南北に延びる小溝が並列し、耕作に伴うものと推測される。また、出土遺物が少なく、詳細な時期決定が困難なものが多い。

S D 26 調査区北西端で検出した幅20cm、検出面からの深さ5cm程度の浅い溝である。調査区外から南下しS E 1の掘形を巻き込むように進み途絶える。埋土も黒色土で奈良～平安時代のもものと相違なく、当初はS E 1との関連を想定した。しかし、中世の土師器鍋・皿片が出土していることから、これと無関係と判断した。むしろ、これと直交するかのごとく延びるS D 27とは規模や埋土も類似するため、これと同時期の室町時代とした。

S D 27 調査区北西端で検出した幅20cm、検出面からの深さ5cm程度の浅い溝である。調査区外から西進しS D 26を意識するかのように40cmほど手前で突然止まり、これと何らかの関連が推測される。埋土は黒色土で奈良～平安時代のもものと相違ないが、施釉陶器小片が出土しているため、室町時代に属するものと考えられる。

S D 29 調査区中央部で概ね直角に向きを変える溝である。南北両端ともに徐々に深さを減じ、消滅しているが、本来は調査区外へ続いていくものと推測される。幅40cm、検出面からの深さ10～30cmで、屈曲部分が最も深くなっている。少なくとも4条の溝が重複しており、同じ箇所でも何回か掘りなおされているようである。屈曲する状況から何かを区画していた可能性もあるが、他に関連する遺構はなく、既述した性格をもつとしても耕作に関連する区画を表しているものと思われる。

中世の遺物としては山茶碗小片が出土しており、鎌倉時代に属するものとしておく。

S D 30 S D 29の東側におよそ1.4mの間隔を空けて併走する溝である。規模も類似しており、S D 29と同じ性格のものと考えられる。

S D 33 調査区東部で検出した幅20cm、検出面からの深さ10cm程度の小規模な溝である。2本の溝が重複した状態でU字状に延びる。中世を示す遺物は出土していないが、埋土が暗褐色土であるためこの時期と思われる。伊賀市の「羽根中島遺跡」でもU字状に延びる耕作痕が検出されており、S D 33もこれと同様に耕作に伴うものと考えられる。

S D 34 調査区東部で南北に16mほど延びる溝である。幅20cm、検出面からの深さ10cm程度を測る。耕作溝群とは方向を違い、規模もやや大きいことから耕作溝と断定できない。出土遺物はないが、埋土の状況から中世に属するものと考えられる。

S D 35 調査区東部を南北に延びる溝である。調査区外から17mほど北上し、S D 33と重複して止まる。埋土の観察からS D 33に先行するものであることが分かる。規模・特徴はS D 34に類似し、同様にその性格は不明である。律令期の土師器小片が出土しているが、埋土の状況から中世に属するものと考えられる。

〔註〕

- ① 三重県埋蔵文化財センター『羽根中島遺跡発掘調査報告』2001.3

V. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代・古墳時代～室町時代のものがあるが、奈良時代と平安時代前半の土師器杯・皿類が多くを占める。中でも奈良時代のものが中心で、その大半がS K 21及びその付近の包含層から出土している。さらに、これらには記号を付けるものが多く確認できる。

1. 奈良時代の遺物

今回の調査で出土した遺物の中心はこの時期のものである。竪穴住居、土坑からまとまって出土している。

(1) S H 3 出土遺物 (第15図)

竪穴住居と推測する土坑埋土からの出土である。埋土上端を焼土層が覆っており、一括性は比較的高いものと考えられる。

1～5は土師器の杯、6は皿、7は碗、9は高杯、10～15は甕である。杯には深いもの(1・2)と浅いもの(3・4)があるが、全て底部外面をヘラケズリで調整する。1は内面に放射及びラセン暗文、外面を工具ナデとするが、一部ハケメ状を呈している。外面全面をヘラケズリで調整する意向であったものと思われる。5は高台の付くものである。摩滅が激しく調整等が不明瞭で、須恵器の酸化焼成の可能性も残る。6は小片のため、口径を16cmと仮定し図化した。底部外面は未調整であり口縁部も外傾し、新相を示す。9の外面のヘラケズリは意識としてはヘラミガキだが、ヘラの当たりが強く、結果的にヘラケズリとなっている。11の外面はナデとしたが、ハケメをナデ消している。

8は製塩土器、16～20は須恵器である。須恵器には、蓋(16・17)、杯(18)、壺(19)、鉢(20)がある。18の底部外面はロクロケズリで調整され、16と対になる可能性がある。

(2) S K 18 出土遺物 (第15図)

図示できたものは土師器の杯(21～24)、皿(25・26)、甕(27)である。杯は口径に対して器高が高いものが多いが、22は小片のため口径を18cmに仮定して図化を行った。21の内面調整はヘラミガキとし

たが、放射暗文施文時のヘラの速度が非常に遅いため、放射暗文とするには勢いのないものになっている。22の内面にも暗文があるようだが、摩滅により不明確である。

25は小片のため口径を20cmに仮定して図化を行った。26の口縁端部外面には沈線が施されるが、極めて浅いものである。また、内面には焼成後、鋭利な工具により不定方向に沈線が刻まれるが、その意味するところは不明である。

(3) S X 40 出土遺物 (第15図)

埋納遺物の須恵器蓋(28)である。口縁端部の屈曲部外面を板状工具により強く面取り状にヨコナデする。

(4) S K 32 出土遺物 (第15図)

土師器の皿(29)、甕(30・31)、須恵器の杯(32)を図示し、他に製塩土器の小片が出土している。

29の底部外面はヘラケズリ、31の内面はナデで調整される。32は受部をもつ杯で、前代の混入と考えられる。一見、底部外面を一周ロクロケズリを施すように見えるが、ヘラ切りの際の最初の当たりがロクロケズリ状になったものと考えられ、改めての調整とは考えられない。

(5) S K 2 出土遺物 (第16図)

土師器の杯(33)、皿(34)、高杯(35)を図示したが、いずれも残存度の低いものである。34・35は摩滅が激しく、調整が不明確である。

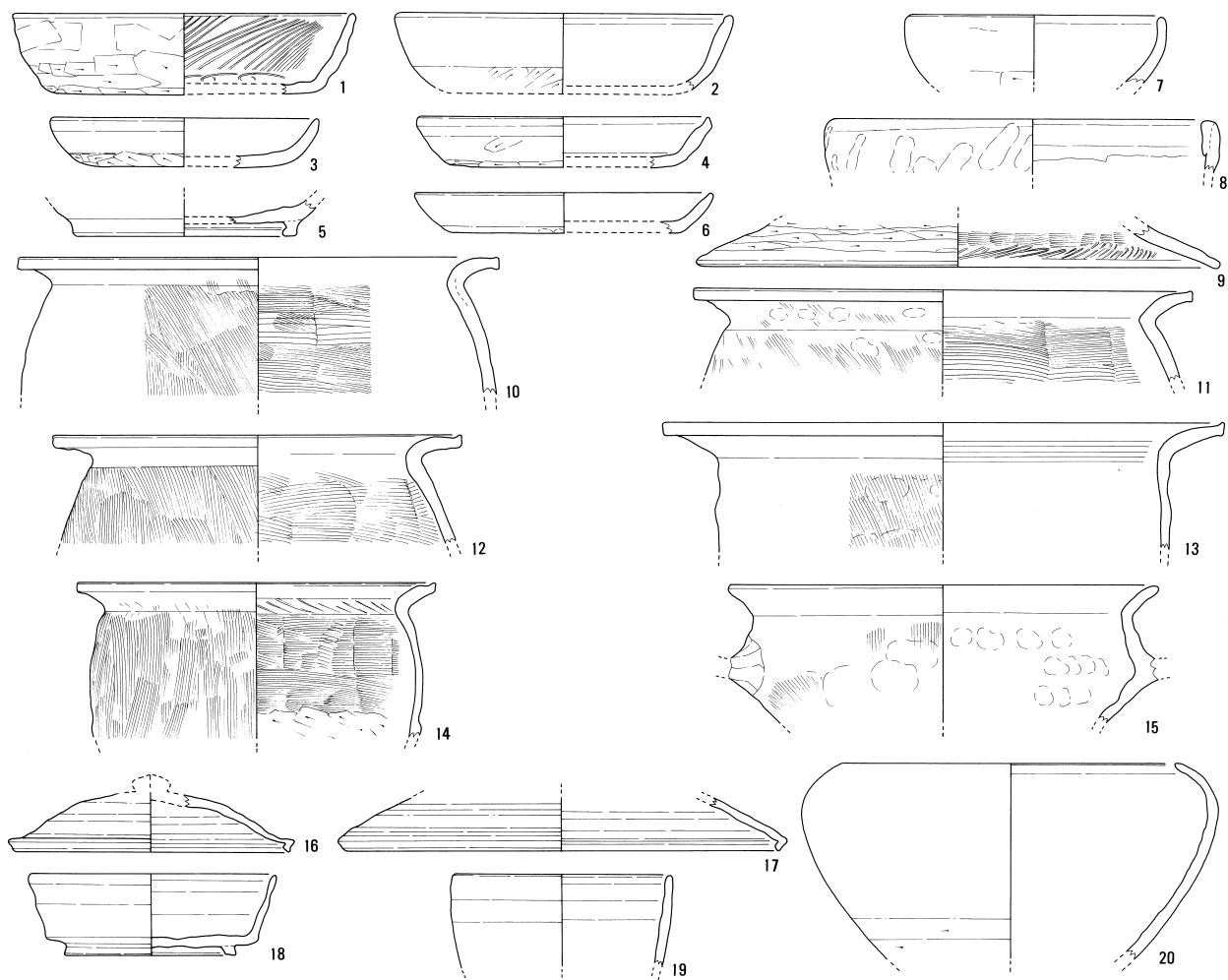
(6) S K 19 出土遺物 (第16図)

土師器杯、皿、碗、甕、製塩土器が出土したが、土師器杯・皿類は他の遺構に比べ非常に少ない。しかも、残存度の低いものであり、図化できたものは土師器の杯(36)、皿(37・38)である。36の口縁部ヨコナデは、下段が非常に弱く、指頭圧痕が残る。37の底部外面はヘラケズリで調整されるのに対し、38は未調整である。

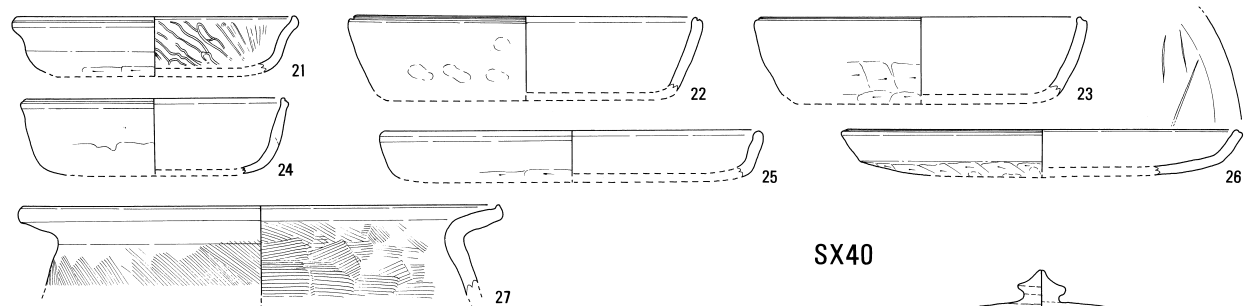
(7) S K 38 出土遺物 (第16図)

土師器甕(39)と須恵器蓋(40)を図示した。39は小型の甕であるが、他に長胴甕片も出土している。40は還元がやや不十分である。

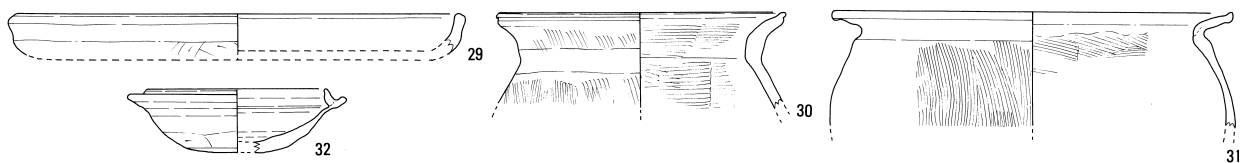
SH 3



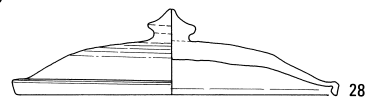
SK 18



SK 32



SX40



0 20cm

第15図 SH 3、SK18・32、SX40出土遺物実測図（1：4）

(8) S H16出土遺物 (第16図)

出土遺物のほとんどが土師器であり、カマド近辺から残存度の良好なものが出土している。41は土師器の杯、42～47は土師器の甕、48は土師器の羽釜、49は須恵器の壺である。

41は、カマド内出土で、底部外面のヘラケズリと口縁部外面のヨコナデを同一工具により同一工程で行っている。ヘラケズリがヨコナデに先行する箇所もあれば、その逆もある。

42は小型の甕であるが、肩の張る体部形を呈し、後代に通じる特徴が現れている。43～47は長胴甕と思われ、47は今回の調査で全体の形態が分かる唯一のものである。粘土紐の接合痕やハケメの変換点から体部を3段階に分けて作成したことが分かる。43の体部外面はハケメをナデにより消している。

48は一応、土師器の羽釜としたが、疑問も多いものである。一見、やや胎土が粗いものの中世の羽釜として差し支えない。しかしカマド内からの出土で、混入が想定し難い出土状況である。この時期のものとしては、斎宮跡 S K 5200から鐳付の筒状土師器が出土し、津市の六大 A 遺跡からも類似品が出土している^①。しかし両者の鐳径は20cm程度であるが、当遺跡のものは40cm以上を測り、中世後期の羽釜のそれにちかい。畿内地方では長胴甕に鐳を付けた形状の羽釜が報告されている^②。それらの多くは鐳径が20cm程度のものであるが、大阪府柏原市の高井田遺跡井戸2からは飛鳥時代の鐳径が40cm以上を測るものが出土している^③。48がこの形式の羽釜である可能性もあるが、いずれとも断定し難い。48が鐳部分の小片であることもあり、結論は保留しておく。

(9) S K 21出土遺物 (第17・18図)

多量の遺物が出土したが、多数の土坑が重複した遺構であり、その一括性は乏しいとせざるを得ない。大半が土師器の杯・皿類で、須恵器の出土は極めて少なく、杯皿類の多くに「#」または格子状の記号が付けられている。

土師器 50～82は杯である。口径19cm前後の大型のものと口径15cm以下の比較的小型のものに分かれるが、明確な法量分化を示していない。50・51は口径に対し器高が高く古相を示すものである。両者とも内面をヘラミガキするが、51は放射暗文風を呈し

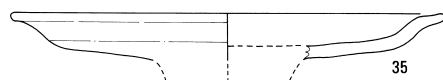
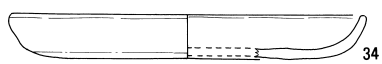
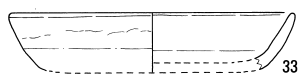
ている。対して69・70・82等は外傾が大きい口縁部で器壁も薄く、これらの中では新相を示すものである。73の口縁端部外面には沈線が巡るが、浅いために途中で切れている。74も同様に沈線状のものがあるが、摩滅のため不明確である。64の口縁端部は、成形が一旦完了した後、5mmほど継ぎ足されて形成されており、接合部分が沈線状に残っている。

底部外面の調整は、一部摩滅のため不明瞭なものもあるが、73・74・80・82がナデの他は全てヘラケズリである。ただし、ケズリの範囲は多様であり、50・78が口縁端部まで外面全体にヘラケズリを施すのに対し、55・56は口縁部から底部への屈曲部付近の円周状の範囲のみをヘラケズリしている。77はヘラケズリの範囲が狭いため、指頭圧痕が残る範囲が口縁部下端に見える。76が非常に丁寧にヘラケズリするのに対し、65・66のヘラケズリは浅く弱いものである。特に66は、摩滅が激しく不明確であるが、むしろナデとしたほうが良いかもしれない。63も一応ヘラケズリとしたが、摩滅が激しく不明確である。板上で作成した際の圧痕の可能性もあり(写真図版14)、そうであれば末調整とすべきだが、器形も古相を示すため、ここではヘラケズリとしておく。

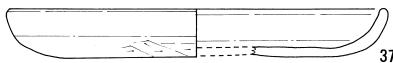
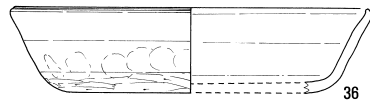
内面の調整は、記述したように50・51がヘラミガキ、他はナデであるが、53・65・67・68・81にはラセン暗文が認められる。ナデを工具により行った痕跡を示すものもあり、62の工具幅は8mmである。58の内面は工具により丁寧に仕上げられ、52の口縁部外面は工具により2段にヨコナデしている。特に上段のナデは非常に強い。82の口縁端部内面は棒状工具による強いナデのため沈線状になっている。

焼成後、鋭利な工具により線刻を施すものが多い。56・66・68は「#」を底部内面に施している。他にも55・67・76・81の底部内面にも同様な線刻があり、破損のため全体の形態は不明であるが、おそらく「#」を表すものと推測される。61・75の内面、69の底部外面にも直線状の線刻を確認できるが、「#」の一部かどうか不明である。81は内面に加えて外面にも線刻がある。しかし、外面のものは他のものと異なり、「#」にはなり得ず、不定形なものである。54の内面にも不規則な直線状の細い線刻が多数重なるが、記号とは思えない。63は摩滅により

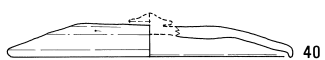
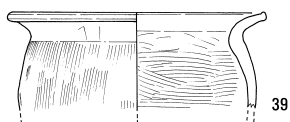
SK 2



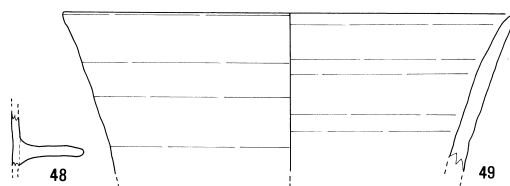
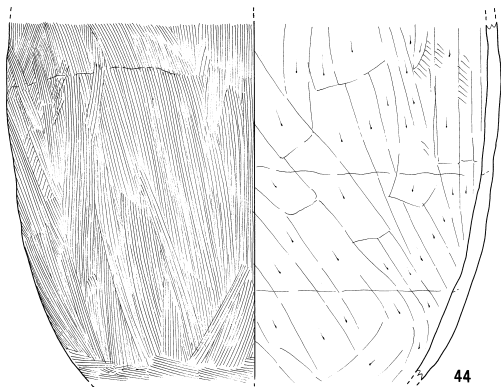
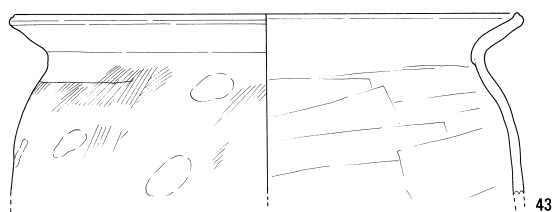
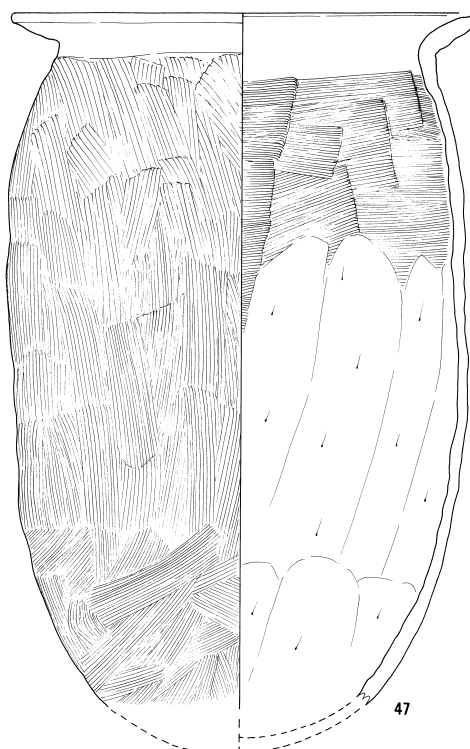
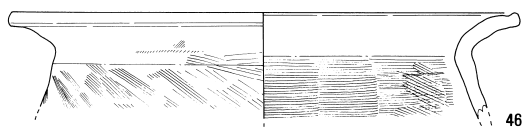
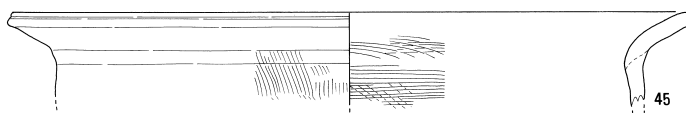
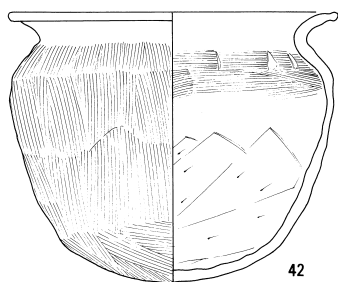
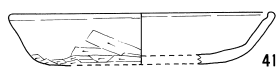
SK 19



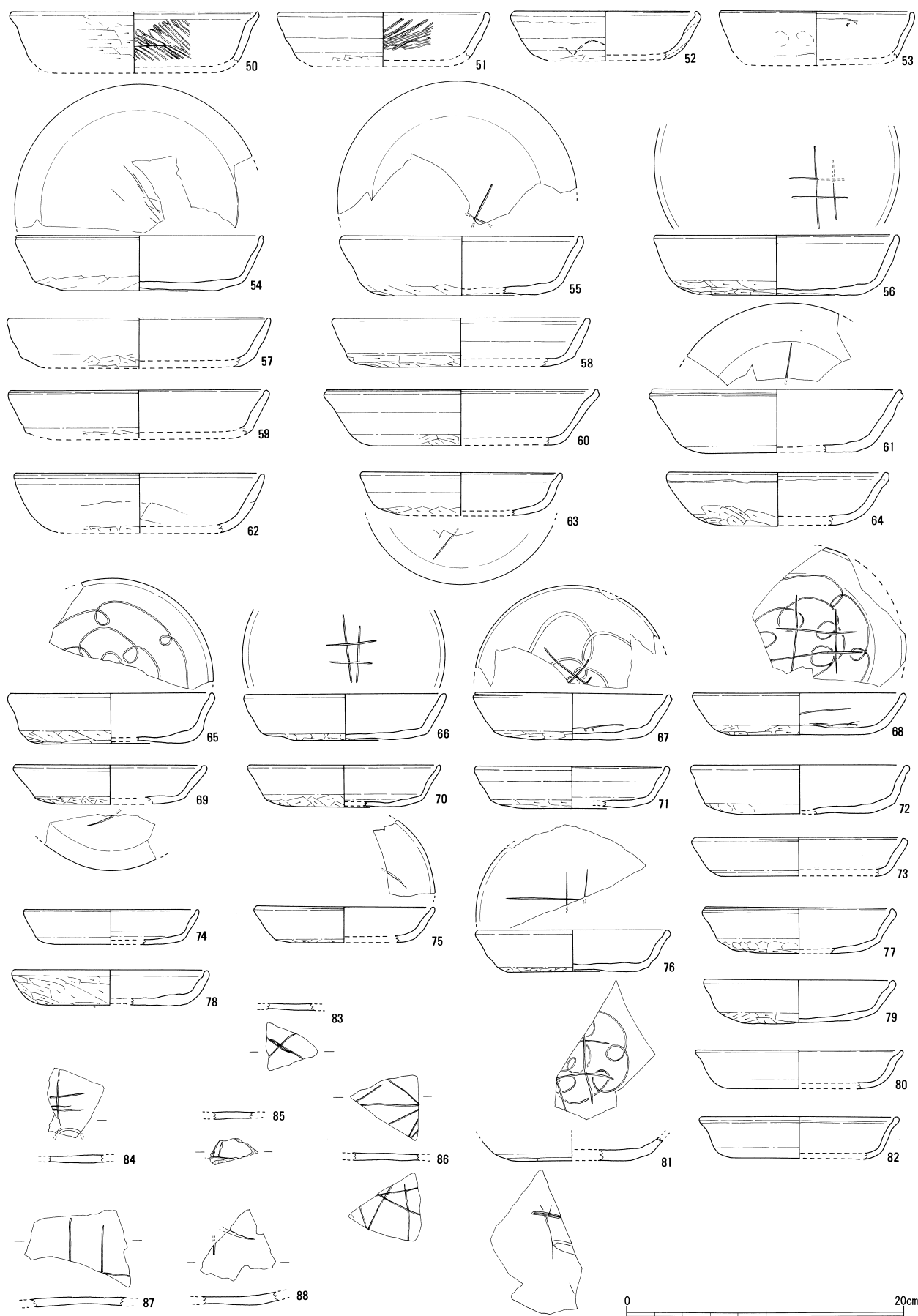
SK 38



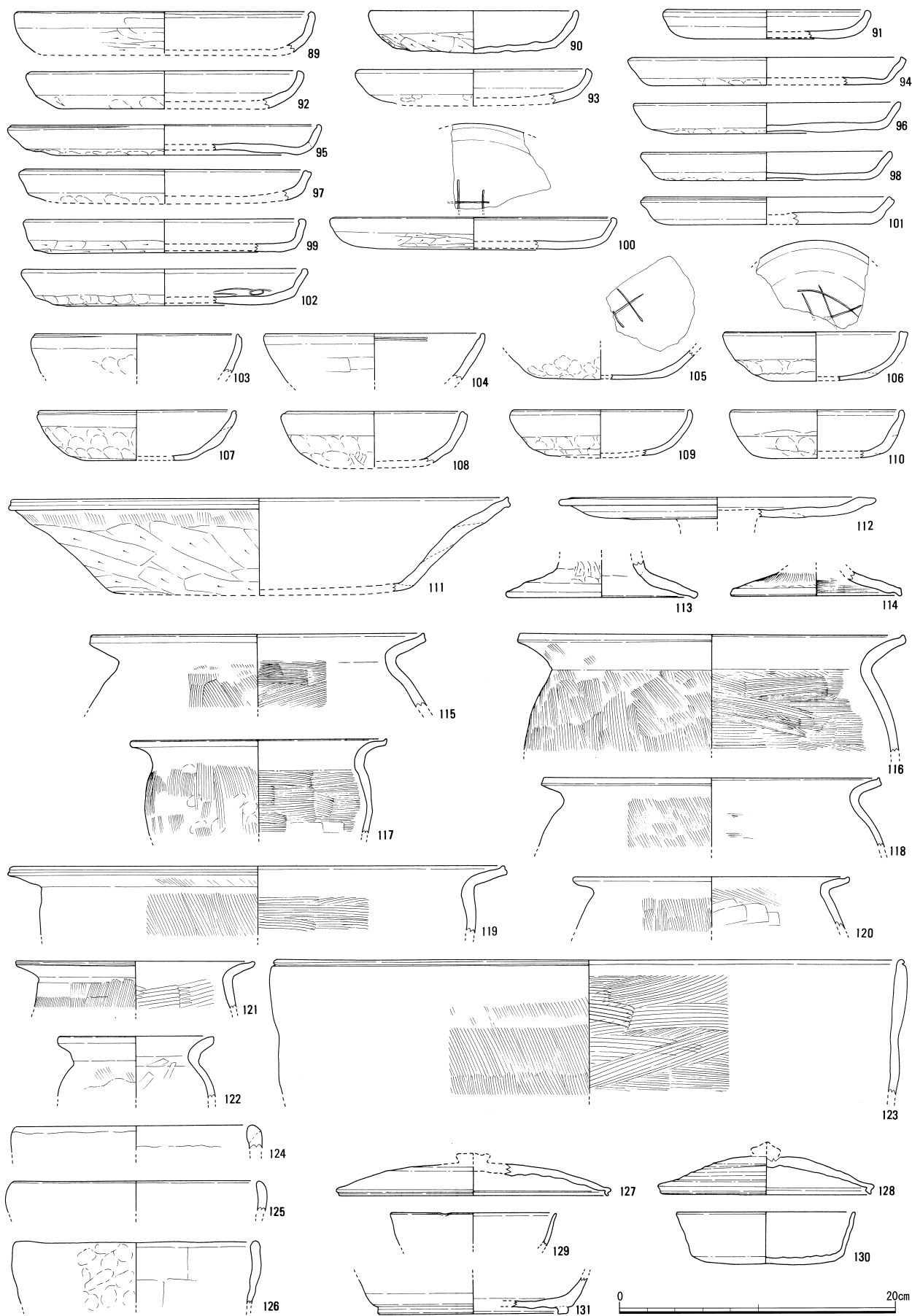
SH 16



第16図 SK 2・19・38、SH16出土遺物実測図（1：4）



第17図 SK21出土遺物実測図（1：4）



第18図 SK21出土遺物実測図 (1 : 4)

不明確であるが、焼成前に施された直線状の浅い沈線がある。一応図示したが、記号というよりは植物圧痕の可能性も高いものである。

83～88は記号が付けられた小片である。器種を確定することができないが、一応、杯として扱う。記号は、「#」と推測できるものが多いが、86は内外面に複雑に交差する線刻を施す。85は小片のため調整が不明確である。内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリとして、外面に線刻されるものとしたが、内外面ともナデ調整の可能性もあり、線刻が内面とする可能性も若干残る。焼成後に鋭利な工具により線刻されるものが多いが、84は焼成前に施されている。

89～102は皿である。底部から内弯して立ち上がる口縁部をもつもの（89～93）と屈曲して立ち上がるもの（94～102）がある。前者には口径15cm～17cm程度の小型のものがある。95の口縁端部外面には浅い沈線があるが、一周しない。89の口縁端部外面では指による強いヨコナデのため凹線状となるが、これも一周することはない。底部外面は未調整のものが多いが、89・90・99・100・102はヘラケズリで調整する。102のヨコナデはヘラケズリ範囲まで及んでおらず、両者の間には指頭圧痕が残る。96の底部内外面のナデは工具によるものであることが分かる。100の底部内面には焼成後、鋭利な工具により記号が施されている。おそらく「#」を表すものであろう。

103～110は粗製の碗である。104の口縁端部内面には二又状工具による沈線が施されるが、一周していない。外面は工具によるナデとしたが、浅いヘラケズリとすることも可能である。108の口縁端部外面にも浅い沈線があるが、やはり一周しない。また、底部外面の一部にヘラミガキが観察される。106の口縁上端は浅い凹線状となるが不明瞭である。109の外面の指押さえは、器壁が薄いために内面に影響し、器形が歪なものとなっている。粗製碗にも底部内面に記号を施したものがある。記号の全体形は不明であるが、105は「#」、106は「#」に○を重ねたものと推測される。

111は盤、112～114は高杯である。114は全体をナデで調整するが、ハケメが多く残る。

115～122は甕、123は甗である。いずれも口縁部付近の破片であるため、全体の形態は不明であるが、

116・119は長胴甕の可能性が高いものと思われる。いずれもハケメにより調整されるが、122のみ未調整やナデで、ハケメは施されない。121の頸部屈曲部は特に強いヨコナデが施され、凹線状となっているが、ハケメとの前後関係から成形時のものと考えられる。

製塩土器 124～126を図化したが、124・125は小片のため口径を推測できず、18cmと仮定しておく。いずれも内面のみをナデで調整するが、126は工具によるものであることが分かる。

須恵器 須恵器で図化できたものは5点のみである。127・128は蓋で、両者ともつまみを欠損している。128の天井部外面のロクロケズリは弱く、板ナデ状である。

129～131は杯である。130は高台をもたず、131には付けられる。底部外面の調整は、前者がロクロケズリであるのに対し、後者は未調整である。129の口縁部には棒状の圧痕がある。製作過程の乾燥時に他の個体との接着防止工具の圧痕と推測される。

(10) S D 8 出土遺物（第19図）

出土の中心は土師器で、墨書土器や墨痕のあるものがある。

132～136は土師器の杯であるが、135は小片のため器種を確定できない。口径は15cm～18cmまで多様であるが、136を除き、底部外面をヘラケズリで調整する。しかし、その範囲は底部から口縁部への屈曲部付近に限定したものである。132と135には内面にラセン暗文が認められ、135は内面に線刻、外面に墨書が認められる。小片のため線刻の表すものは不明であるが、墨書は「世」と読める。線刻は136の内面にも焼成後に刻まれ、「#」を表す。134の外面には焼成前に刻まれた直線状の記号がある。133の底部外面にも墨痕が微かに認められるが、判読できない。

137～139は土師器の皿である。137・139の口縁部のヨコナデは板状工具により行われている。139の底部外面には墨書があり、「世」と読めなくもないが、他にも墨痕が認められるので、傍の一部か2文字以上の可能性がある。

140は土師器の粗製碗である。口縁部下端に1条の沈線がみえるが、板状工具でヨコナデを施した際に

工具端の当たりが沈線状になったものと考えられる。

141～143は土師器の高杯である。141は杯部内面にラセン暗文を施し、外面のヘラケズリは工具ナデ風の浅いものである。143の外面には、焼成前に二又状工具による浅い2条の蛇行する沈線を施し、焼成後に鋭利な工具による非常に細い線刻を不定形に多数施しているが、その意図するところは不明である。

144・145は土師器の甕、146・147は土師器の鉢である。144の頸部屈曲部は非常に強くヨコナデされる。146の体部内面上半は板状工具によるナデであるが、下端は同様な工具によるヘラケズリである。147の調整は内外面ともにナデとしたが、摩滅が激しく不明確である。

148～150は須恵器で、148は蓋、149は長頸壺、150は甕である。149には櫛による刺突文と沈線が施されるが、頸部下端の沈線は二又状工具による浅いものである。150は前代からの混入と考えられる。体部の沈線は鋭さに欠ける。

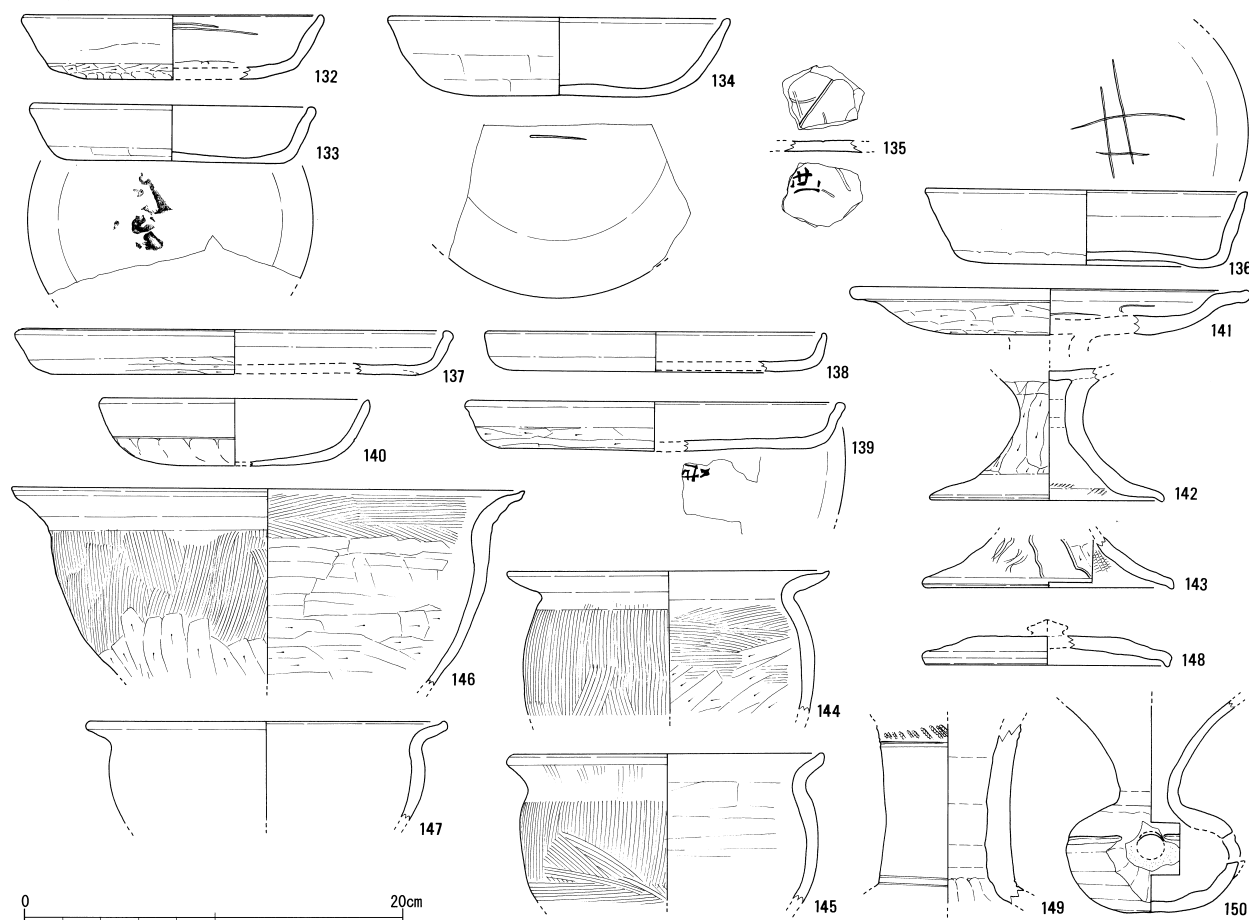
2. 平安時代の遺物

(1) S E 1 出土遺物 (第20図)

土師器の杯・碗・高杯・甕、製塩土器、須恵器、灰釉陶器が出土しているが、完形またはそれにちかいいものはない。出土遺物の大半が土師器の杯や甕である。

151～157は土師器の杯、158は土師器の粗製碗である。杯は口径14cm前後のものであるが、156は大型である。底部外面が未調整のものが多いが、151はヘラケズリを施し、口縁部も内弯気味であることから、前代からの混入と考えられる。153の口縁部は底部から屈曲気味となるほど強くヨコナデされており、152とともにやや古相を示す。

159～162は土師器の甕、163は土師器の高杯である。いずれも残存度が低く、全体の形態が分かるものは161のみである。肩の張る体部で、外面下半をヘラケズリ、内面を板状工具によりナデを施す。160の内面は板ナデ状の非常に細かいハケメである。163



第19図 SD 8 出土遺物実測図 (1 : 4)

は長脚化しておらず、脚部に面取り状のヘラケズリを施す。

164は製塩土器、165は灰釉陶器の壺、166は須恵器の椀である。164は小片のため、底部径を17.8cmに仮定して図化を行った。

(2) S E 20出土遺物 (第20図)

土師器、須恵器、黒色土器等が出土しているが、いずれも小片で、混入も多い。

167～170は土師器で、167は杯、168・169は皿、170は甕であるが、169以外は前代の混入と思われる。167は全体的に丁寧な仕上げで、内面には細かいラセン暗文が僅かに認められる。

171は黒色土器の杯である。A類で、内外面共にヘラミガキで調整されるが、外面はヘラケズリの後に施している。

172は須恵器の杯、174は壺か甕、173は埴輪である。174は小片のため、頸部径を23.4cmに仮定して図化を行った。やや酸化焼成気味である。173は明らかに混入である。円筒埴輪と考えられ、外面に粗く深いハケメを施す。酸化焼成しているが、硬質である。

(3) S K 42出土遺物 (第20図)

土師器の皿(175)・高杯(176)、製塩土器(177)、須恵器の壺(178)が図化できたが、175が1/2の残存の他は小片である。176の脚部外面は、指により強く面取り風にナデを施す。177は小片のため、口径を18cmに仮定して図化を行った。

(4) S B 4 出土遺物 (第20図)

土師器の杯(179)、黒色土器の椀(180)、製塩土器(181)を図示した。掘立柱建物柱穴からの出土であるため、残存度が低いものが多いが、180は底部完存である。A類で、底部内面に簡略なラセン暗文を施すが、体部内面のヘラミガキは摩滅のため確認できない。181は製塩土器として全体の形態を表すことができる希少なものであるが、小片のため口径を18cmに仮定して図化を行った。

(5) S B 5 出土遺物 (第20図)

土師器や製塩土器の小片が出土した。図示したものは全て土師器で、182・183は杯、184は皿、185は高杯である。182は疎らな放射暗文を施すが、底部外面は未調整である。184は外面を口縁部ちかくまでヘラケズリで調整し、前代からの混入と考えられる。

(6) S A 41出土遺物 (第20図)

土師器の杯・甕の小片が出土しているが、図示できたものは杯(186)と皿(187)である。なかでも186はほぼ完形で出土した。両者とも底部外面未調整である。

(7) S B 12出土遺物 (第20図)

土師器杯・甕、製塩土器、黒色土器片が出土しているが、図化できたものは188のみである。188は土師器で、一見鉢状の形態であるが、底部を形成せず、筒状を呈する。小片のため、口径等は仮定にちかい推定で、体部の傾きも推定である。摩滅のため調整は不明であるが、粘土紐接合痕を残す粗い仕上げのため、未調整か簡単なナデと思われる。

(8) S B 13出土遺物 (第20図)

土師器・須恵器の小片が出土しているが、図示したものは土師器杯(189)・皿(190)、製塩土器(191)である。189は杯としたが、皿状の形態、190は小型の器高が低いもので、今回出土した土師器皿では新しい部類である。191は小片のため、底部径を15cmに仮定して図化を行った。

3. 包含層出土遺物

(1) 縄文土器 (第21図)

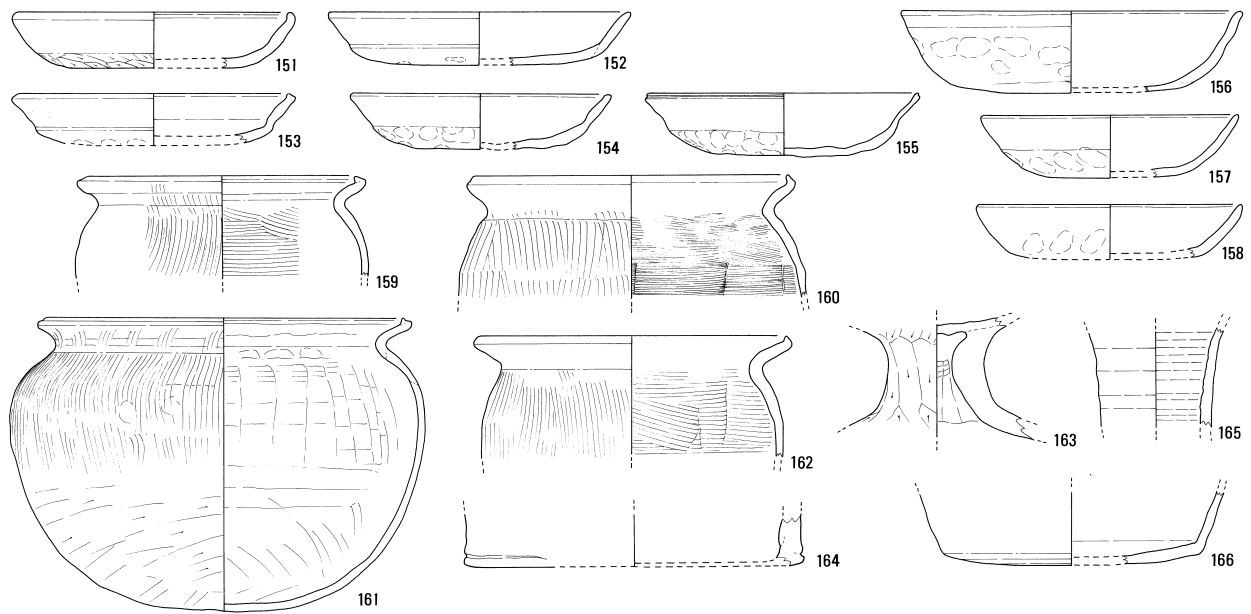
今回の調査で出土したものは192のみである。小片に加え摩滅が激しく、不明確な部分も多いが、一応、波状口縁を呈する口縁端部として図化した。外面に突帯を巡らす他は、器形・調整ともに不明である。

(2) 土師器 (第21～24図)

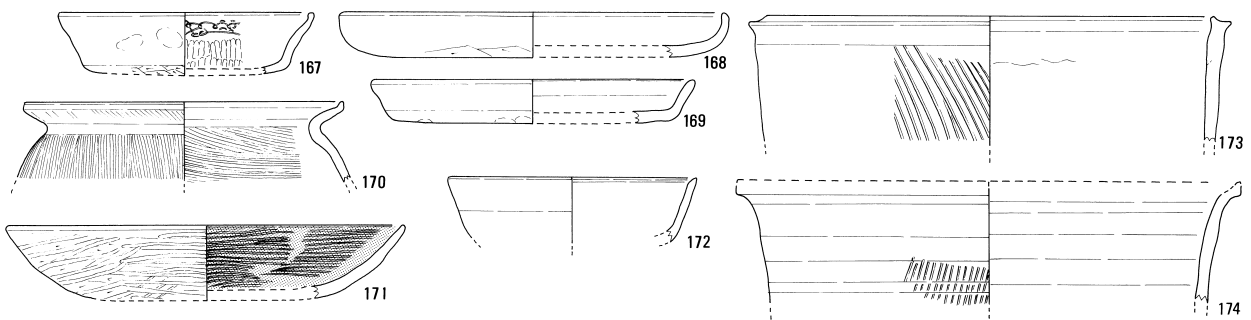
蓋(193・194) 194は杯状の形態であるが、つまみが付くことを推測させる割れ口で天井部外面をヘラミガキで調整するため、蓋と断定した。天井部と口縁部の境をロクロケズリ風にヘラケズリすることや、天井部内面に不定方向のヘラケズリを施す等、特異な調整を施すものである。

杯(195～232) 底部と口縁部の境が明瞭なもの(195～212・214・215・217・218・222・224)と緩慢なもの(213・216・221・225～227・229～232)があり、両者とも一部には口径15cmを超える大型のものがある。前者の大半は底部外面をヘラケズリで調整するが、後者の多くは未調整である。しかし、227は底部外面をヘラケズリし、221には内面にヘラ

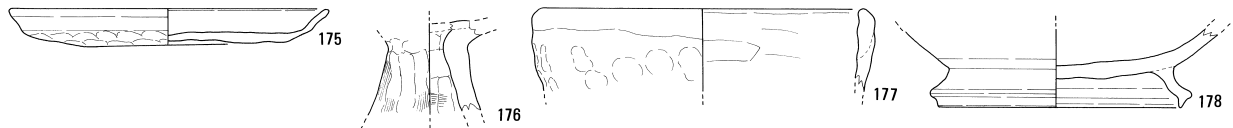
SE 1



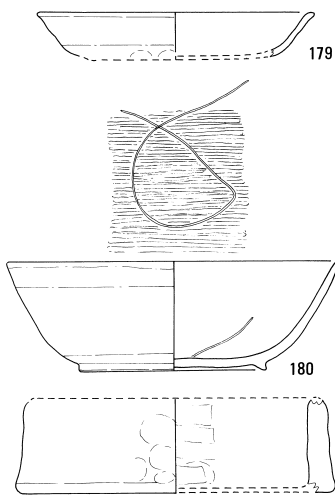
SE 20



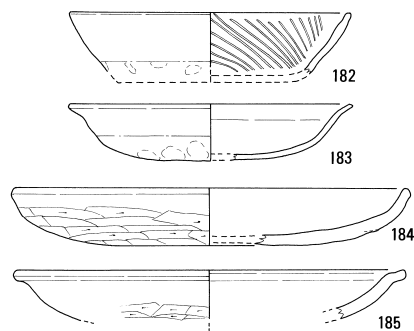
SK 42



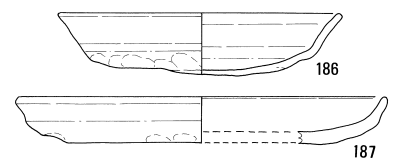
SB 4



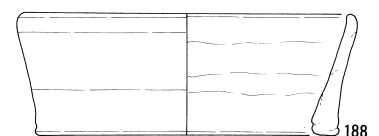
SB 5



SA 41



SB 12



SB 13



第20図 SE 1・20、SB 4・5・12・13、SA41、SK42出土遺物実測図（1：4）

ミガキを施す等、比較的丁寧に調整を加えるものも散見される。226も底部外面をヘラケズリし、内面に粗いラセン暗文を施すが、ヘラケズリは浅く弱いもので、指頭圧痕が残る。225・229・232には内面に煤の付着が認められ、杯を灯明皿として使用していたことがうかがえる。202の底部外面は工具によるナデで調整されるが、ヘラミガキ状に丁寧に施している。212の口縁部外面の一ヶ所をヘラ状工具により縦方向の強いナデを施すが、調整上の機能は認め難く、その意図は不明である。

焼成後に鋭利な工具により記号を記すものが多い。203・204は内面に「#」、196も同様と思われる。218は外面に格子状に施す。197は判然としないが、「#」を○で囲むものかもしれない。

219・220・223・228は小片のため器種が明確でないが、一応、杯として扱う。いずれも焼成後に鋭利な工具により内面に記号を記すもので、228は外面にも記す。小片のため明確ではないが、219は格子を○で囲むように見え、228の外面のものは「#」を○で囲むように見える。

皿（239～254） 底部から屈曲して立ち上がる口縁部をもつために底部と口縁部の境が明瞭なもの（241・242・246～248）、底部から内弯気味に立ち上がる口縁部をもつもの（239・243・245・249～252）があるが、中間的形態のものもあり、その分類は明瞭でない。253・254は小型で器壁の薄いものである。239・240の口縁端部外面には弱い沈線が施されるが、一周しない。243の口縁端部内面には沈線状の弱い窪みがあるが明瞭でない。239～247は底部外面をヘラケズリで調整するが、他のものは未調整である。239の底部外面のヘラケズリは指頭圧痕が残る浅いものである。240は底部外面にヘラケズリを施した後、部分的に指によるナデを施す。241の内面の工具によるナデは強く、一部ヘラケズリ状となっている。246の内面にはハケメ状の掻き取り痕があるが、調整の一環である。240の内面には焼成後、鋭利な工具により「#」と刻まれる。

盤（233） 口縁端部外面に沈線を巡らし、底部外面にヘラケズリを施すが、ヨコナデとの間に指頭圧痕が残る。

高杯（234～238） 234・235は杯部片、236は脚

部、237・238は脚柱部である。237・238共に短脚の脚柱部である。237は面取り状にヘラケズリするが、238はハケメ調整の後、簡単なヨコナデを施す。

椀（255～261） 全て粗製であるが、口縁端部外面に沈線を施すもの（255・258・260）がある。258は小片のため、口縁部の傾きや口径に疑問が残るものである。外面は黒斑となり、焼成不良の皿の可能性も残る。261の内面には、焼成後、鋭利な工具による線刻が施される。「○」を表現しているようであるが確証はない。

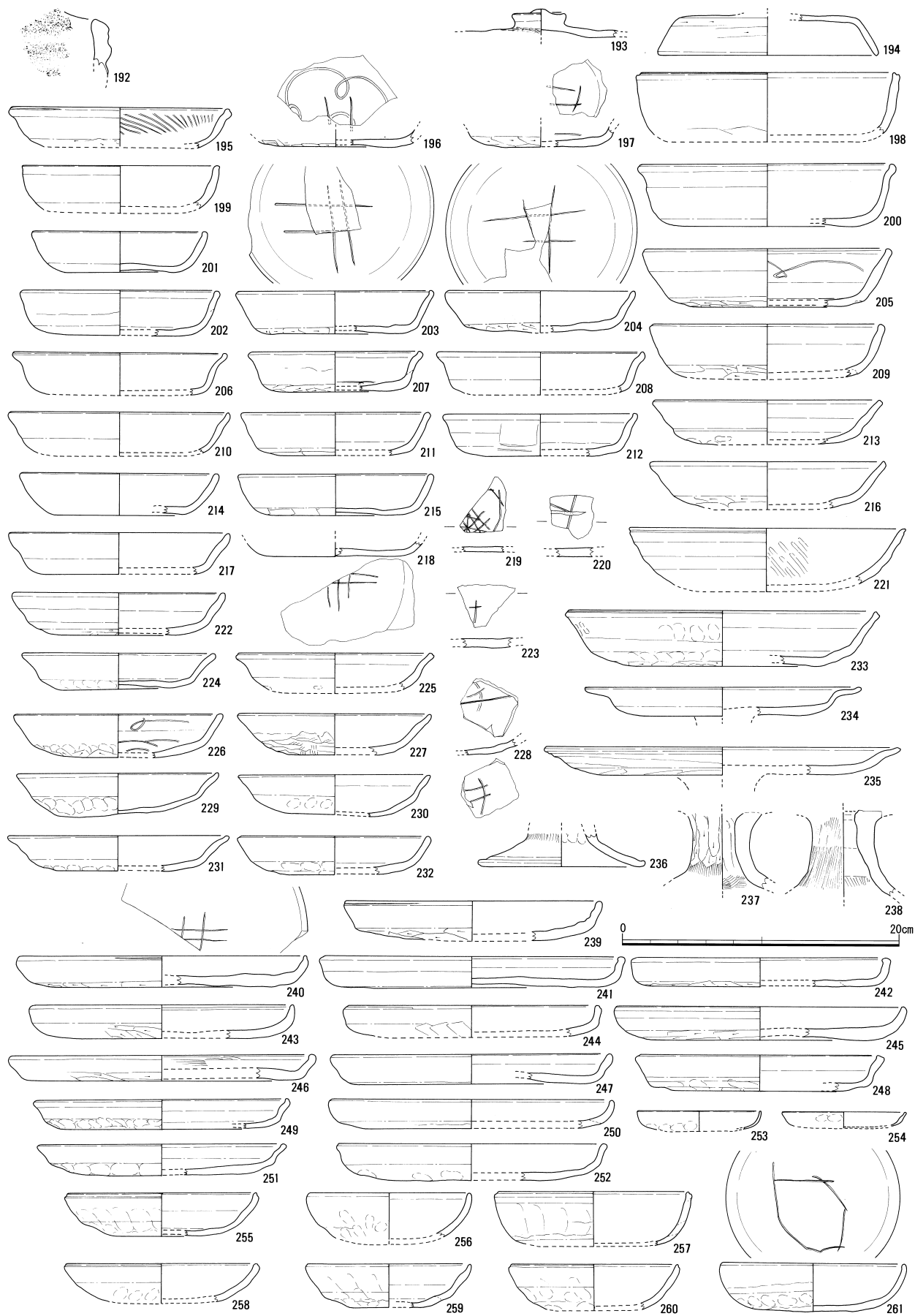
鉢（262） 粗製の鉢である。外面のハケメは非常に細かく弱いもので、未調整にちかい状態である。残存が少なく明確ではないが、体部外面下半にヘラケズリを施す可能性がある。

甕（263～285） 大半が口縁部片であり、全体の形態が明確なものはない。265は球形にちかい体部をもつものと考えられ、275・276・279・281は長胴甕と推測できる。多くが体部から「く」字に屈曲する口縁部をもつものであるが、273～278は水平ちかくまで外反する口縁部をもつものである。274は鉢とすべきかもしれない。口縁端部外面に沈線を巡らすもの（275・276・279・280・282）があるが、275は棒状工具により施している。

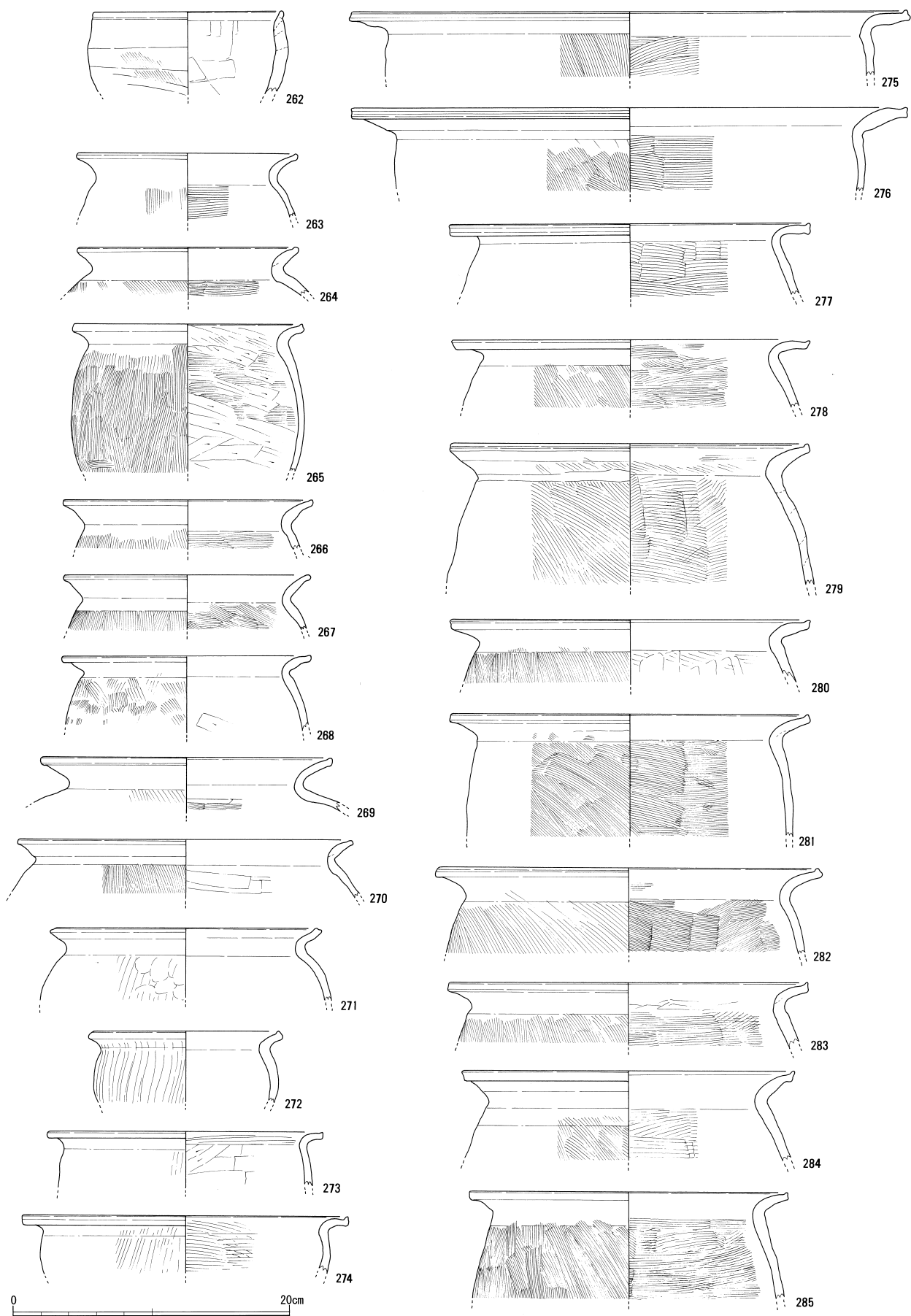
ハケメで調整するものが多いが、273・277はハケメをナデ消している。268の外面のハケメは非常に浅く、これもナデ消している可能性がある。271・272は粗いハケメで、271は指頭圧痕が残る。内面の調整もハケメのものが多いが、270・273は工具によるナデ、280も工具によるが、一部ヘラケズリ状となっている。273は口縁部ちかくの一部をナデの後ヘラケズリするが、調整上の必要性が認められない。276のヨコナデは頸部屈曲部で特に強く、凹線状になる。

甗（286～292） 口縁部片と底部片である。286は小片のため口径を34cmに仮定して図化を行った。286～288は直立する口縁部で、287の口縁端部外面には深い沈線が細い棒状工具により刻まれている。290の底部孔は円形であることが分かる。

289は甗として扱ったが、器種・器形ともに仮定である。口縁部片ではあるが、明和町の北野遺跡で多数出土している「有孔広口筒型土器」^⑤と似た形態である。しかし、北野遺跡のものは口縁部が外反し、



第21図 包含層出土遺物実測図（1：4）



第22図 包含層出土遺物実測図（1：4）

端部はそのまま丸くおさめるものが一般的である。対して当遺跡のものは口縁が内弯気味となり、端部も若干肥厚し面をもち、脚端部の可能性も残る形態である。そうした場合、上下逆となり、カマドの脚部等を想定することになるが、脚部とするには器壁が薄く貧弱である。全体から受ける印象では土器の一種と推定され、一応、口縁部片としてここで紹介しておく。

鍋 (293・294) 両者とも口縁片で、294は小片のため口径を48cmに仮定して図化をおこなった。両者とも口縁端部が断面三角形状を呈するものである。

羽釜 (295) 小片のため口径を32cmに仮定して

図化を行った。小片ではあるが口縁部の形態から羽釜と推測する。

(3) 製塩土器 (第23図)

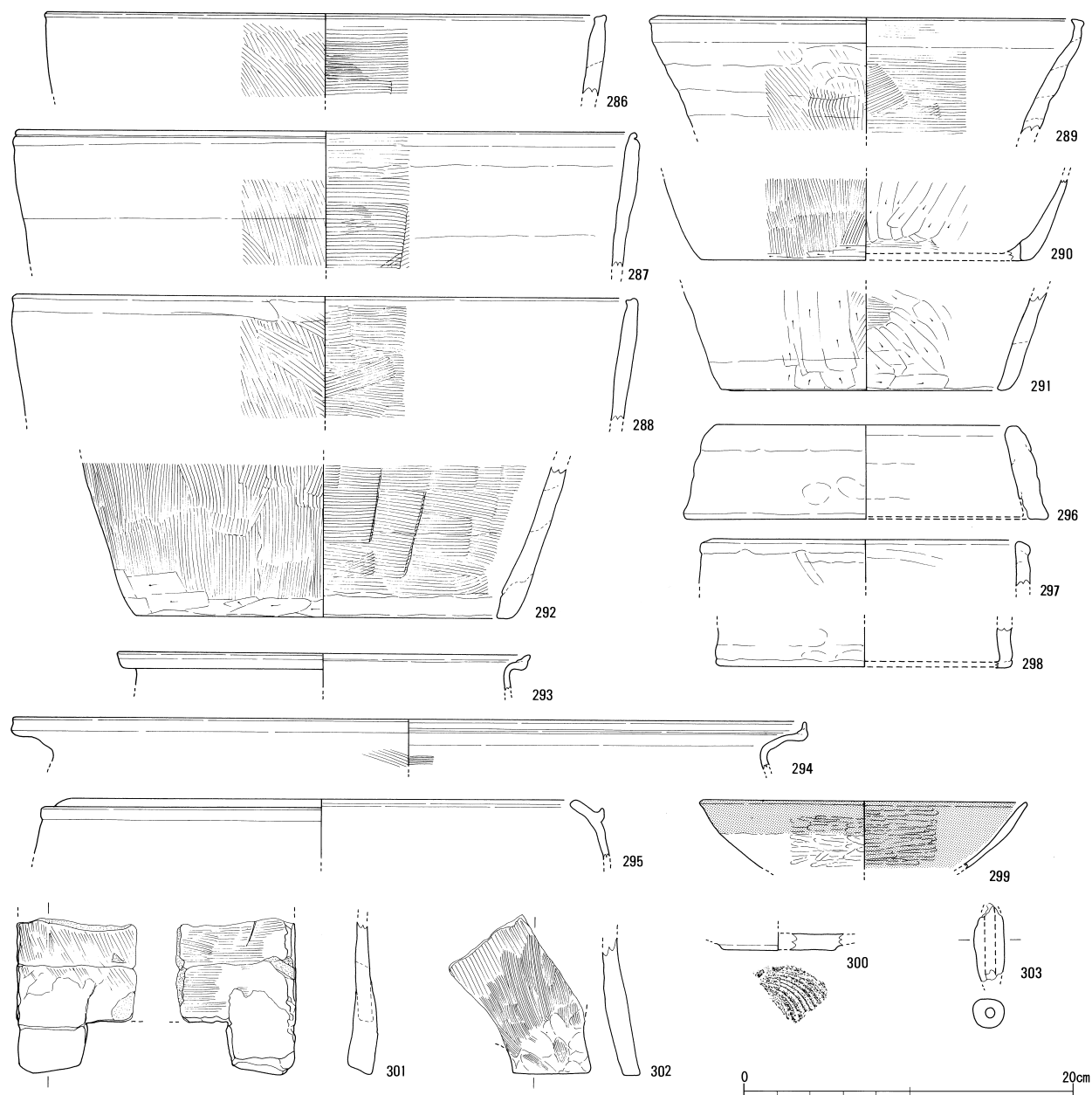
296・297は口縁部片、298は体部下端片である。296は器高が明確な希少なものであるが、口径は小片のため18.3cmに仮定している。297の口径も同様である。

(4) 黒色土器 (第23図)

299は碗の口縁部である。内外面ともヘラミガキで調整され、内面を燻すA類であるが、燻しの範囲は口縁端部外面にも及ぶ。

(5) ロクロ土師器 (第23図)

300は底部の小片のため、碗か皿かは判別できな



第23図 包含層出土遺物実測図 (1 : 4)

い。底部外面には糸切の痕跡が明瞭に残る。

(6) 土製品 (第23図)

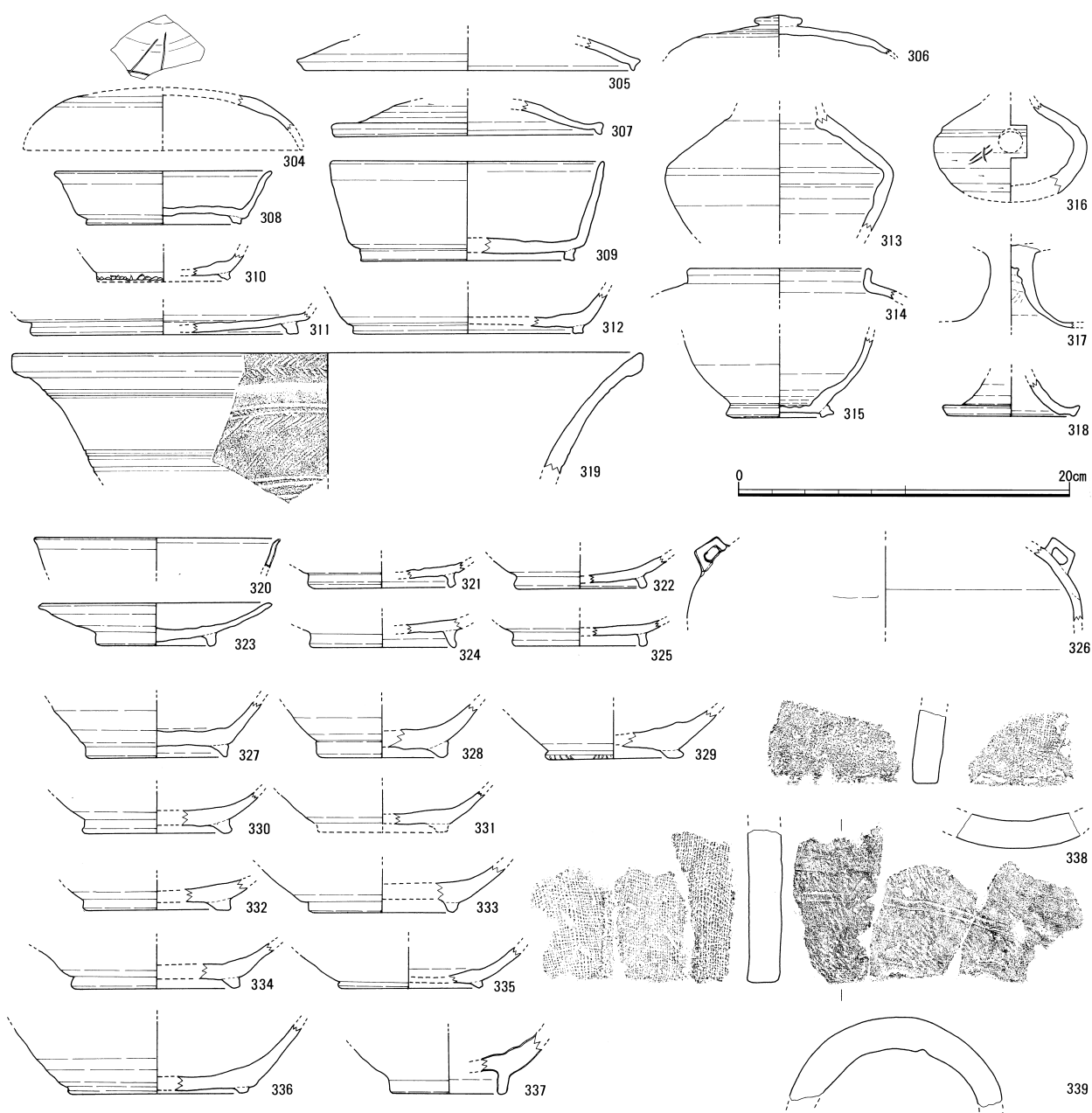
301・302はカマド片と推定され、303は土錘である。301・302は共に小片のため確証はないものの、301はカマドの前下端部とみてよいであろう。カマド下端に2 cmほどの通空部を形成するため、短い脚が体部を包み込むように接合されている。302も同様にカマドの脚部としたが、その場合、下端の通空部は6 cmを超えることになり、疑問である。カマドとしては精巧性も高すぎるように思え、何かの造形品の一部かもしれない。

(7) 須恵器 (第24図)

304～307は蓋、308～312は杯、313～315は壺、316は甕、317・318は高杯、319は甕である。

蓋にはつまみの無いもの(304)とあるもの(305～307)がある。306のつまみは扁平なものであり、焼成不良のためか、軟質に焼けている。304の天井部外面には焼成前に記号が刻まれているが、その表すものは不明である。

杯は、全て高台の付くもので、312は焼成不良ではあるが、ロクロナデの後、底部内面を不定方向にナデを施す。310の高台はその外面を故意に打ち欠



第24図 包含層出土遺物実測図 (1:4)

かれ、剥離面が連続する形態を呈するが、その意図するところは不明である。

316の体部外面には焼成前に「×」と刻まれている。また、318は高杯の脚としたが、壺や甗の脚の可能性もある。

319の口縁部外面には装飾がある。端部ちかくにはヘラによる羽状刻目を上段から下段、左から右の順に施している。その下に二又状工具により2段に2条一組の沈線を施し、その間に3条一組の櫛状工具による浅い沈線を右から左に施している。欠損のため不明確であるが、下段沈線の直ぐ下に3段目の沈線があるようである。したがって、2段目と3段目の沈線間は相対的に突帯状を呈することになる。

（８）灰釉陶器（第24図）

320は椀、323は皿、326は壺である。他のもの（321・322・324・325）は底部片のため不明確であるが、一応、椀として扱う。320・323の灰釉はハケ塗り、底部外面の調整は323・324がロクロケズリ、322・325は未調整、321はナデである。323の底部内面には直接重ね焼きの痕跡がある。

（９）山茶椀（第24図）

図示したもの（327～336）は、全て椀の底部である。331・332・334・336の底部内面は磨耗しており、硯に転用された可能性がある。また、329・333の高台には舂殻痕が認められる。

（10）青磁（第24図）

図示できるものは337のみである。施釉のため不明瞭であるが、削り出し高台と思われる。

（11）瓦（第24図）

両者とも小片であるが、338は平瓦、339は行基式の丸瓦である。339の凸面は縄叩の後、ヘラケズリ状の調整を加える。

〔註〕

- ① 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所『三重県斎宮跡調査事務所年報1988 史跡 斎宮跡 発掘調査概報』平成元年3月
- ② 三重県埋蔵文化財センター『六大A遺跡発掘調査報告』2002年3月
- ③ 古代の土器研究会『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』1996年9月21日
- ④ 柏原市教育委員会『高井田遺跡Ⅲ－国民年金保健センター建設に伴う－』1989年
- ⑤ 三重県埋蔵文化財センター『北野遺跡（第2・3・4次）発掘調査報告』1995.3

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種 器形	法 量 (cm)			調整技法の特徴	色 調	胎土	残存度	備 考
					口径	器高	その他					
1	6-4	SH3	D-2 SK1 №4	土師器 杯	18.1	4.3		外面ヘラケズリ、内面放射暗文	橙(5YR7/8)	精良	口縁部1/8残	
2	18-4	SH3	D-2 SK1	土師器 杯	17.7	4.4		外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(2.5YR6/6)	精良	口縁部1/12残	
3	6-5	SH3	D-2 SK1	土師器 杯	14.1	2.6		底部外面ヘラケズリ、他はナデ	橙(2.5YR6/8)	砂粒若干含	口縁部1/4残	
4	17-4	SH3	D-2 SK1	土師器 杯	15.8	2.7		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(5YR6/6)	精良	口縁部1/12残	
5	17-5	SH3	D-2 SK1	土師器 杯	—	—	高台径 12.0	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	2mmの砂粒含	底部1/4残	摩滅が激しく、調整不明確。
6	18-5	SH3	D-2 SK1	土師器 皿	16.0	2.2		外面未調整、内面ナデ	橙(2.5YR6/8)	精良	小片	口径は仮定。
7	13-5	SH3	D-2 SK1	土師器 椀	13.4	—		外面下半ヘラケズリ、他はナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	微砂粒若干含	口縁部1/12残	
8	14-5	SH3	D-2 SK1	製塩土器 鉢	20.1	—		内面一部ナデ、他は未調整	外：にぶい橙(5YR7/4) 内：橙(2.5YR6/6)	3mmの砂粒多含	口縁部1/12以下残	
9	18-1	SH3	D-2 SK1	土師器 高杯	—	—	脚径 28.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	橙(5YR6/6)	精良	脚部1/12残	
10	17-2	SH3	D-2 SK1	土師器 甕	25.6	—		ハケメ	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	精良	口縁部1/6残	
11	13-1	SH3	D-2 SK1	土師器 甕	26.6	—		外面ナデ、内面ハケメ	外：にぶい橙(7.5YR7/3) 内：浅黄橙(10YR8/4)	精良	口縁部1/6残	
12	6-3	SH3	D-2 SK1 №3	土師器 甕	21.8	—		ハケメ	浅黄橙(10YR8/4)	2mmの砂粒多含	口縁部1/6残	
13	17-1	SH3	D-2 SK1	土師器 甕	30.0	—		外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	
14	13-2	SH3	D-2 SK1	土師器 甕	19.1	—		外面ハケメ、内面上半ハケメ、下半ヘラケズリ	外：褐灰(5YR4/1) 内：にぶい黄橙(10YR7/2)	精良	口縁部1/12残	
15	17-3	SH3	D-2 SK1	土師器 甕	23.0	—		外面ナデ、一部ハケメ、内面ナデ	橙(5YR7/8)	精良	口縁部1/6残	
16	6-2	SH3	D-2 SK1 №2	須恵器 蓋	14.7	4.1		底部外面一部ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰(N6/)	精良	口縁部2/5残	
17	18-2	SH3	D-2 SK1	須恵器 蓋	24.0	—		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰(5Y6/1)	微砂粒含	口縁部1/12残	
18	6-1	SH3	D-2 SK1 №1	須恵器 杯	13.0	4.4	高台径 9.1	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰(N6/)	精良	口縁部1/8、底部2/3残	
19	13-4	SH3	D-2 SK1	須恵器 壺	11.8	—		ロクロナデ	外：褐灰(7.5YR4/1) 内：褐灰(10YR6/1)	2mmの砂粒多含	口縁部1/6残	
20	5-4	SH3	D-2 SK1	須恵器 鉢	17.8	—		体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：灰(N5/) 内：灰白(N8/)	4mmの小石含	口縁部1/10、体部1/4残	
21	15-2	SK18	H-8 SK2	土師器 杯	15.0	3.1		底部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：橙(5YR7/6)	精良	口縁部1/6残	内面ヘラミガキは暗文風。
22	15-6	SK18	H-8 SK2	土師器 杯	18.0	4.5		ヨコナデ	橙(5YR7/8)	精良	小片	口径は仮定。摩滅が激しく調整不明確。

第1表 遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種 器形	法 量 (cm)			調整技法の特徴	色 調	胎土	残存度	備 考
					口径	器高	その他					
23	15-5	SK18	H-8 SK2	土師器 杯	17.0	4.6		外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(5YR7/6)	4mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	
24	16-4	SK18	H-8 SK2	土師器 杯	14.0	4.0		ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	摩滅が激しく調整不明確。焼成不良。
25	15-7	SK18	H-8 SK2	土師器 皿	20.0	2.7		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(2.5YR6/8)	雲母若干含	小片	口径は仮定。
26	16-2	SK18	H-8 SK2	土師器 皿	21.0	2.4		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(2.5YR7/8)	雲母含	口縁部1/12残	内面に線刻。
27	15-8	SK18	H-8 SK2	土師器 甕	25.0	—		ハケメ	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	精良	口縁部1/6残	
28	32-2	SX40	K-10 P1	須恵器 蓋	17.3	4.5		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	黄灰(2.5Y5/1)	1mmの砂粒含	完形	
29	25-7	SK32	H-4 SK1	土師器 皿	24.0	2.4		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	明赤褐(2.5YR5/6)	微砂粒含	口縁部1/12残	
30	25-1	SK32	H-4 SK1	土師器 甕	15.2	—		ハケメ	外：橙(2.5YR6/6) 内：橙(7.5YR6/6)	精良	口縁部1/6残	
31	20-2	SK32	H-4 SK1	土師器 甕	21.0	—		外面ハケメ、内面ナデ	灰黄褐(10YR6/2)	2mmの砂粒含	脚部1/12残	
32	26-3	SK32	H-4 SK1	須恵器 杯	9.3	3.4	受部径11.5	底部外面未調整、他はロクロナデ	灰白(N7/)	微砂粒含	口縁部1/4残	
33	56-1	SK2	B-2 SK1	土師器 杯	15.0	3.1		ナデ	橙(5YR7/6)	精良	口縁部1/4残	
34	56-8	SK2	B-2 SK1	土師器 皿	18.8	2.3		ナデ?	橙(7.5YR7/6)	精良	口縁部1/6残	摩滅が激しく調整不明。
35	36-1	SK2	B-2 SK1	土師器 高杯	22.9	—		ナデ	橙(7.5YR7/6)	精良	口縁部1/2残	摩滅のため調整不明確。
36	22-6	SK19	I-9 SK1	土師器 杯	19.1	4.5		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	外：橙(5YR6/8) 内：橙(7.5YR6/8)	精良	口縁部1/6残	摩滅が激しく調整不明確。
37	24-1	SK19	I-9 SK1	土師器 皿	20.0	2.6		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	外：橙(7.5YR7/6) 内：橙(5YR7/8)	精良	口縁部1/12残	
38	19-2	SK19	I-9 SK1	土師器 皿	23.0	2.4		外面未調整、内面ナデ	橙(5YR7/6)	1.5mmの砂粒含	口縁部1/6残	
39	55-7	SK38	I-8 SD2	土師器 甕	13.6	—		ハケメ	にぶい橙(5YR7/4)	雲母含	口縁部1/6残	
40	55-6	SK38	I-8 SD2	須恵器 蓋	15.0	2.3		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰(7.5Y6/1)	0.5mmの砂粒含	口縁部1/6残	還元やや不良。
41	29-3	SH16	G-7 SB1	土師器 杯	14.0	2.7		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	外：赤橙(10R6/6) 内：橙(2.5YR6/6)	雲母含	口縁部1/3残	カマド内出土。
42	5-1	SH16	G-7 SB1	土師器 甕	17.3	14.2		外面ハケメ、内面上半ハケメ・下半ヘラケズリ	浅黄橙(10YR8/3)	3mmの砂粒若干含	口縁部1/5残、体部完存	
43	31-1	SH16	G-7 SB1	土師器 甕	27.1	—		外面ナデ、内面工具ナデ	外：にぶい黄褐(10YR5/3) 内：にぶい黄橙(10YR6/4)	2mmの砂粒含	口縁部1/4残	
44	52-1	SH16	G-7 SB1	土師器 甕	—	—		外面ハケメ、内面ヘラケズリ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：にぶい黄橙(10YR6/3)	2mmの砂粒含	体部1/4残	
45	50-4	SH16	G-7 SB1	土師器 甕	36.0	—		ハケメ	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：にぶい橙(5YR6/4)	1.5mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	
46	50-3	SH16	G-7 SB1	土師器 甕	27.0	—		ハケメ	外：にぶい褐(7.5YR6/3) 内：浅黄橙(10YR8/3)	微砂粒・雲母含	口縁部1/6残	
47	7-1	SH16	G-7 SB1	土師器 甕	24.4	39.3		体部内面下半ヘラケズリ、他はハケメ	灰白(10YR8/2)	2mmの砂粒若干含	口縁部5/6残、体部ほぼ完存	カマド内出土。
48	30-3	SH16	G-7 SB1	土師器 羽釜?	—	—	跨42.0	ナデ	灰白(2.5Y8/2)	2mmの砂粒多含	跨1/6残	カマド内出土。摩滅が激しく調整不明確。
49	29-4	SH16	G-7 SB1	須恵器 壺	24.0	—		ロクロナデ	灰白(N7/)	細砂粒含	口縁部小片	
50	19-4	SK21	H-9 SK2	土師器 杯	18.0	4.4		外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	にぶい橙(5YR6/4)	精良	口縁部1/12残	
51	12-5	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	15.2	3.9		底部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	外：にぶい褐(7.5YR6/3) 内：灰褐(7.5YR5/2)	精良	口縁部1/6残	内面ヘラミガキは暗文風。
52	27-8	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	13.8	3.6		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	
53	15-4	SK21	H-9 SK3	土師器 杯	14.0	3.9		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(5YR7/6)	雲母含	口縁部1/6残	内面一部にラセン暗文。
54	35-1	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	17.8	4.0		底部外面ヘラケズリ、他はナデ	橙(5YR6/6)	精良	5/12残	内面に不定形な線刻。底部内面黒斑状。
55	1-2	SK21	H-9 SK3	土師器 杯	17.1	4.2		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(2.5YR6/8)	精良	1/2残	内面に線刻。摩滅が激しく調整不明確。
56	3-3	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	17.4	4.3		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	赤橙(10YR6/8)	精良	ほぼ完形	内面に線刻「#」。
57	23-6	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	19.0	3.6		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(5YR6/6)	精良	口縁部1/12残	
58	27-4	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	18.2	3.5		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(5YR6/6)	2mm以下の砂粒含	口縁部1/4残	
59	23-5	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	18.4	3.5		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(7.5YR6/6)	精良	口縁部1/12残	
60	23-2	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	19.8	4.0		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(5YR7/8)	精良	口縁部1/12残	
61	1-1	SK21	H-9 SK3	土師器 杯	17.8	4.6		底部外面ヘラケズリ?、内面ナデ	橙(2.5YR6/8)	精良	1/6残	内面に線刻。摩滅が激しく調整不明確。
62	19-3	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	18.0	4.3		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	外：にぶい褐(7.5YR6/3) 内：橙(5YR7/6)	微砂粒・雲母含	口縁部1/6残	
63	15-1	SK21	H-9 SK3	土師器 杯	14.5	3.1		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	灰白(7.5Y7/1)	1mmの砂粒若干含	口縁部1/4残	焼成不良。摩滅が激しく調整不明。
64	22-3	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	16.0	3.8		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(5YR6/8)	精良	口縁部1/6残	口縁端部を継ぎ足したためか、接合部が沈線状に残る。
65	4-1	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	14.5	3.7		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(5YR7/6)	精良	1/4残	内面にラセン暗文。
66	3-1	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	14.3	3.3		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(5YR7/6)	精良	ほぼ完形	内面に線刻。摩滅が激しく調整不明確。
67	4-5	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	13.8	3.3		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	精良	1/2残	内面に線刻「#」、ラセン暗文。

第1表 遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種 器形	法 量 (cm)			調整技法の特徴	色 調	胎土	残存度	備 考
					口径	器高	その他					
68	35-3	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	15.4	3.0		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：橙(5YR6/6)	精良	1/5残	内面にラセン暗文＋線刻「#」。
69	22-4	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	13.9	2.8		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	外：橙(5YR6/6) 内：にぶい黄橙(10YR6/4)	3mmの砂粒含	口縁部1/6残	底部外面に線刻。
70	22-5	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	14.0	3.0		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(5YR6/8)	精良	口縁部1/6残	摩滅が激しく調整不明確。
71	48-6	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	14.0	3.0		底部外面ヘラケズリ、他はナデ	橙(5YR6/8)	1.5mm以下の砂粒含	口縁部1/12残	
72	4-4	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	15.2	3.6		外面不明、内面ナデ	橙(5YR7/8)	2mmの砂粒若干含	1/4残	摩滅が激しく、底部外面調整不明。
73	23-1	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	15.5	2.8		底部外面ナデ？、内面ナデ	橙(7.5YR6/6)	精良	口縁部1/12残	底部小片のため調整不明確。
74	23-3	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	12.7	2.5		ナデ	外：明黄褐(10YR7/6) 内：黄橙(7.5YR7/8)	1mmの砂粒含	口縁部1/12残	摩滅のため調整不明確。
75	28-4	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	13.0	2.6		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(2.5YR6/8)	1mm以下の砂粒・赤色粒含	口縁部1/6残	内面に線刻。
76	4-6	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	13.6	3.0		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(5YR7/8)	精良	口縁部1/8残	内面に線刻「#」。
77	22-1	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	13.9	3.3		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(7.5YR6/6)	2mmの砂粒含	口縁部1/6残	
78	3-2	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	13.9	2.5		外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(2.5YR6/6)	1～2mmの砂粒含	1/2残	
79	4-2	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	13.5	3.2		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(5YR6/8)	1mmの砂粒含	2/3残	摩滅が激しい。
80	23-4	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	14.9	2.8		ナデ	外：にぶい黄橙(10YR6/4) 内：橙(7.5YR6/6)	1mmの砂粒含	口縁部1/12残	
81	36-3	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	—	—		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR6/4) 内：橙(7.5YR7/6)	精良	底部1/3残	内面にラセン暗文＋線刻「#」。外面に線刻。
82	22-2	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	14.4	3.0		ナデ	橙(5YR6/8)	精良	口縁部1/4残	
83	25-8	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	—	—		底部外面未調整、内面ナデ	橙(2.5YR6/6)	微砂粒・赤色粒含	小片	内面に線刻。
84	28-7	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	—	—		底部外面ヘラケズリ、内面ラセン暗文	外：橙(5YR6/6) 内：橙(5YR7/6)	1mm以下の砂粒・赤色粒含	底部小片	内面にヘラ記号。摩滅激しく調整不明確。
85	16-6	SK21	H-9 SK2	土師器 杯か皿	—	—		底部外面ヘラケズリ？、内面ヘラミガキ？	橙(5YR7/6)	精良	底部小片	外面に線刻。
86	28-8	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	—	—		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(2.5YR7/6)	微砂粒・赤色粒含	底部小片	内外面に線刻。
87	19-6	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	—	—		外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(5YR7/6)	1.5mmの砂粒若干含	小片	内面に線刻「#」か。
88	28-6	SK21	H-9 SK1	土師器 杯	—	—		ナデ	橙(2.5YR6/8)	微砂粒含	底部小片	内面に線刻。外面摩滅激しく調整不明確。
89	27-2	SK21	H-9 SK1	土師器 皿	21.8	3.2		外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(5YR7/6)	赤色粒含	口縁部1/12残	
90	4-3	SK21	H-9 SK1	土師器 皿	14.9	3.0		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(7.5YR7/6)	精良	3/4残	
91	19-1	SK21	H-9 SK1	土師器 皿	15.0	2.1		ナデ	橙(5YR7/6)	精良	口縁部1/12残	
92	16-1	SK21	H-9 SK2	土師器 皿	20.0	2.7		底部外面未調整、内面ナデ	橙(2.5YR7/8)	1mmの砂粒含	口縁部1/12残	
93	24-2	SK21	H-9 SK1	土師器 皿	17.0	2.6		底部外面未調整、内面ナデ	橙(5YR6/6)	精良	口縁部1/12残	
94	24-3	SK21	H-9 SK1	土師器 皿	20.0	2.0		底部外面未調整、内面ナデ	橙(5YR6/8)	精良	口縁部1/12残	
95	28-2	SK21	H-9 SK1	土師器 皿	22.8	2.2		底部外面未調整、内面ナデ	外：橙(2.5Y6/8) 内：橙(5YR6/8)	1.5mm以下の砂粒・赤色粒含	口縁部1/6残	
96	36-2	SK21	H-9 SK1	土師器 皿	19.4	2.2		底部外面未調整、内面ナデ	外：黄橙(7.5YR7/8) 内：橙(5YR7/8)	精良	ほぼ完形	摩滅のため調整不明確。
97	16-3	SK21	H-9 SK2	土師器 皿	21.0	2.4		底部外面ナデ？、内面ナデ	橙(7.5YR7/6)	精良	口縁部1/12残	摩滅が激しく調整不明確。
98	35-4	SK21	H-9 SK1	土師器 皿	18.2	2.1		底部外面未調整、内面ナデ	外：橙(5YR6/6) 内：橙(7.5YR6/6)	精良	1/6残	摩滅のため調整不明確。
99	35-2	SK21	H-9 SK1	土師器 皿	20.4	2.4		底部外面ヘラケズリ、他はナデ	橙(2.5YR6/8)	精良	口縁部1/6残	
100	27-7	SK21	H-9 SK1	土師器 皿	20.8	2.4		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(7.5YR6/6) ～橙(2.5YR6/6)	微砂粒・赤色粒含	口縁部1/12残	内面に線刻「#」？。内面摩滅激しい。
101	24-4	SK21	H-9 SK1	土師器 皿	18.3	2.0		底部外面未調整、内面ナデ	橙(7.5YR7/6)	精良	口縁部1/12残	
102	1-3	SK21	H-9 SK3	土師器 皿	20.5	2.6		外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(2.5YR7/8)	1mmの砂粒含	1/8残	
103	12-3	SK21	H-9 SK1	土師器 碗	15.4	—		外面未調整、内面ナデ	浅黄橙(7.5YR8/3)	微砂粒含	口縁部1/12残	
104	12-4	SK21	H-9 SK1	土師器 碗	16.0	—		外面未調整一部工具ナデ、内面ナデ	にぶい橙(5YR6/4)	精良	口縁部1/6残	
105	16-5	SK21	H-9 SK3	土師器 碗	—	—		底部外面未調整、内面ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	精良	底部1/4残	内面に線刻「#」か。
106	25-5	SK21	H-9 SK1	土師器 碗	12.5	3.5		外面未調整、内面ナデ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：浅黄橙(10YR8/3)	2mm以下の砂粒含	口縁部1/4残	
107	25-2	SK21	H-9 SK1	土師器 碗	14.3	3.6		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	3mm以下の砂粒含	口縁部1/4残	
108	25-4	SK21	H-9 SK1	土師器 碗	13.4	4.1		外面未調整、内面ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	2.5mm以下の砂粒含	口縁部1/4残	
109	27-5	SK21	H-9 SK1	土師器 碗	13.2	3.5		外面未調整、内面ナデ	橙(5YR7/6)	3.5mm以下の砂粒含	口縁部1/4残	
110	46-4	SK21	H-9 SK1	土師器 碗	12.7	3.5		外面未調整、内面ナデ	外：橙(7.5YR7/6) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	精良	口縁部1/12残	
111	2-4	SK21	H-9 SK3	土師器 盤	35.9	7.0		外面ヘラケズリ、内面ナデ	橙(5YR7/8)	精良	1/10以下残	
112	28-1	SK21	H-9 SK1	土師器 高杯	23.0	—		杯部外面未調整、他はナデ	橙(5YR7/6)	1mm以下の砂粒・赤色粒含	口縁部1/4残	摩滅が激しく調整不明確。

第1表 遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種 器形	法 量 (cm)			調整技法の特徴	色 調	胎土	残存度	備 考
					口径	器高	その他					
113	19-7	SK21	H-9 SK1	土師器 高杯	—	—	脚径 13.4	外面ヘラケズリ、内面ナ デ	橙(2.5YR7/6)	精良	脚部1/12残	
114	28-9	SK21	H-9 SK1	土師器 高杯	—	—	底部 12.3	ハケメが残るナデ	橙(5YR6/6)	1mm以下の砂粒含	脚底部1/6残	
115	11-2	SK21	H-9 SK1	土師器 甕	24.2	—		ハケメ	にぶい橙(7.5YR7/4)	微砂粒含	口縁部1/12以下 残	
116	21-2	SK21	H-9 SK6	土師器 甕	28.0	—		ハケメ	外：浅黄橙(7.5YR8/3) 内：にぶい橙(7.5YR7/3)	雲母含	口縁部1/6残	
117	20-1	SK21	H-9 SK1	土師器 甕	18.6	—		ハケメ	外：浅黄橙(7.5YR8/4) 内：浅黄橙(10YR8/3)	2mmの砂粒・雲母 含	脚部1/12残	
118	11-1	SK21	H-9 SK1	土師器 甕	24.5	—		ハケメ	浅黄橙(10YR8/4)	1mmの砂粒含	口縁部1/6残	内面剥離激しく調整不明確。
119	21-1	SK21	H-9 SK1	土師器 甕	36.0	—		ハケメ	浅黄橙(7.5YR8/4)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	
120	12-2	SK21	H-9 SK1	土師器 甕	20.0	—		ハケメ	にぶい橙(7.5YR7/4)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	
121	12-1	SK21	H-9 SK1	土師器 甕	17.2	—		ハケメ	にぶい橙(7.5YR7/3)	微砂粒含	口縁部1/12残	
122	10-4	SK21	H-9 SK1	土師器 甕	11.3	—		外面未調整、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR6/4) 内：灰黄褐(10YR4/2)	1mmの砂粒含	口縁部1/6残	
123	11-3	SK21	H-9 SK1	土師器 甕	45.4	—		ハケメ	外：灰白(10YR8/2) 内：浅黄橙(10YR8/3)	2mmの砂粒含	口縁部1/12以下 残	
124	26-2	SK21	H-9 SK1	製塩土器 鉢	18.0	—		ナデ	にぶい橙(7.5YR7/6)	7mm以下の小石多 含	小片	口径は仮定。
125	18-3	SK21	H-9 SK3	製塩土器 鉢	18.0	—		外面未調整、内面ナデ	橙(2.5YR6/6)	2mmの砂粒含	小片	口径は仮定。
126	19-5	SK21	H-9 SK1	製塩土器 鉢	18.0	—		外面未調整、内面工具ナ デ	橙(2.5YR6/6)	2mmの砂粒・雲母 含	口縁部1/12残	
127	2-5	SK21	H-9 SK3	須恵器 蓋	19.4	3.0		天井部外面ロクロケズ リ、他はロクロナデ	灰(N5/)	精良	1/6残	
128	5-3	SK21	H-9 SK1	須恵器 蓋	15.1	3.7		天井部外面ロクロケズ リ、他はロクロナデ	灰(N5/)	精良	口縁部2/3残	天井部外面に自然釉が薄く掛かる。
129	15-3	SK21	H-9 SK3	須恵器 杯	12.0	—		ロクロナデ	外：灰(N5/) 内：灰(N6/)	微砂粒・雲母含	口縁部1/12残	口縁部に乾燥時の接着防止工具の圧 痕。
130	5-2	SK21	H-9 SK1	須恵器 杯	12.8	3.8		底部外面ロクロケズリ、 他はロクロナデ	灰(N5/)	2mmの砂粒若干含	口縁部3/4残、体 部完存	酸化焼成気味。
131	26-4	SK21	H-9 SK1	須恵器 杯	—	—	高台径 13.6	底部外面未調整、他はロ クロナデ	外：淡黄(2.5Y8/3) 内：灰黄(2.5Y7/2)	1.5mm以下の砂粒 含	底部1/6残	焼成不良。
132	37-1	SD8	E-4 東西大溝	土師器 杯	16.0	3.4		底部外面一部ヘラケズ リ、内面ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	微砂粒・雲母若 干含	口縁部1/12残	内面にラセン暗文。
133	39-4	SD8	C-4 SK3	土師器 杯	15.1	3.0		底部外面一部ヘラケズ リ、他はナデ	外：橙(5YR7/6) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	精良	1/2残	底部外面に墨痕。
134	39-2	SD8	C-4 SK3	土師器 杯	18.1	4.2		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	橙(5YR7/8)	1mmの砂粒含	口縁部1/6残	底部外面にヘラ記号。口縁端部に油 煙付着。
135	26-1	SD8	G-4 東西大溝	土師器 杯	—	—		底部外面ヘラケズリ、内 面ラセン暗文	橙(5YR6/6)	1mm以下の砂粒含	小片	内面に線刻、外面に墨書。
136	33-6	SD8	G-4 東西大溝	土師器 杯	17.0	4.0		ナデ	外：黄橙(7.5YR7/8) 内：橙(5YR7/8)	0.5mmの砂粒若干 含	口縁部2/3残	内面に線刻「井」。
137	25-6	SD8	G-4 東西大溝	土師器 皿	23.0	2.4		底部外面ヘラケズリ、内 面ラセン暗文	橙(2.5YR6/6)	1mm以下の砂粒含	口縁部1/12残	
138	29-1	SD8	E-4 東西大溝	土師器 皿	18.0	2.1		ナデ	外：浅黄橙(7.5YR8/6) 内：黄橙(7.5YR8/8)	1mmの砂粒若干含	口縁部1/6残	
139	30-1	SD8	G-4 東西大溝	土師器 皿	20.0	2.6		底部外面ヘラケズリ、内 面ナデ	橙(2.5YR6/8)	精良	口縁部1/4残	底部外面に墨書。
140	25-3	SD8	D-4 東西大溝	土師器 碗	14.3	3.5		外面未調整、内面ナデ	外：にぶい橙(7.5YR7/3) 内：浅黄橙(10YR8/4)	2mm以下の砂粒含	口縁部1/3残	
141	53-7	SD8	F-4 東西大溝	土師器 高杯	21.2	—		外面ヘラケズリ、他はナ デ	橙(5YR6/6)	赤色粒・微砂粒 含	口縁部1/6残	内面にラセン暗文。
142	30-2	SD8	E-4 東西大溝	土師器 高杯	—	—	脚部 12.3	脚部外面ヘラケズリ、内 面ナデ	橙(2.5YR7/8)	0.5mmの砂粒含	筒部完存、脚底 部1/3残	
143	38-3	SD8	G-4 東西大溝	土師器 高杯	—	—	脚径 13.2	脚部外面一部ヘラケズ リ、他はナデ	橙(2.5YR7/8)	精良	脚部1/6残	脚部裾外面に不定形線刻。
144	29-5	SD8	E-4 東西大溝	土師器 甕	17.0	—		外面ハケメ、内面上半ハ ケメ、下半ヘラケズリ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：浅黄橙(7.5YR8/4)	微砂粒若干含	口縁部1/6残	外面に煤付着。
145	31-2	SD8	E-4 東西大溝	土師器 甕	16.7	—		外面ハケメ、内面工具ナ デ	にぶい黄橙(10YR7/4)	2mmの砂粒含	口縁部2/3残	
146	34-1	SD8	K-4 東西大溝	土師器 鉢	26.9	—		内外面下半ヘラケズリ、 外面上半ハケメ	浅黄橙(7.5YR8/6)	0.5mmの砂粒若干 含	口縁部3/4残	
147	29-2	SD8	E-4 東西大溝	土師器 鉢	19.0	—		ナデ?	外：橙(7.5YR7/6) 内：橙(5YR7/6)	微砂粒若干含	口縁部1/4残	摩滅が激しく調整不明。
148	37-3	SD8	E-4 東西大溝	須恵器 蓋	13.0	2.4		天井部外面ロクロケズ リ、他はロクロナデ	灰白(2.5Y7/1)	精良	口縁部1/4残	口縁端部に煤付着。
149	26-5	SD8	G-4 東西大溝	須恵器 壺	—	—	頸部 6.6	ロクロナデ	灰白(5Y7/1)	2.5mm以下の砂粒 含	頸部完存	外面に櫛による刺突文+沈線。
150	37-6	SD8	G-4 東西大溝	須恵器 壺	—	—	体部径 9.1	底部外面ロクロケズリ、 他はロクロナデ	灰(N5/)	2mmの砂粒含	体部完存	
151	56-3	SE1	B-3 SK1	土師器 杯	14.6	2.9		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	橙(2.5YR7/8)	微砂粒若干含	口縁部1/6残	
152	56-6	SE1	B-3 SK1	土師器 杯	16.0	2.8		底部外面未調整、他はナ デ	外：橙(5YR7/6) 内：浅黄橙(10YR8/4)	精良	口縁部1/6残	
153	56-2	SE1	B-3 SK1	土師器 杯	14.8	2.7		底部外面未調整、他はナ デ	橙(2.5YR7/8)	1mmの砂粒・雲母 含	口縁部1/6残	非常に強いヨロナデ。
154	8-2	SE1	B-3 SK1	土師器 杯	13.5	2.9		底部外面未調整、他はナ デ	灰白(10YR8/2)	微砂粒若干含	口縁部1/3残	
155	8-1	SE1	B-3 SK1	土師器 杯	14.1	3.3		底部外面未調整、他はナ デ	浅黄橙(7.5YR8/4)	微砂粒含	3/4残	
156	56-5	SE1	B-3 SK1	土師器 杯	18.0	4.4		外面未調整、他はナデ	橙(7.5YR7/6)	雲母若干含	口縁部1/6残	
157	56-4	SE1	B-3 SK1枠外	土師器 杯	13.6	3.3		底部外面未調整、他はナ デ	橙(5YR6/8)	精良	口縁部1/6残	

第1表 遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種 器形	法 量 (cm)			調整技法の特徴	色 調	胎土	残存度	備 考
					口径	器高	その他					
158	55-1	SE1	B-3 SK1	土師器 椀	14.0	3.4		底部外面未調整、他はナデ	外：灰(N5/) 内：灰白(10YR8/2)	精良	口縁部1/6残	焼成やや不良で体部は黒斑状。
159	56-7	SE1	B-3 SK1	土師器 甕	15.2	—		ハケメ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：灰褐(7.5YR5/2)	精良	口縁部1/6残	
160	8-3	SE1	B-3 SK1	土師器 甕	16.5	—		ハケメ	灰白(10YR8/2)	微砂粒若干含	口縁部3/4残	外面に厚く煤付着。
161	38-1	SE1	B-3 SK1	土師器 甕	18.8	15.4		外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面工具ナデ	外：黒(N2/) 内：暗褐(7.5YR3/3)	精良	1/4残	外面煤のため調整不明瞭。
162	8-4	SE1	B-3 SK1	土師器 甕	16.2	—		ハケメ	灰白(10YR8/2)	白色砂粒多含	口縁部1/4残	
163	55-5	SE1	B-3 SK1 棒外	土師器 高杯	—	—	脚柱径 5.0	外面ヘラケズリ、他はナデ	外：淡橙(5YR8/3) 内：灰白(7.5YR8/2)	0.5mmの砂粒若干含	脚柱完存	
164	55-2	SE1	B-3 SK1	製塩土器 鉢	—	—	底径 17.8	外面未調整、内面ナデ	橙(5YR7/6)	5mm以下の小石含	底部小片	底径は仮定。
165	55-4	SE1	B-3 SK1	灰釉陶器 壺	—	—	頸部径 6.0	ロクロナデ	外：灰オリーブ(5Y5/3) 内：灰白(5Y7/1)	精良	頸部1/6残	
166	55-3	SE1	B-3 SK1	須恵器 椀	—	—	底径 12.6	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：にぶい黄褐(10YR5/3) 内：灰白(2.5Y7/1)	1mmの砂粒・雲母含	底部1/4残	
167	14-2	SE20	G-9 SK1	土師器 杯	13.4	3.3		底部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ・暗文	橙(5YR7/6)	精良	口縁部1/6残	
168	14-4	SE20	G-9 SK1	土師器 皿	20.0	2.3		底部外面ヘラケズリ、内面ナデ	にぶい橙(5Y7/4)	精良	口縁部1/12以下残	
169	14-1	SE20	G-9 SK1	土師器 皿	17.0	2.3		底部外面未調整、他はナデ	橙(5YR7/6)	精良	口縁部1/6残	
170	10-3	SE20	G-9 SK1	土師器 甕	16.8	—		ハケメ	橙(7.5YR7/6)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	
171	33-3	SE20	G-9 SK1	黒色土器 杯	21.0	3.9		ヘラミガキ	外：赤橙(10YR6/6) 内：黒(N2/)	3mmの砂粒・雲母含	口縁部1/6残	A類。
172	14-3	SE20	G-9 SK1	須恵器 杯	13.0	—		ロクロナデ	灰白(5Y7/1)	精良	口縁部1/6残	
173	10-2	SE20	G-9 SK1	埴輪 円筒埴輪	25.3	—		外面ハケメ、内面ナデ	にぶい橙(5YR6/4)	3mmの砂粒含	口縁部1/12以下残	硬質埴輪の酸化焼成か。
174	10-1	SE20	G-9 SK1	須恵器 壺	26.6	—	頸部径 23.4	ロクロナデ	外：灰褐(7.5YR6/2) 内：明褐灰(7.5YR7/2)	精良	小片	酸化焼成気味。頸部径は仮定。
175	33-4	SK42	E-2 SK1	土師器 皿	16.8	1.9		底部外面未調整、他はナデ	橙(5YR7/6)	精良	口縁部1/2残	
176	13-6	SK42	E-2 SK1	土師器 高杯	—	—		ナデ	橙(2.5YR7/6)	精良	脚部上半完存	
177	14-6	SK42	E-2 SK1	製塩土器 鉢	18.0	—		外面未調整、内面ナデ	外：淡橙(5YR8/4) 内：にぶい橙(5YR7/4)	3mmの砂粒含	小片	口径は仮定。
178	13-3	SK42	E-2 SK1	須恵器 壺	—	—	高台径 12.7	ロクロナデ	外：灰(N5/) 内：灰白(N7/)	1mmの砂粒・雲母含	底部1/2残	
179	40-1	SB4	F-3 P1	土師器 杯	14.5	2.5		底部外面未調整、他はナデ	橙(7.5YR6/6)	1mmの砂粒含	口縁部1/4残	口縁部に煤付着。
180	32-1	SB4	F-3 P1	黒色土器 椀	17.5	5.8	高台径 9.8	底部内面ヘラミガキ、内面全面燻し、外面ナデ	明褐(7.5YR5/6)	5mmの小石含	口縁部1/6残、高台ほぼ完存	A類。内面に簡略なラセン暗文。
181	32-3	SB4	F-3 P1	製塩土器 鉢	15.3	5.0	底径 16.8	内面工具ナデ、外面未調整	にぶい橙(7.5YR6/4)	6mmの小石含	小片	口径は仮定。
182	40-2	SB5	E-3 P1	土師器 杯	14.7	3.7		底部外面未調整、内面放射暗文	橙(5YR6/6)	2mmの砂粒含	口縁部1/6残	
183	51-3	SB5	E-3 P1	土師器 杯	15.0	3.0		底部外面未調整、他はナデ	外：橙(5YR7/6) 内：橙(5YR6/6)	2mmの砂粒含	口縁部1/3残	
184	51-2	SB5	F-3 P6	土師器 皿	20.6	3.0		底部外面ヘラケズリ、他はナデ	橙(5YR7/6)	精良	口縁部1/12残	
185	55-8	SB5	F-3 P6	土師器 高杯	20.6	—		杯部外面ヘラケズリ、他はナデ	橙(5YR7/6)	微砂粒若干含	口縁部1/6残	
186	31-3	SA41	N-10 P1	土師器 杯	14.9	3.3		底部外面未調整、他はナデ	橙(5YR6/6)	2mmの砂粒含	ほぼ完形	
187	51-1	SA41	M-10 P6	土師器 皿	19.6	2.4		底部外面未調整、他はナデ	橙(5YR7/8)	微砂粒・雲母含	口縁部1/6残	
188	51-6	SB12	I-6 P1	土師器 筒状土器	17.8	6.4	底径 16.0	未調整	外：橙(2.5YR6/8) 内：黄橙(7.5YR7/8)	7mmの砂粒含	口縁部1/12以下残	口径は仮定。
189	51-4	SB13	I-6 P10	土師器 杯	17.0	3.1		底部外面未調整、他はナデ	橙(5YR7/8)	2mmの砂粒含	口縁部1/6残	
190	51-5	SB13	I-6 P10	土師器 皿	8.0	1.0		ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	雲母含	口縁部1/6残	
191	50-1	SB13	I-6 P10	製塩土器 鉢	—	—	底径 15.0	ナデ	橙(2.5YR7/6)	微砂粒含	底部小片	底径は仮定。
192	49-5	—	H-9 包含層	縄文土器 鉢	—	—		外面突帯、内面ナデ	にぶい橙(5YR7/4)	4mm以下の砂粒多含	口縁部小片	
193	22-7	—	H-9 包含層	土師器 蓋	—	—		天井部外面ヘラミガキ、内面工具ナデ	橙(7.5YR6/6)	精良	天井部1/6残	
194	43-2	—	H-8 包含層	土師器 蓋	15.8	3.0		天井部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	橙(5YR7/6)	精良	天井部1/4残	口縁部と天井部の境にヘラケズリ。
195	54-7	—	G-8 包含層	土師器 杯	16.0	2.9		底部外面ヘラケズリ、内面放射暗文	にぶい橙(5YR6/4)	1.5mm以下の砂粒含	口縁部1/6残	
196	28-5	—	H-9 包含層	土師器 杯	—	—		底部外面ヘラケズリ、内面ラセン暗文	外：明赤褐(2.5YR5/6) 内：橙(2.5YR6/8)	5mm以下の小石・赤色粒含	底部1/4残	内面に線刻。
197	48-9	—	H-9 包含層	土師器 杯	—	—		外面ヘラケズリ、内面ラセン暗文	橙(5YR7/6)	微砂粒・赤色粒含	底部小片	内面に線刻。
198	57-5	—	H-1-9 包含層	土師器 杯	19.0	5.0		底部外面ヘラケズリ、他はナデ	橙(5YR7/6)	1mmの砂粒若干含	口縁部1/6残	
199	48-8	—	H-9 包含層	土師器 杯	14.2	3.5		ナデ	にぶい橙(5YR6/4) ～灰褐(5YR4/2)	微砂粒含	口縁部1/12残	焼成不良のため黒斑状。
200	48-2	—	H-9 包含層	土師器 杯	18.6	4.5		ナデ、底部外面ヘラケズリ?	橙(5YR6/6)	赤色粒含	口縁部1/12残	摩滅が激しく調整不明瞭。
201	40-4	—	—	土師器 杯	12.7	3.0		底部外面未調整、内面ナデ	外：橙(5YR7/8) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	3mmの砂粒多含	1/3残	摩滅が激しく調整不明瞭。
202	27-3	—	H-9 包含層	土師器 杯	14.4	3.3		ナデ	橙(5YR6/6)	2mm以下の砂粒含	口縁部1/6残	

第1表 遺物観察表

番号	実測 番号	遺構	出土 位置	器種 器形	法 量 (cm)			調整技法の特徴	色 調	胎土	残存度	備 考
					口径	器高	その他					
203	9-1	—	H-9 包含層	土師器 杯	14.1	3.1		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	橙(2.5YR6/6)	精良	口縁部3/4残	内面に線刻「井」。
204	9-2	—	H-9 包含層	土師器 杯	13.5	3.0		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	橙(5YR 7 /6)	精良	口縁部3/4残	内面に線刻「井」。摩滅により調整 不明確。
205	27-6	—	H-9 包含層	土師器 杯	13.0	4.2		底部外面ヘラケズリ、内 面ラセン暗文	外：橙(5YR6/6) 内：橙(2.5YR6/6)	1mm以下の砂粒含	口縁部1/4残	
206	47-4	—	H-9 包含層	土師器 杯	15.4	3.1		—	橙(5YR6/8)	精良	口縁部1/6残	摩滅が激しく調整不明。
207	59-4	—	I-8 包含層	土師器 杯	12.6	2.9		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	にぶい橙(5YR6/4)	1.5mm以下の砂粒・赤色粒含	口縁部1/6残	内面にラセン暗文。
208	42-4	—	C-4 包含層	土師器 杯	15.0	3.1		ナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)	雲母含	口縁部1/6残	
209	54-6	—	F-4 包含層	土師器 杯	17.0	4.0		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	橙(5YR7/6)	微砂粒・赤色粒含	口縁部1/12残	摩滅が激しく調整不明確。
210	65-4	—	F-4 包含層	土師器 杯	16.0	3.2		底部外面未調整？、他は ナデ	橙(5YR7/8)	1mmの砂粒含	口縁部1/6残	摩滅が激しく調整不明確。
211	46-5	—	H-9 包含層	土師器 杯	13.6	3.1		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	橙(5YR6/8)	1mmの砂粒含	口縁部1/6残	摩滅が激しく調整不明確。
212	48-1	—	H-9 包含層	土師器 杯	14.0	3.1		ナデ	橙(2.5YR6/6)	1mm以下の砂粒・赤色粒含	口縁部1/3残	
213	54-2	—	F-3 包含層	土師器 杯	16.6	3.2		底部外面未調整、他はナ デ	にぶい橙(7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒・赤色粒含	口縁部1/12残	
214	54-11	—	G-8 包含層	土師器 杯	14.4	3.0		—	橙(7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒・赤色粒含	口縁部1/6残	摩滅が激しく調整不明。
215	40-3	—	—	土師器 杯	14.1	3.0		底部外面一部ヘラケズ リ、他はナデ	橙(7.5YR7/6)～橙(5YR7/8)	2mmの砂粒含	1/3残	
216	57-8	—	M-4 包含層	土師器 杯	17.0	3.5		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	外：灰褐(7.5YR4/2) 内：にぶい橙(5YR6/4)	1mmの砂粒若干含	口縁部1/12残	器壁内外面黒変。煤付着か。
217	65-3	—	F-4 包含層	土師器 杯	16.0	3.0		底部外面ヘラケズリ？、 他はナデ	外：橙(7.5YR7/6) 内：橙(2.5YR7/8)	0.5mmの砂粒含	口縁部1/6残	摩滅が激しく調整不明確。
218	28-3	—	H-9 包含層	土師器 杯	—	—		底部外面未調整、内面ナ デ	外：橙(5YR7/6) 内：橙(7.5YR7/6)	2.5mm以下の砂粒・赤色粒含	底部1/4残	外面に格子状線刻。摩滅が激しく調 整不明確。
219	48-10	—	H-9 包含層	土師器 杯	—	—		外面ヘラケズリ、内面ナ デ	橙(5YR6/6)	2mm以下の砂粒・赤色粒含	底部小片	内面に線刻。
220	42-7	—	H-8 包含層	土師器 杯	—	—		底部外面ヘラケズリ、内 面ナデ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：浅黄橙(7.5YR8/4)	精良	底部小片	内面に線刻。
221	65-7	—	F-3 包含層	土師器 杯	20.0	4.6		底部外面未調整、内面ヘ ラミガキ	外：橙(5YR7/6) 内：橙(2.5YR7/6)	精良	口縁部1/12残	
222	54-5	—	G-9 包含層	土師器 杯	15.4	3.1		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	橙(5YR7/6)	微砂粒・赤色粒含	口縁部1/6残	摩滅が激しく調整不明確。
223	66-6	—	F-4 包含層	土師器 杯	—	—		底部外面未調整、他はナ デ	橙(5YR7/6)	精良	底部小片	内面に線刻。
224	62-3	—	包含層	土師器 杯	14.0	2.6		底部外面未調整、他はナ デ	明赤褐(2.5YR5/8)	金雲母・1mm以下の砂粒含	口縁部1/4残	
225	54-4	—	G-4 包含層	土師器 杯	14.2	2.9		底部外面未調整、他はナ デ	にぶい褐(7.5YR5/3)	微砂粒含	口縁部1/12残	内面に煤付着。
226	64-3	—	D-2 包含層	土師器 杯	15.0	3.2		底部外面ヘラケズリ、内 面ラセン暗文	橙(2.5Y7/6)	雲母含	口縁部1/4残	
227	57-6	—	I-9 包含層	土師器 杯	14.0	3.0		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	橙(5YR7/6)	精良	口縁部1/6残	
228	42-6	—	H-8 包含層	土師器 杯	—	—		底部外面未調整、内面ラ セン暗文	外：橙(7.5YR7/6) 内：にぶい黄橙(10YR7/3)	精良	底部小片	内外面に線刻。
229	33-2	—	M-4 包含層	土師器 杯	14.5	3.0		底部外面未調整、他はナ デ	橙(5YR7/6)	1mmの砂粒・雲母含	口縁部3/4残	内面前面に煤付着。
230	58-4	—	M-4 包含層	土師器 杯	14.0	2.9		底部外面未調整、他はナ デ	外：にぶい橙(5YR7/3) 内：にぶい橙(5YR7/4)	1.5mmの砂粒・雲母含	1/3残	
231	65-5	—	F-3 包含層	土師器 杯	16.0	2.5		底部外面未調整、他はナ デ	浅黄橙(7.5YR8/6)	微砂粒若干含	口縁部1/6残	
232	54-3	—	F-2 包含層	土師器 杯	14.0	2.8		底部外面未調整、他はナ デ	にぶい橙(7.5YR7/4)	微砂粒・赤色粒含	口縁部1/12残	内面から口縁端部外面に煤付着。
233	59-5	—	包含層	土師器 盤	22.1	4.0		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	橙(5YR6/6)	1mm以下の砂粒・雲母含	口縁部1/12残	
234	57-7	—	B-4 包含層	土師器 高杯	20.0	—		—	浅黄橙(7.5YR8/6)	精良	口縁部1/12残	摩滅が激しく調整不明。
235	47-3	—	H-8 包含層	土師器 高杯	25.8	—		ナデ、一部工具ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	精良	口縁部1/12残	
236	54-9	—	G-8 包含層	土師器 高杯	—	—	底径 12.0	外面ハケメ、内面未調整	橙(5YR7/6)	赤色粒含	脚部1/4残	摩滅が激しく調整不明確。
237	43-3	—	C-3 包含層	土師器 高杯	—	—	脚柱部 4.2	外面ヘラケズリ、内面ハ ケメ	橙(2.5YR6/8)	1mmの砂粒含	脚柱部完存	
238	53-8	—	G-5 包含層	土師器 高杯	—	—	筒部径 4.4	外面ハケメ、内面ナデ	橙(5YR6/6)	赤色粒含	筒部完存	
239	9-3	—	H-9 包含層	土師器 皿	18.4	2.9		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	橙(5YR 7 /6)	1mmの砂粒含	ほぼ完形	
240	9-4	—	H-9 包含層	土師器 皿	20.7	2.3		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	橙(5YR 7 /6)	4mmの小石含	口縁部1/4残	内面に線刻「井」。摩滅により調整 不明確。
241	59-2	—	包含層	土師器 皿	22.0	2.3		底部外面ヘラケズリ、内 面工具ナデ	橙(5YR6/6)	2mm以下の砂粒・赤色粒含	口縁部1/12残	
242	48-3	—	H-9 包含層	土師器 皿	18.7	2.1		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	橙(5YR7/6)	1mm以下の砂粒・赤色粒含	口縁部1/6残	
243	27-1	—	H-9 包含層	土師器 皿	19.2	2.4		底部外面ヘラケズリ、内 面ナデ	にぶい橙(5YR7/4)	1mm以下の砂粒含	口縁部1/6残	
244	54-8	—	G-5 包含層	土師器 皿	18.6	2.3		底部外面ヘラケズリ、内 面ナデ	外：橙(5YR6/6) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	1.5mm以下の砂粒含	口縁部1/12残	
245	47-1	—	H-8 包含層	土師器 皿	21.1	2.5		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	橙(5YR6/6)	1mmの砂粒含	口縁部1/12残	
246	59-3	—	I-9 包含層	土師器 皿	22.2	1.8		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	橙(5YR6/6)	1mm以下の砂粒・赤色粒含	口縁部1/12残	内面にハケメ状の掻き取り痕。
247	48-4	—	H-9 包含層	土師器 皿	20.4	2.1		底部外面ヘラケズリ、他 はナデ	橙(5YR7/6)	微砂粒・赤色粒含	口縁部1/6残	摩滅が激しく調整不明確。

第1表 遺物観察表

番号	実測 番号	遺構	出土 位置	器種 器形	法 量 (cm)			調整技法の特徴	色 調	胎土	残存度	備 考
					口径	器高	その他					
248	59-7	—	包含層	土師器 皿	18.0	2.6		底部外面未調整、他はナデ	明赤褐(5YR5/6)	1mm以下の砂粒・雲母含	口縁部1/6残	
249	59-6	—	包含層	土師器 皿	18.6	2.2		底部外面未調整、他はナデ	橙(5YR6/6)	1mm以下の砂粒含	口縁部1/6残	
250	59-8	—	包含層	土師器 皿	20.7	2.1		底部外面未調整?、他はナデ	橙(7.5YR7/6)	赤色粒・微砂粒含	口縁部1/12残	摩滅のため調整不明確。
251	39-1	—	—	土師器 皿	17.9	2.3		底部外面未調整、他はナデ	橙(5YR6/6)	精良	口縁部1/8残	
252	39-3	—	C-1 包含層	土師器 皿	19.5	2.6		底部外面未調整、他はナデ	橙(5YR7/8)	精良	口縁部1/4残	
253	42-5	—	C-4 包含層	土師器 皿	9.0	1.4		底部外面未調整、他はナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	精良	口縁部1/6残	
254	42-8	—	C-4 包含層	土師器 皿	9.0	1.2		外面未調整、内面ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	精良	口縁部1/6残	
255	62-4	—	包含層	土師器 碗	14.0	3.2		底部外面未調整、他はナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mm以下の砂粒含	口縁部1/4残	
256	65-6	—	F-4 包含層	土師器 碗	12.0	3.7		底部外面未調整、他はナデ	浅黄橙(10YR8/3)	精良	口縁部1/6残	
257	48-5	—	H-9 包含層	土師器 碗	13.7	3.9		ナデ	浅黄橙(7.5YR6/4)	微砂粒含	口縁部1/6残	
258	65-2	—	F-7 包含層	土師器 碗	14.0	2.9		底部外面未調整、他はナデ	浅黄橙(10YR8/3)	精良	口縁部1/6残	外面黒斑状に焼成不良。
259	48-7	—	H-9 包含層	土師器 碗	12.0	3.1		外面未調整、他はナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	微砂粒・赤色粒含	口縁部1/6残	
260	49-4	—	H-9 包含層	土師器 碗	12.4	3.4		外面未調整、内面ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	微砂粒・赤色粒含	口縁1/4残	
261	33-1	—	L-2 包含層	土師器 鉢	13.4	3.4		底部外面未調整、他はナデ	浅黄橙(10YR8/3)	3mmの砂粒含	完形	内面に線刻。
262	58-5	—	M-4 包含層	土師器 鉢	13.8	—		外面ハケメ一部工具ナデ、内面工具ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	1mmの砂粒・雲母含	口縁部1/12残	外面のハケメは非常に細かく弱いもので、未調整にちかい。
263	46-3	—	H-9 包含層	土師器 甕	16.0	—		ハケメ	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：にぶい黄橙(10YR7/3)	精良	口縁部1/12残	
264	45-4	—	H-9 包含層	土師器 甕	16.0	—		ハケメ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：橙(7.5YR7/6)	1mmの砂粒含	口縁部1/12残	
265	37-5	—	D-2 包含層	土師器 甕	16.5	—		外面ハケメ、内面ヘラケズリ	外：にぶい黄橙(10YR6/3) 内：浅黄橙(10YR8/3)	1mmの砂粒若干含	口縁部1/3残	
266	46-2	—	H-8 包含層	土師器 甕	18.0	—		ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	
267	45-2	—	H-8 包含層	土師器 甕	17.8	—		ハケメ	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：にぶい黄褐(10YR5/3)	精良	口縁部1/6残	外面一部に煤付着。
268	41-2	—	H-8 包含層	土師器 甕	18.0	—		外面浅いハケメ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリ	外：にぶい赤褐(2.5YR5/4) 内：にぶい赤褐(5YR5/3)	1.5mmの砂粒・雲母含	頸部1/4残	
269	46-1	—	H-9 包含層	土師器 甕	21.0	—		ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/4)	精良	口縁部1/12残	
270	45-3	—	H-7 包含層	土師器 甕	24.1	—		外面ハケメ、内面工具ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	外面一部に煤付着。
271	53-6	—	E-2 包含層	土師器 甕	19.0	—		外面ハケメ、内面ナデ	外：橙(5YR7/6) 内：浅黄橙(7.5YR8/3)	2mm以下の砂粒含	底部1/12残	
272	66-1	—	F-3 包含層	土師器 甕	14.0	—		外面ハケメ、内面ナデ	外：にぶい黄橙(10YR6/3) 内：にぶい黄褐(10YR5/3)	1mmの砂粒・雲母含	口縁部1/6残	
273	45-1	—	H-9 包含層	土師器 甕	19.9	—		外面ナデ、内面工具ナデ一部ヘラケズリ	外：にぶい橙(5YR6/4) 内：にぶい黄橙(10YR6/3)	2mmの砂粒含	口縁部1/6残	外面に煤付着。
274	41-4	—	H-8 包含層	土師器 甕	23.6	—		ハケメ	外：橙(2.5YR7/6) 内：褐灰(5YR5/1)	雲母含	口縁部1/6残	
275	44-2	—	H-9 包含層	土師器 甕	40.4	—		ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/4)	2mmの砂粒含	口縁部1/12残	口縁端部外面に沈線。
276	44-1	—	H-8 包含層	土師器 甕	40.1	—		ハケメ	浅黄橙(10YR8/3)	3mmの砂粒含	口縁部1/12残	頸部屈曲部を強く凹線状にヨコナデ。
277	44-3	—	H-9 包含層	土師器 甕	26.0	—		外面ナデ、内面ハケメ	にぶい橙(7.5YR6/4)	1mmの砂粒含	口縁部1/12残	
278	64-2	—	D-2 包含層	土師器 甕	13.0	—		ハケメ	にぶい橙(7.5YR7/3)	精良	口縁部1/4残	
279	62-1	—	包含層	土師器 甕	26.0	—		ハケメ	にぶい橙(7.5YR7/4)	赤色粒・3mm以下の砂粒含	口縁部1/6残	
280	59-1	—	I-8 包含層	土師器 甕	26.0	—		外面ハケメ、内面工具ナデ	外：にぶい橙(7.5YR6/4) 内：にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm以下の砂粒含	口縁部1/6残	
281	41-3	—	H-8 包含層	土師器 甕	26.0	—		ハケメ	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：浅黄橙(7.5YR8/4)	0.5mmの砂粒・雲母含	口縁部1/6残	
282	64-1	—	D-2 包含層	土師器 甕	14.0	—		ハケメ	浅黄橙(10YR8/3)	精良	口縁部1/6残	
283	41-1	—	H-8 包含層	土師器 甕	26.0	—		ハケメ	にぶい橙(7.5YR7/4)	雲母若干含	口縁部1/6残	
284	62-2	—	包含層	土師器 甕	24.0	—		ハケメ	外：灰黄褐(10YR4/2) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	赤色粒・2mm以下の砂粒含	口縁部1/12残	
285	58-2	—	M-4 包含層	土師器 甕	23.0	—		ハケメ	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：浅黄橙(10YR8/3)	雲母若干含	口縁部1/6残	
286	49-2	—	H-9 包含層	土師器 甕	34.0	—		ハケメ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：灰白(10YR8/2)	4mm以下の砂粒含	口縁部小片	口径は仮定。
287	60-4	—	I-8 包含層	土師器 甕	37.6	—		ハケメ	外：にぶい黄橙(10YR7/2) 内：灰黄褐(10YR4/2)	1.5mm以下の砂粒含	口縁部小片	
288	60-3	—	I-8 包含層	土師器 甕	37.8	—		ハケメ	浅黄橙(10YR8/4)	3mm以下の砂粒含	口縁部小片	
289	49-1	—	H-9 包含層	土師器 甕	26.3	—		ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/4)	3mm以下の砂粒・赤色粒含	口縁部1/12残	器種器形は仮定。
290	66-5	—	D-2 包含層	土師器 甕	—	—	底径20.0	外面ハケメ、内面ヘラケズリ	外：橙(5YR7/6) 内：にぶい橙(5YR7/4)	2mmの砂粒含	底部1/12残	底部孔は円形。
291	53-5	—	C-5 包含層	土師器 甕	—	—	底径17.4	ヘラケズリ	外：灰褐(7.5YR6/2) 内：にぶい橙(7.5YR7/3)	3mm以下の砂粒多含	底部1/6残	
292	49-3	—	—	土師器 甕	—	—	底径22.7	外面下端ヘラケズリ、他はハケメ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：浅黄橙(10YR8/4)	4mm以下の砂粒含	底部1/6残	

第1表 遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種 器形	法 量 (cm)		調整技法の特徴	色 調	胎土	残存度	備 考
					口径	器高 その他					
293	66-4	—	包含層	土師器 鍋	25.0	—	ナデ	外：灰褐(7.5YR6/2) 内：灰褐(7.5YR5/2)	精良	口縁部1/12以下残	
294	43-4	—	C-7 包含層	土師器 鍋	48.0	—	外面ハケメ、内面ナデ	外：黄灰(2.5Y6/1) 内：浅黄橙(10YR8/3)	精良	口縁部小片	口径は仮定。
295	54-10	—	G-6 包含層	土師器 羽釜	32.0	—	ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	1.5mm以下の砂粒含	口縁部小片	口径は仮定。
296	66-2	—	F-5 包含層	製塩土器 鉢	18.3	5.6	外面未調整、内面ナデ	外：橙(5YR7/8) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	1.5mmの砂粒含	小片	口径は仮定。
297	42-9	—	H-8 包含層	製塩土器 鉢	20.0	—	外面未調整、内面工具ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	2mmの砂粒含	口縁部小片	口径は仮定。
298	63-1	—	包含層	製塩土器 鉢	—	—	底径17.5 外面未調整、内面ナデ	橙(2.5YR6/6)	2mm以下の砂粒多含	底部1/12残	
299	59-9	—	包含層	黒色土器 鉢	20.0	—	ヘラミガキ	外：にぶい黄褐(10YR5/4) 内：黒(2.5Y2/1)	1mm以下の砂粒・金雲母含	口縁部1/12残	A類。
300	66-7	—	F-4 包含層	ロクロ土師器 碗	—	—	底径7.0 底部外面糸切未調整、他はロクロナデ	橙(7.5YR7/6)	精良	底部1/4残	
301	43-1	—	H-8 包含層	土師器 カマド	—	—	ハケメ	浅黄橙(10YR8/3)	精良	脚付近小片	
302	62-5	—	H-8・9 包含層	土師器 カマド	—	—	外面未調整+ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mm以下の砂粒含	小片	小片のため器種不明確。
303	33-5	—	C-7 包含層	土鉢	1.8	—	残存重11.9g ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	精良	両端欠損	孔直径6mm。
304	50-2	—	E-3 P7	須恵器 蓋	16.8	3.8	天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：灰(N6/) 内：灰白(5Y7/1)	0.5mmの砂粒含	天井部1/12残	天井部外面に線刻。
305	66-3	—	F-7 包含層	須恵器 蓋	20.0	—	ロクロナデ	外：灰白(2.5Y7/1) 内：灰白(5Y7/1)	微砂粒若干含	口縁部1/12残	内面に自然釉が掛かる。
306	42-10	—	H-8 包含層	須恵器 蓋	—	—	天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰白(7.5YR8/2)	精良	天井部1/4残	摩滅が激しい。焼成不良。
307	53-3	—	G-5 包含層	須恵器 蓋	16.4	—	天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	外：灰(N6/) 内：黄灰(2.5Y6/1)	微砂粒含	口縁部1/12残	
308	37-2	—	I-9 包含層	須恵器 杯	13.0	3.2	高台径9.3 底部外面未調整、他はロクロナデ	黄灰(2.5Y6/1)	0.5mmの砂粒若干含	底部1/2残	
309	37-4	—	I-8 包含層	須恵器 杯	16.5	6.0	高台径12.8 底部外面未調整、他はロクロナデ	褐灰(10YR5/1)	1.5mmの砂粒含	1/6残	高台に別個体片軸着。
310	42-2	—	C-5 包含層	須恵器 杯	—	—	高台径8.0 底部外面未調整、他はロクロナデ	灰(N5/)	1.5mmの砂粒・雲母含	底部1/6残	高台外面を故意に打ち欠いている。
311	53-1	—	E-2 包含層	須恵器 杯	—	—	高台径16.1 底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰白(2.5Y7/1)	1.5mm以下の砂粒含	底部1/6残	
312	63-3	—	H-8・9 包含層	須恵器 杯	—	—	高台径13.8 底部外面未調整、他はロクロナデ	外：灰白(2.5Y8/2) 内：灰白(5Y7/1)	微砂粒含	底部1/12残	摩滅のため調整不明確。焼成不良。
313	63-5	—	包含層	須恵器 壺	—	—	体部径13.7 ロクロナデ	黄灰(2.5Y6/1)	3.5mm以下の砂粒含	体部1/4残	
314	63-4	—	包含層	須恵器 壺	11.1	—	ロクロナデ	灰(N6/)	1mm以下の砂粒含	口縁部1/12残	外面に自然釉がかかる。
315	63-6	—	包含層	須恵器 壺	—	—	高台径6.5 底部外面未調整、他はロクロナデ	灰(N5/)	1mm以下の砂粒含	底部1/2残	
316	38-2	—	F-4 包含層	須恵器 匙	—	—	体部径9.2 底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰(N5/)	2.5mmの砂粒含	体部1/2残	体部にヘラ記号「×」。
317	60-2	—	包含層	須恵器 高杯	—	—	ロクロナデ	灰(5Y6/1)	1mm以下の砂粒含	脚柱部完存	
318	53-2	—	E-2 包含層	須恵器 高杯	—	—	底径8.2 ロクロナデ	灰白(5Y7/1)	1mm以下の砂粒含	底部1/4残	
319	58-1	—	J-5 包含層	須恵器 甕	38.0	—	ロクロナデ	外：灰白(N7/) 内：灰(N6/)	3mmの砂粒含	口縁部1/12残	口縁部外面に羽状刻目+ハケメ状工具による浅い沈線。
320	42-3	—	C-5 包含層	灰釉陶器 碗	14.8	—	ロクロナデ	灰白(5Y7/1)	精良	口縁部1/12残	灰釉ハケ塗り。
321	45-6	—	H-8 包含層	灰釉陶器 碗	—	—	高台径8.9 底部外面ナデ、他はロクロナデ	灰白(2.5Y7/1)	精良	底部1/6残	
322	57-1	—	D-4 包含層	灰釉陶器 碗	—	—	高台径8.0 底部外面未調整、他はロクロナデ	褐灰(10YR6/1)	1mmの砂粒若干含	底部1/4残	
323	6-6	—	G-3 包含層	灰釉陶器 皿	13.7	2.6	高台径6.8 底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰白(N8/)	微砂粒若干含	口縁部1/6、底部1/2残	灰釉ハケ塗り。
324	53-4	—	E-6 包含層	灰釉陶器 碗	—	—	高台径9.8 底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰白(5Y7/1)	1mm以下の砂粒含	底部1/6残	
325	64-5	—	D-6 包含層	灰釉陶器 碗	—	—	高台径8.0 底部外面糸切未調整、他はロクロナデ	外：褐灰(10YR6/1) 内：灰黄褐(10YR6/2)	雲母含	底部1/12残	
326	58-3	—	A-3 包含層	灰釉陶器 壺	—	—	ロクロナデ	外：灰(7.5Y5/1) 内：灰白(N7/)	2mmの砂粒・雲母含	体部上半1/12残	外面に灰釉。
327	63-2	—	N-2 客土	山茶碗 碗	—	—	高台径8.5 底部外面糸切未調整、他はロクロナデ	灰白(5Y7/1)	1.5mm以下の砂粒含	底部1/2残	
328	57-3	—	B-4 包含層	山茶碗 碗	—	—	高台径7.8 底部外面未調整、他はロクロナデ	灰白(2.5YR7/1)	微砂粒・雲母若干含	底部1/6残	
329	57-4	—	B-4 包含層	山茶碗 碗	—	—	高台径8.2 底部外面未調整、他はロクロナデ	外：黄灰(2.5Y6/1) 内：灰白(2.5YR7/1)	0.5mmの砂粒若干含	底部1/3残	高台に靱殻痕。
330	65-8	—	F-5 包含層	山茶碗 碗	—	—	高台径9.0 底部外面未調整、他はロクロナデ	灰白(10YR7/1)	精良	底部1/4残	
331	57-2	—	D-4 包含層	山茶碗 碗	—	—	高台径7.8 底部外面未調整、他はロクロナデ	外：褐灰(10YR6/1) 内：灰白(10YR7/1)	雲母含	底部1/4残	底部内面使用痕。硯に転用か。
332	65-1	—	D-2 包含層	山茶碗 碗	—	—	高台径9.8 ロクロナデ	灰白(2.5Y7/1)	2mmの砂粒含	底部1/4残	内面磨耗。硯に転用か。
333	64-4	—	D-4 包含層	山茶碗 碗	—	—	高台径9.0 ロクロナデ	灰白(2.5Y7/1)	1mmの砂粒若干含	底部1/6残	高台に靱殻痕。
334	64-6	—	D-7 包含層	山茶碗 碗	—	—	高台径10.1 ロクロナデ	灰白(2.5Y7/1)	精良	底部1/12残	内面磨耗。硯に転用か。
335	42-1	—	C-5 包含層	山茶碗 碗	—	—	高台径8.6 ロクロナデ	灰白(N7/)	雲母含	底部1/6残	
336	60-1	—	H-2 包含層	山茶碗 碗	—	—	高台径10.8 底部外面未調整、他はロクロナデ	灰白(2.5Y7/1)	1.5mm以下の砂粒含	底部1/4残	底部内面磨耗。硯に転用か。
337	45-5	—	H-8 包含層	青磁 碗	—	—	高台径7.2 ロクロナデ	素地：にぶい褐(7.5YR6/3) 釉：明オリープ灰(5GY7/1)	精良	底部1/6残	
338	20-3	—	H-7 SK3	瓦 平瓦	—	—	凹面布目、凸面ケズリ	凹：橙(5YR6/6) 凸：橙(2.5YR6/6)	1mmの砂粒含	小片	
339	61-1	—	I-9・G-5 包含層	瓦 丸瓦	—	—	凸面縄叩き、凹面布目	凸面：橙(5YR7/4) 凹面：浅黄橙(10YR8/3)	7mm以下の小石粒含	1/5残	行基式。

第1表 遺物観察表

VI. 結 語

1. 時期

今回の調査で検出された遺構の大半は奈良時代と平安時代のもので、出土遺物は、この時期の土師器杯・皿類が中心である。そこで、この種の遺物を多量に出土している史跡斎宮跡の編年^①に従って、詳細な時期を検討する。

(1) 奈良時代

奈良時代のもは出土遺物の大半を占め、特に土坑 S K 21 及びその周辺に集中する。S K 21 出土の遺物は、遺構の状況から一括性には乏しいものの、土師器の杯皿類の多くは底部外面にヘラケズリを施す。しかし、外面にヘラミガキを施すものはなく、斎宮第Ⅰ期第3段階～第4段階に並行するものと考えられる。竪穴住居 S H 16 出土の土師器杯も同様な特徴をもつが器高が低く、共伴する土師器甕の肩の張る体部形態等から奈良時代でも末頃にちかく斎宮第Ⅰ期第4段階としておきたい。一方、S H 3 出土の土師器杯は器高が高く放射暗文を施すものもあり、S H 16 より古相を示す。共伴する須恵器蓋・杯は猿

投の第Ⅳ期^②に収まるものであり、斎宮第Ⅰ期第3段階としておきたい。他の奈良時代の遺構出土遺物や包含層出土遺物を加味した結果、奈良時代とした遺構は全て斎宮第Ⅰ期第3段階～第4段階に相当するものと考えられ、その中心は斎宮第Ⅰ期第4段階に並行するものである。したがって、若干遡る遺構があるものの奈良時代の後半、8世紀後半の時期が与えられる。

(2) 平安時代

平安時代としたものでは S E 1 から比較的まとまった出土があった。S E 1 出土の土師器杯のうち、混入と考えられる 151 を除く 153～158 は、底部外面に指頭圧痕を残すものが多く、口縁端部も内に肥厚する様子がないことから、斎宮第Ⅱ期第3段階から第4段階とほぼ並行する時期、概ね9世紀後半から10世紀前半の時期が与えられる。これは共伴する土師器甕 161 や灰釉陶器 165 の特徴とも矛盾しない。S E 20 は混入遺物が多いものの、黒色土器 171 が出現していることや口径・器高共に縮小し、底部外面未調整、口縁部が外反する特徴の土師器皿 169 から同様

遺構名	規模			棟方向	柱間寸法		時期	備 考
	桁×梁	桁行(m)	梁行(m)		桁行(m)	梁行(m)		
SB4	3×2	5.85	3.6	N42° E	1.8+1.8+2.25 2.25+1.95+1.65	2.25+1.35	平安	SB5に切られる。
SB5	3×2	5.85	3.6	N42° E	1.8	2.1 2.25+1.35	平安	SB4を切る。
SB6	2×2	2.6	2.4	E8° N	1.3	1.2	奈良	
SB7	4×(2)	5.55	(1.95)	E22° N	1.5+1.35+1.2+1.5	1.95+α	平安	
SB9	3×2	5.1 5.55	3.6	N39° E	1.8+1.8+1.5 1.8+1.65+2.1	1.8	平安	北面に底。
SB10	3×2	6.0	3.6	E19° S	2.4+1.8+1.8 2.25+1.95+1.8	1.8	平安	東側1間を間仕切。
SB11	3×2	5.25	4.05	E36.5° S	2.1+1.65+1.5 2.25+1.5+1.5	1.95+2.1 1.65+2.4	平安	
SB12	3×2	5.4	4.05	E21° S	1.8	2.4+1.65	平安	
SB13	3×2	5.1 4.65	3.75	E24° S	1.8+1.8+1.5 1.5+1.5+1.65	1.8+1.95 1.65+2.1	平安	SB14に切られる。
SB14	3×2	3.45	2.85	E3° N	1.15 0.9+1.2+1.35	1.35+1.5	奈良	SB13を切る。
SB15	(4)×2	(5.7)	3.3	N38° E	α+1.35+1.65+1.5+1.2 α+1.35+1.65+1.2+1.5	1.65	平安	間仕切あり。
SB17	3×3	4.65	4.35	N16° E	1.35+1.8+1.5 1.35+1.5+1.8	1.65+1.35+1.35 1.35+1.65+1.35	平安	
SB22	2×2	3.6	3.15	N2° E	1.8	1.5+1.65 1.65+1.5	平安	
SB23	4×(2)	7.05	3.15	E23° S	2.25+1.8+1.5+1.5 2.25+1.5+1.5+1.8	(1.65)+(1.5)	平安	
SB24	3×2	5.7	3.45	E9° S	2.1+1.8+1.8	1.5+1.95	平安	
SB25	(3)×(2)	(4.65)	(1.95)	E15° S	2.4+2.25+α	1.95+α	平安	

第2表 掘立柱建物一覧表

な時期が与えられる。

建替え関係にあるS B 4・5柱穴出土遺物のうち、S B 5柱穴から出土した土師器杯183は外反する口縁端部や底部未調整、比較的薄い器壁やヨコナデの範囲等の特徴から斎宮第Ⅱ期第4段階と並行する時期が与えられる。S B 5に先行するS B 4からは、残存度の比較的良好な黒色土器碗180が出土しており、両者は10世紀初頭から中頃の約50年間に建替えられ、その後廃絶したものと考えられる。さらに、これらと棟方向を揃えるS B 9・11・15も同時期に推定できる。さらに、S A 41柱穴から完形で出土した土師器杯186もS B 5と同様の特徴をもち、同時期と考えたい。

さて、S B 11の棟方向を変えて建替えたS B 12と方向を揃えるものにS B 10・17・23・25があり、これらが一群を構成する。

S B 13から出土した土師器皿190は小型化したもので器高も限界ちかくまで低下していることから斎宮第Ⅲ期第3段階に並行するものと考えられ、同じ柱穴から共伴する土師器杯189の特徴とも矛盾はない。したがって、当遺跡検出の掘立柱建物のうち最も新しく、11世紀後半のものとなる。S B 13の棟方向は、S B 12の一群とほぼ同じである。このため、その一群の時期を斎宮第Ⅲ期第3段階まで引き下げ、同じ一群とすべき推測も成り立つ。しかし、既述したようにS B 12がS B 11を建替えたものならば、両者に100年以上の期間を与えることになり、一般的に掘立柱建物の寿命が20年程度とされることと矛盾する。S B 12からは黒色土器片が出土していること、斎宮第Ⅲ期第3段階に並行する遺物の出土が包含層を含めても極めて少ないことから、S B 12の一群をS B 11の一群の直後に続くものとして、S B 13は単独で斎宮第Ⅲ期第3段階に並行する時期と考えたい。なお、S B 7・22・24については、詳細な時期を決定する根拠を欠き、ここでは平安時代とするに止める。

以上の結果から、平安時代の遺構は平安時代中頃と末頃の2時期に大きく分かれる。前者では井戸出土遺物に若干古い特徴を示すものがあるが、井戸は掘立柱建物に伴うと考え、同時期としておきたい。

2. 記号

今回の調査結果の特徴として、何らかの記号が付けられた土器が39点も出土していることがある。この内、古墳時代の須恵器に付けられたものが2点ある他は全て奈良時代に属するものである。

奈良時代に属するものの出土分布は非常に偏っており、S K 21及びその周辺包含層等からの出土が記号を付けた遺物の90%を占める。器種別では、土師器粗製碗に付けられたものが3点の他は全て土師器の杯皿類である。

次に記号の種類としては、「#」と記すものが多く、小片であるが「#」と推測できるものを含めると60%を占めることになる。小片のため直線部分しか確認できなかったものが、その一部である可能性を秘めることを含めると、記号の大半が「#」であったものと推測できる。関東地方出土の墨書土器の字形を研究した平川南は『各地の墨書及び線刻の「#」の多くのものが井戸の「井」ではなく、その字形から判断すると、呪符等に用いられるドーマンとよばれる魔除け記号の「#」と理解できる』と結論付けている^③。斎宮跡出土のものを集成した大川勝宏は、井戸等の湧水関係遺構からの出土がないことに着目し、字形の観察を含め平川の意見に同意している^④。当遺跡のもの大半は焼成後に鋭利な工具により線刻されており、その形態から井戸の「井」とするよりは、直線を交差させたものと解する方が妥当で、やはり平川に同調できるものである。この他に格子状のもの(218)、「#」を○で囲むもの(106・197・228)、格子を○で囲むもの(219)があるが、斎宮跡でも類似のものが出土しており呪的な記号と理解されている^⑤。

このように、奈良時代には当遺跡において魔除け関係の祭祀が行われており、S K 21はその際に使用された土器の廃棄場所であったようである。また、その祭祀に使用された土器は土師器の杯皿類であったことが分かる。

3. 遺構の変遷と性格

今回の調査では、縄文土器や古墳時代後～末頃の須恵器が出土しており、それぞれの時代に宮ノ沖遺跡での人々の営みが想定できるが、それを示す遺構

はない。古墳時代の遺物については、隣接する美濃田古墳群や別当垣外遺跡の影響が考えられるが詳細は不明である。ここでは、今回の中心時期である奈良～平安時代について、記述した詳細な時期をもとに当調査区の遺構変遷とその特徴にふれる。

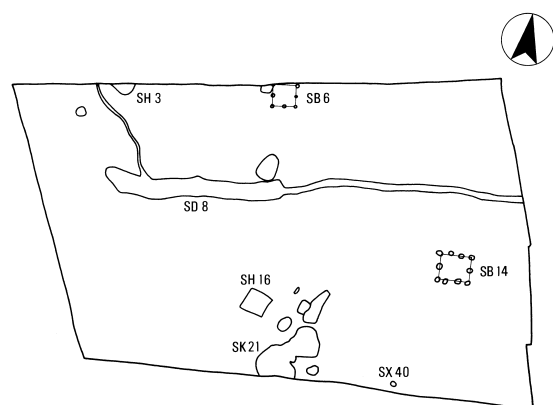
（１）奈良時代後半＝斎宮第Ⅰ期第３～４段階並行

湧水溝SD 8、竪穴住居、墓、倉庫風の建物２棟、多数の土坑等で構成される。注目されるのが調査区を東西に横切るSD 8である。SD 8はその西端から湧水し、東へ流れ出る溝であるが、既述したように西側と東側では大きく様相が異なり、東側が排水溝状を呈するのに対し、西側は溝状の湧水池的な状況を呈している。水汲み場とするには長さ20mの規模は過大と思われ、湧水に関する何らかの祭祀を行う場所であったと推測したいところである。一方、調査区南端のSK 21からは、既述したように魔除け関係の祭祀に使用された土器が多く投棄されている。SD 8からの魔除け記号を付けた土器の出土は１点に止まり、他に祭祀を想定できる遺物の出土もない。したがって、今のところ両者を関係付けることは拙速である。また、両者の間に位置する竪穴住居SH 16は一辺2.5mの小型のものである。この時期の竪穴住居は規模が縮小する傾向にあり、一辺4 mほどのものが主流となっている^⑦。こうした傾向のなかでも小型の部類にはいり、住居としての機能に疑問のあるものである。したがって、特殊な機能を想定したいところであるが、祭祀関係の遺物は出土していない。

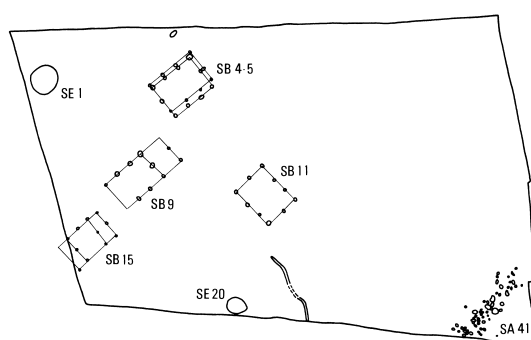
以上、不明確な部分も多いものの、日常的な生活の場とは異なる場であったことを想定しておく。湧水溝や廃棄土坑、小型の竪穴住居、墓としたSX 40等が魔除けの祭祀に結びつくものかどうかは不明とせざるを得ない。

（２）平安時代中頃①＝斎宮第Ⅱ期第４段階並行

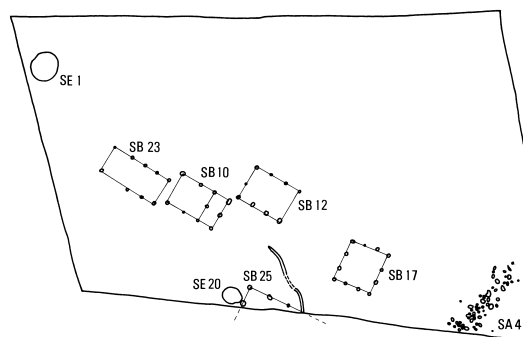
奈良時代の遺構が廃絶の後、100年程度の期間を開け、掘立柱建物と井戸で構成される集落が出現する。建物は建替え関係にあるSB 4・5を１棟とすれば４棟で構成される。SB 5の南側柱列の延長上に接してSB 9の北側柱が、SB 9の南側柱列の延長上にSB 15の妻柱がそれぞれ位置し、計画的な配置が窺える。また、柴垣状遺構SA 41で区画されて



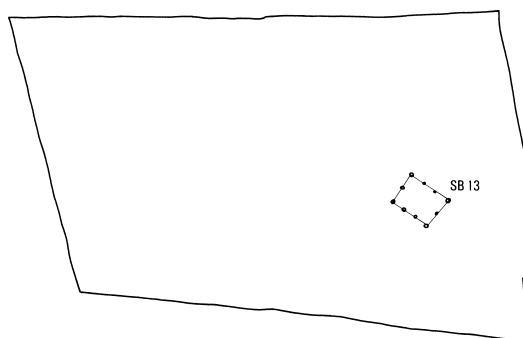
奈良時代後半



平安時代中頃①



平安時代中頃②



平安時代末頃

0 15m

第25図 遺構変遷図（１：800）

おり、建物との間に空間を保有している。建物の配置や規模は官衙的なものではないものの、複数の建物を所有することができる者の屋敷とすることには無理がないものと思われる。なお、前代にみられた祭祀に関連する遺物は、当時期では出土していない。

（３）平安時代中頃②＝斎宮第Ⅱ期第４段階並行

前代のＳＢ11の建替えに伴う一群で、５棟の建物と井戸で構成される。前代との時期差は少ないことが想定され、様相にも大きな変化はない。ただし、棟方向が北東から北西に大きく変更されている。ＳＢ25は比較的規模の大きい建物で、これらの一群の主屋の可能性がある。なお、柴垣状遺構ＳＡ41は柱穴の密集状況から、ここでも存続していたものと推測できる。２基の井戸ＳＥ１・20については両者がこの一群に伴うものかどうかは不明である。ただし、ＳＢ25とＳＥ20が接近しすぎており、この一群に伴う井戸はＳＥ１である可能性が大きい。

（４）平安時代末頃＝斎宮第Ⅲ期第３段階並行

前代から100年程度の間隔を空け、再び建物が出現するが、１棟のみであり集落縁辺部の様相である。それに続く中世では、耕作溝の検出で示されるように耕地として利用されていたことが分かる。再び集落となることはなく、この土地利用が現在まで続いているのである。

〔註〕

- ① 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』2001
- ② 齊藤孝正「猿投・美濃須衛」『季刊考古学第42号』雄山閣 1993.1
- ③ 平川南「墨書土器とその字形」『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』国立歴史民俗博物館 平成3年11月
- ④ 大川勝宏「斎宮跡の祭祀と出土遺物」『三重県史資料編考古2』三重県 平成20年3月31日
- ⑤ 前掲④に同じ
- ⑥ 松阪市教育委員会『松阪市遺跡地図』2008年3月
- ⑦ 森川常厚「古代集落概要」『三重県史資料編考古2』三重県 平成20年3月31日

報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時	報告書	調査時			
SE1	B3－SK1	SD8	C4－SK3 東西大溝	SB13	L6－P10 L6－P11	SK21	H9－SK1 H9－SK2	SD29	D3－SD2 C4－SD1	SD35	L6－SD12 L7－SD2			
SK2	B2－SK1	SB9	D5－P2 D5－P3		L6－P13 L7－P1		H9－SK3 H9－SK4		C4－SD2 C6－SD2		L9－SD1			
SH3	D2－SK1		E5－P1 E5－P2		L7－P3 L6－P1		H9－SK5 H9－SK6		D3－SD3		SD36 SK37	H8－SD3 I8－SK1		
SB4	E2－P5 E3－P3 E3－P4		D6－P1 D6－P3 E6－P1	SB14	L6－P2	SB22	—	SD30	C5－SD1	SK38 SK39	I8－SD2 I9－SK2			
	F3－P1 F3－P4	SB10	F7－P1 F7－P2 F7－P3	SB15	—				SB23	D6－SD2	SK40	K10－P1		
	F3－P4		E6－P1	SB16						G7－SB1 H7－SB1	C6－P1 D6－P4 E6－P3	E7－SD1	N8－SK1 N8－P2 N9－P1	
SB5	F2－P2 E3－P1 E3－P2		SB11			G5－P1	SB17	J8－P1 K9－P1		SB24 SB25	G7－P2 —	SK31 SK32	— H4－SK1	N9－P2 O9－P1 M10－SK1
	E3－P8 F3－P2 F3－P6	SB12			G6－P4	SK18		H8－SK2	SD26	A2－SD1 A3－SD1	SD33			J5－SD1 J5－SD2 K5－SD1
	H2－P2 H2－P3			I6－P1	SK19	I9－SK1		SD27	A2－SD2	K5－SD2 L5－SD1				M10－SK5 M10－P6 M10－P7
SB6	K2－P2		H7－P2	SE20	G9－SK1	SD28	D3－SD5 D4－SD2	SD34	—	SK42		E2－SK1		
SB7														

第3表 遺構番号対照表



調査区北西側全景（東から）



調査区西側全景（東から）



調査区南西側全景（東から）



調査区北東側全景（西から）



調査区東側全景（西から）



調査区南東側全景（西から）



S H16 (南から)



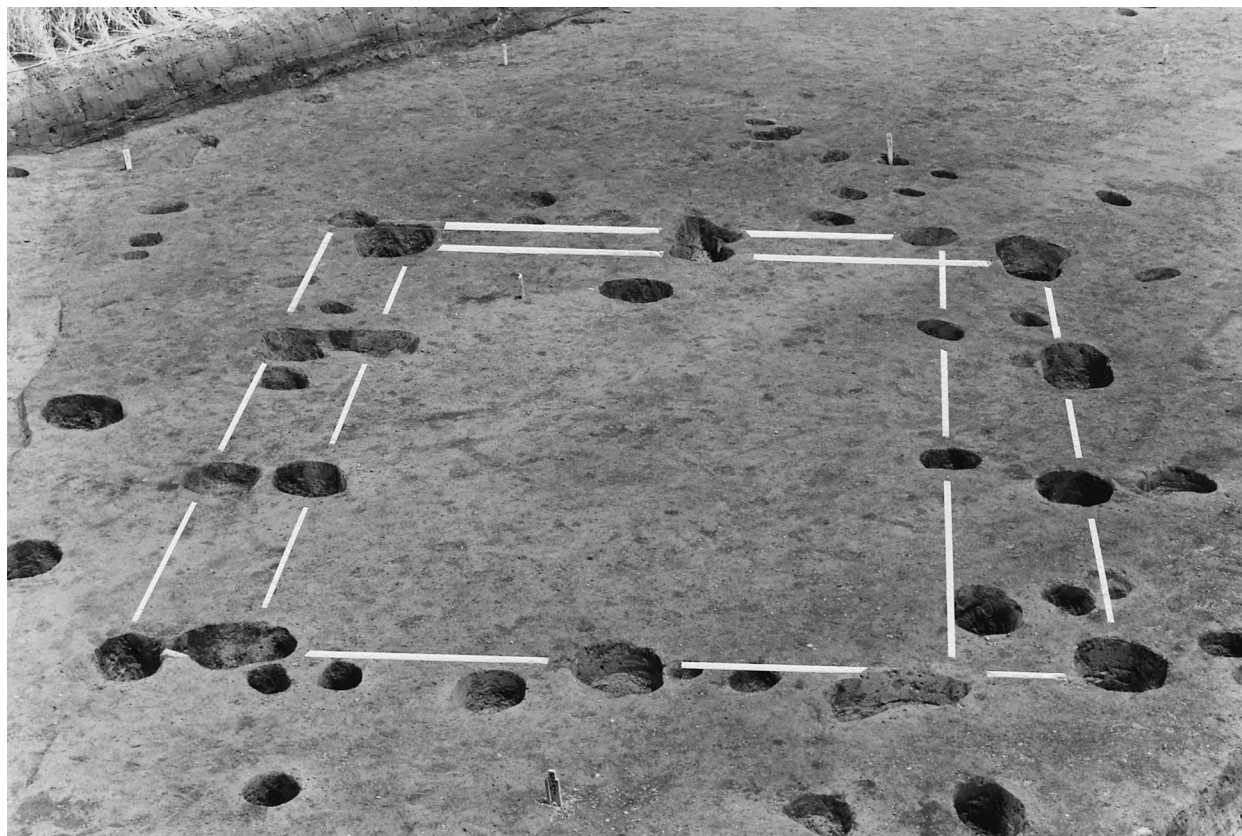
S H16カマド (南から)



S H16カマド断面（西から）



S B14（北から）



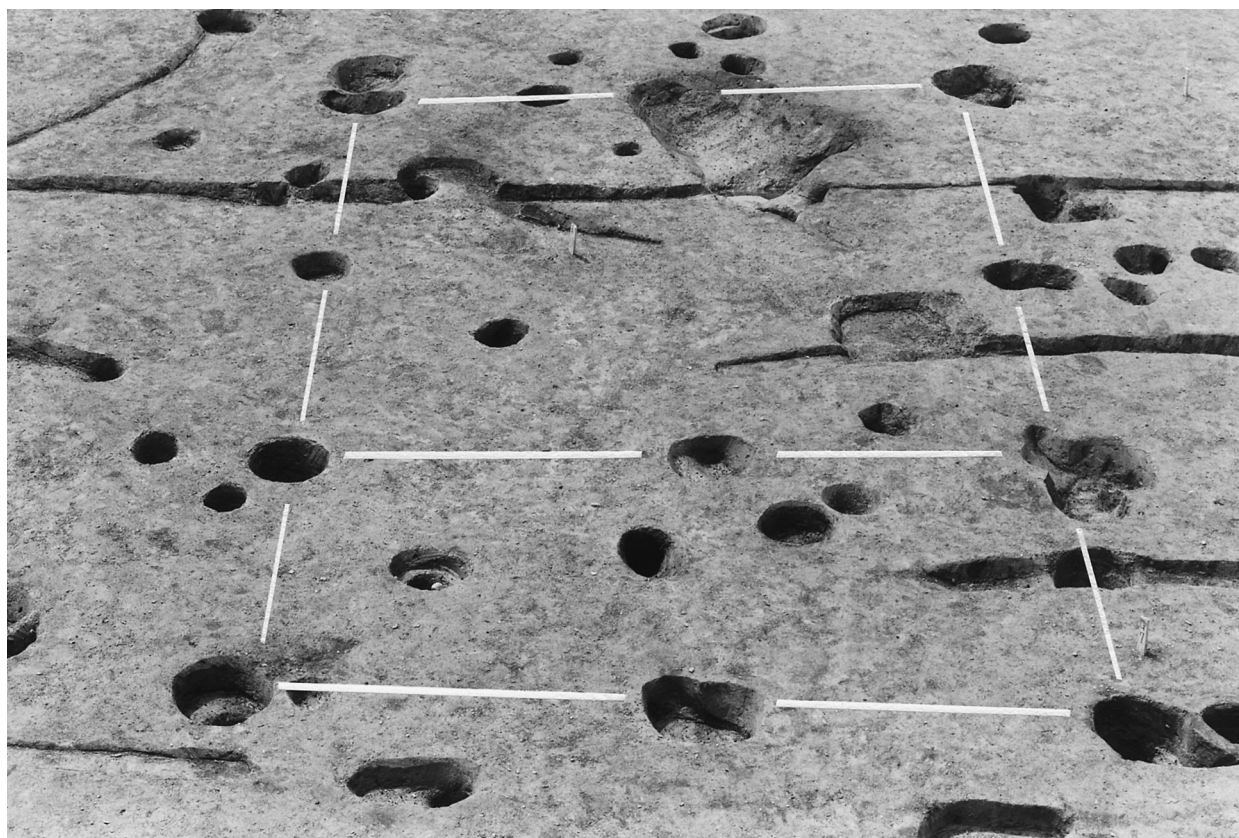
S B 4 ・ 5 (南西から)



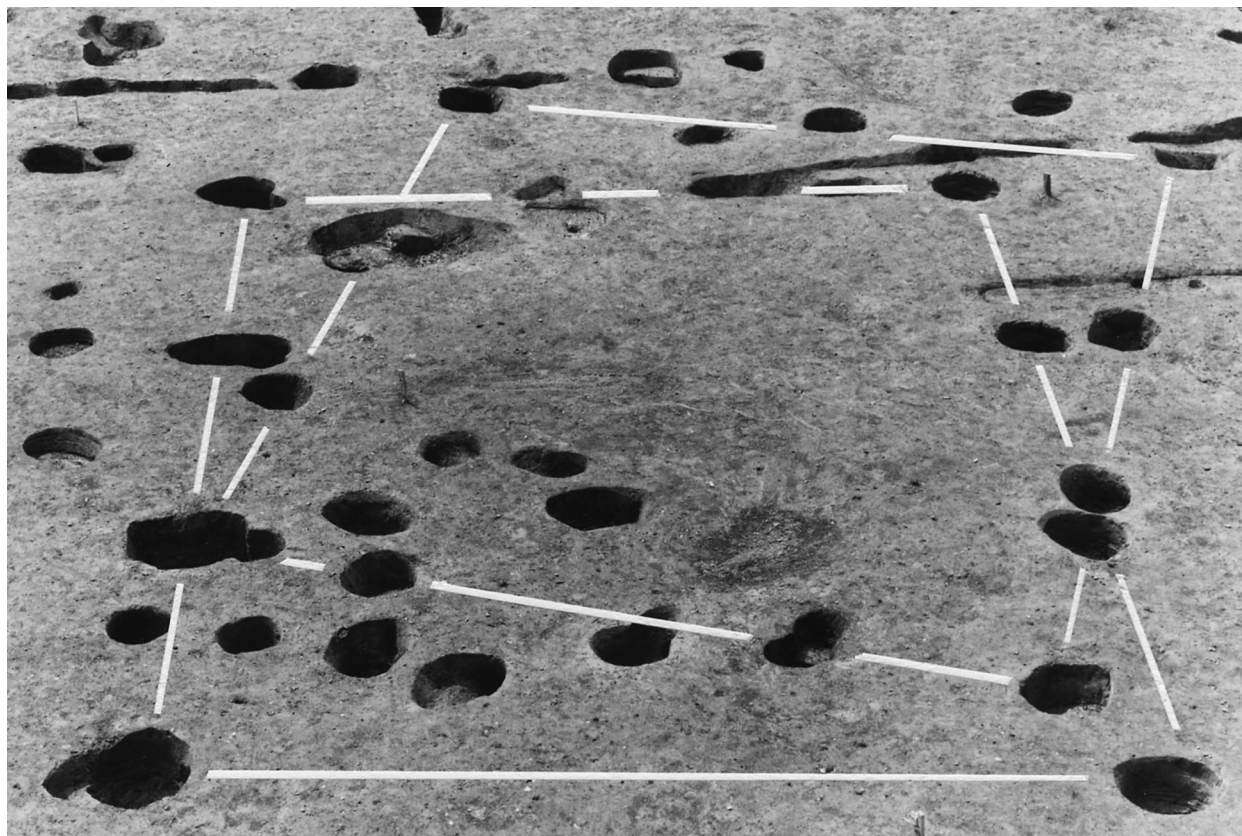
S B 7 (西から)



S B 9 (南西から)



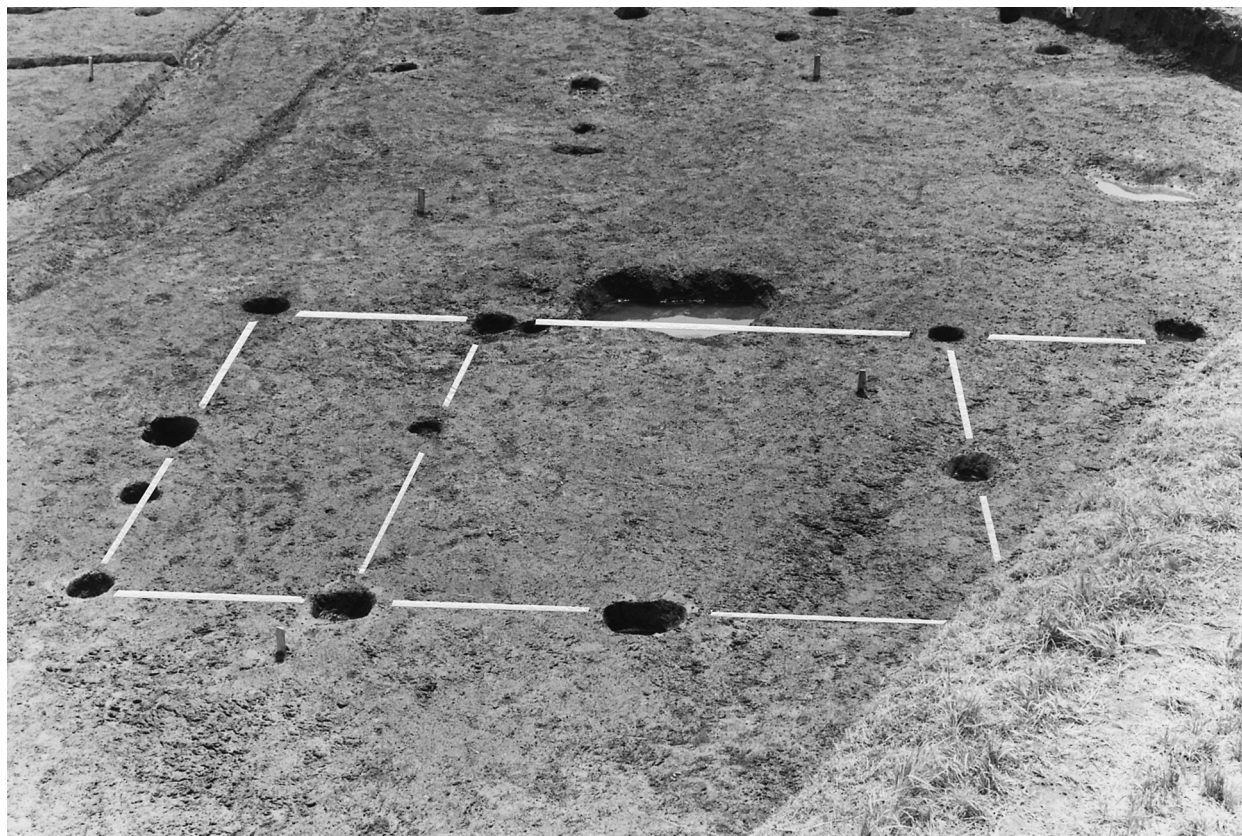
S B 10 (東から)



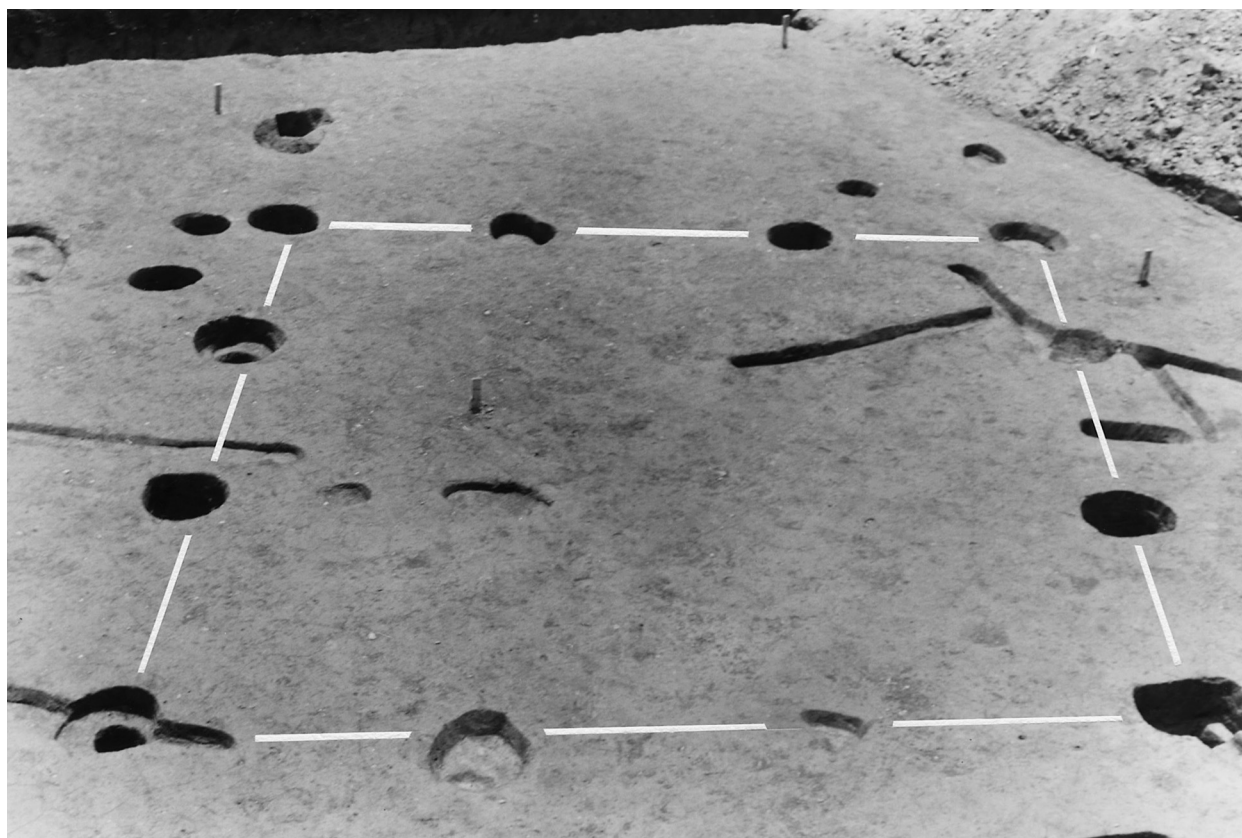
S B11・12 (東から)



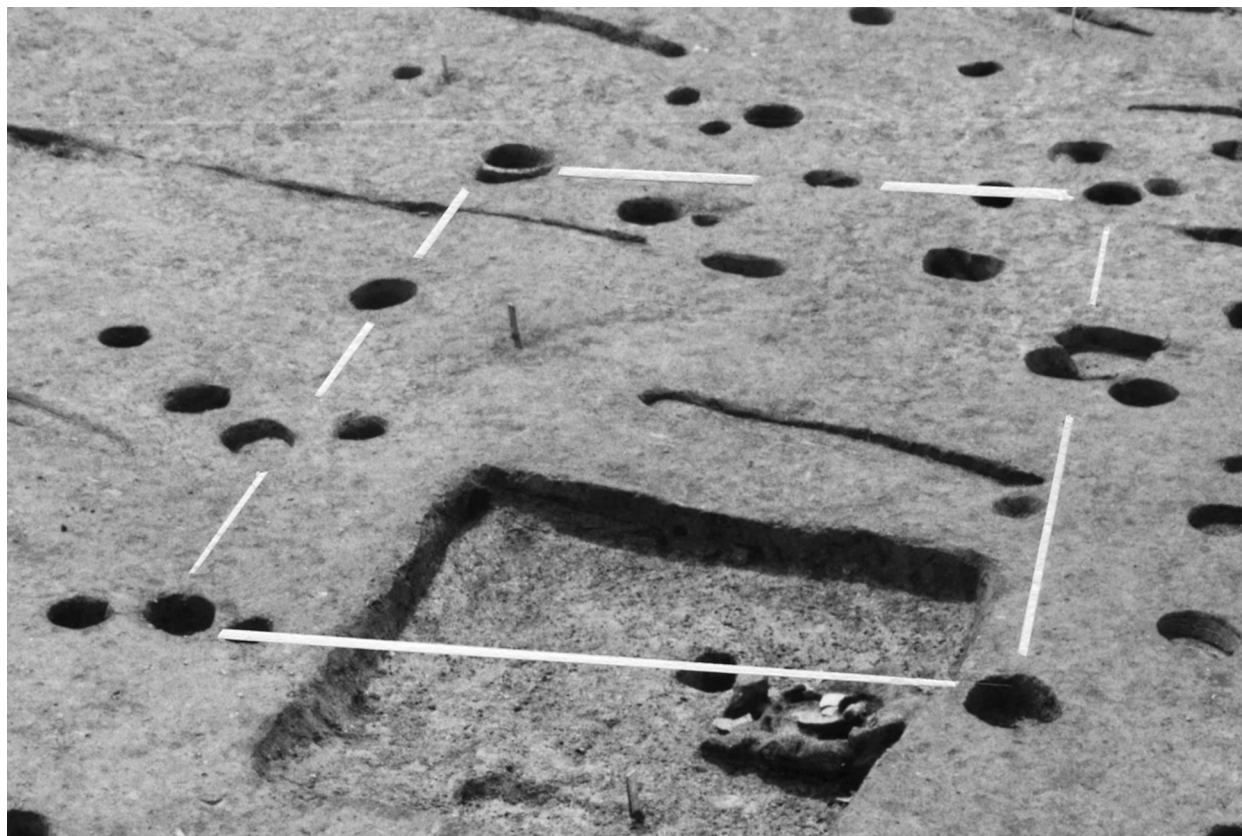
S B13 (北から)



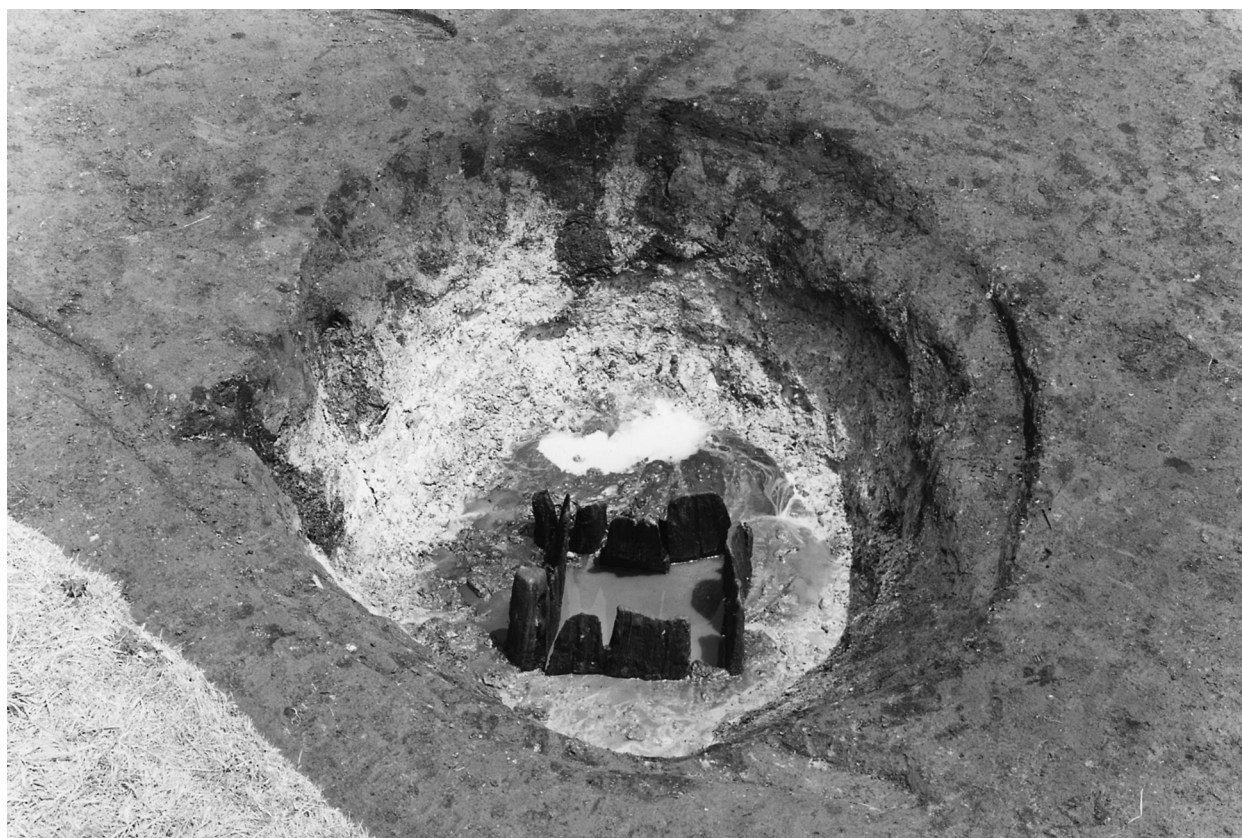
S B15 (北西から)



S B17 (北から)



S B24 (東から)



S E 1 (南西から)



S K21 (東から)



S X40 (北から)



56



66



79



133



203



204



261



186

出土遺物



42



47



154



155



229



90



139



96



239



150



175



28



180



130



128



323



338



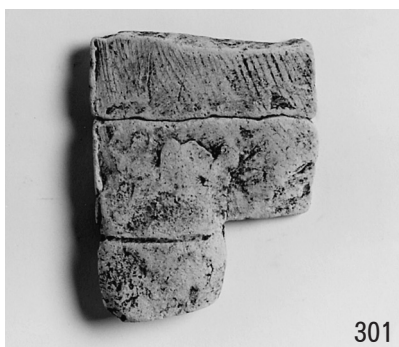
339



339



192

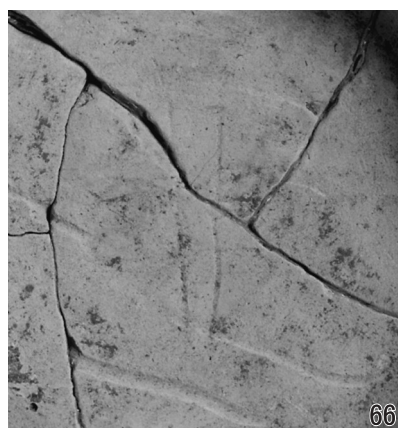
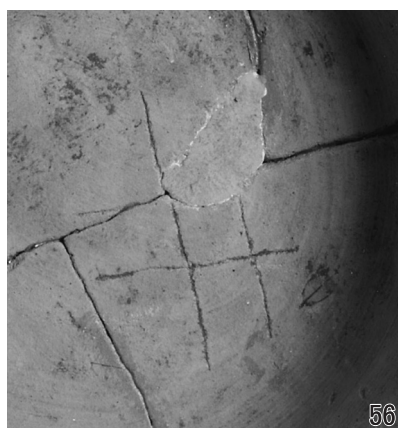
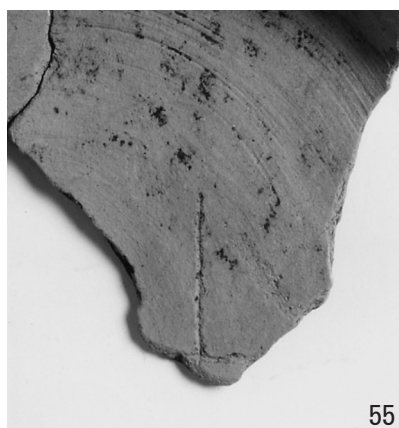
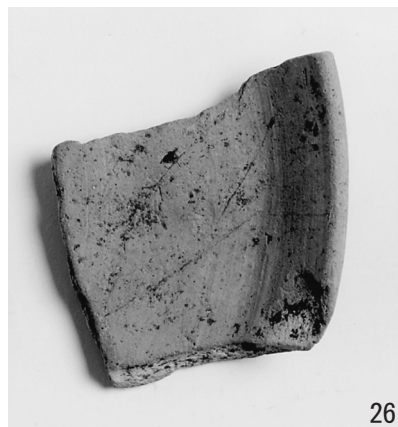
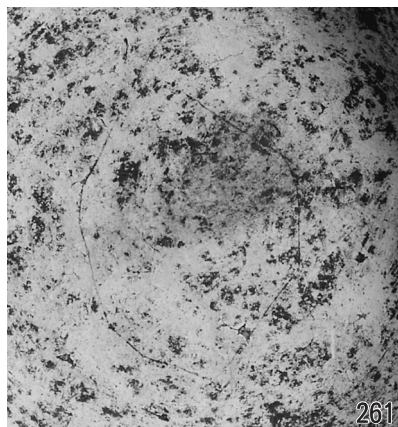
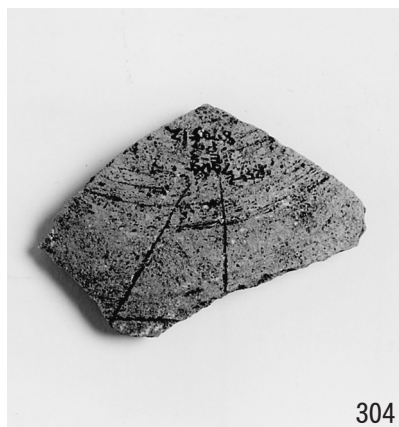
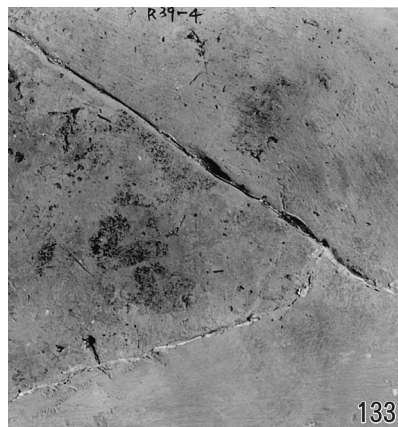
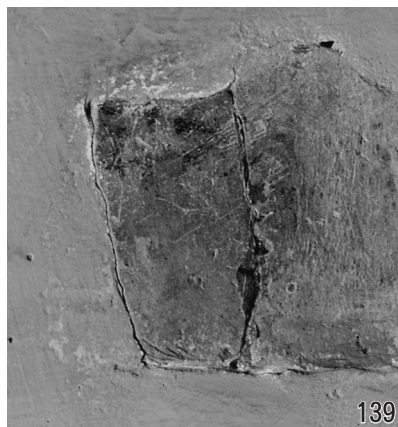


301

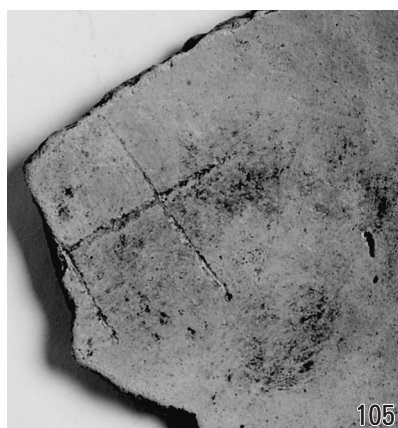
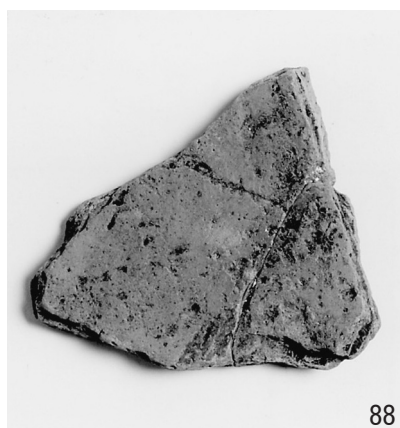
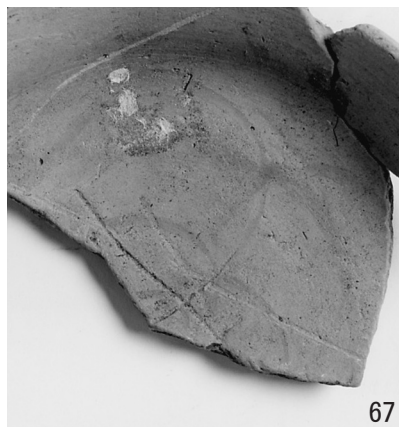


302

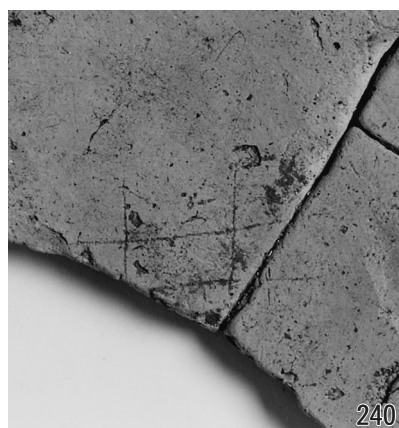
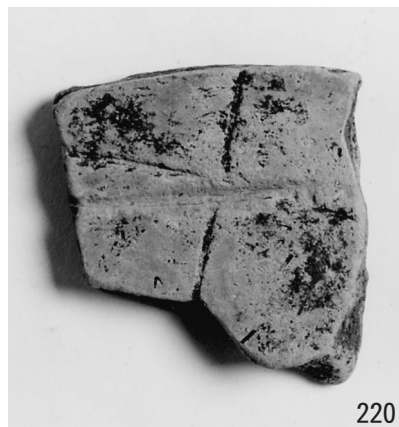
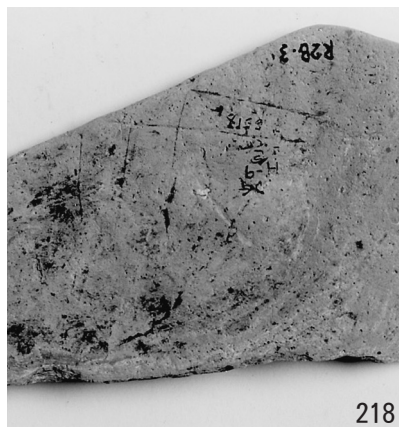
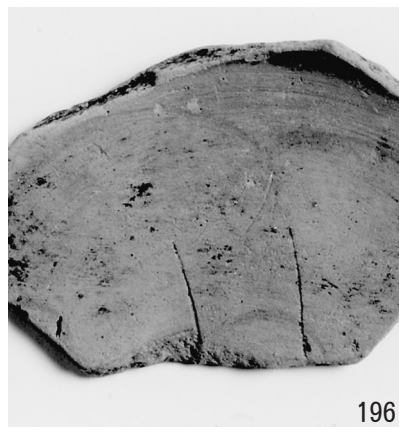
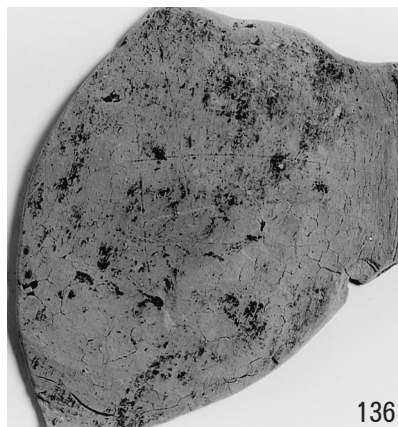
出土遺物



墨書・記号



記号



記号